

かし清朝の隆盛な時に比しては比較にもならぬのである。三代文字の研究としては北京國立大學國學研究所で沈兼士教授等の攷究を見たり又かつて羅振玉、王國維の諸學者の研究に成つたものを始めとして色々のものがあるが、三代文字資料としての新材料の方面になると頗る少ない感じがする。時世が動亂つゞきであつた爲め貴重な材料の在り場所の明白になることは秘藏者の最も好まないところであるし、従つてたとひ人に見せたくとも人に見せられない。見せて發表でもされると大變であるとして肯んじないと云ふやうな事情もあるのである。

三代の重物にして地下室に秘藏したるものを自分どもに見せてくれたものもあるが、それも一般支那人同士の間には決して口を嵌して云はないのである。しかし以前にあつたものでその後亡くなつたものをよく聞いて見ると米國あたりへ出したものが多いとのことである。米國は美術品の輸入に對して釐澤税を課することをしない。のみならず國家の方針としても東洋古美術を採入れようとするの熱がある位であるから逸品珍品は殆んどアメリカへ散つて行つてしまふのである。日本は僅かばかりの國庫增收を計る爲めと云ふ口實の下に、三代は固より支那古美術と云ふ古美術は殆んど官邊の手がかり以外のところへは這入らないことになつてしまつた。アメリカ以外に歐洲にも大分出てゐるが近

來その數量が減じ、むしろ歐洲から米國へ向け流出してゐるとのニュースを聞く位である。

支那三代文化の研究は實物を本に考古學的に攷察せられなくてはならぬのであるが、その方面は日本の文化事業の方も未だ何等緒につかず支那側から却つて反對されたり委員が辭職をしたりして停頓の形であり殆んど見るべきものがない。之に反して米國は四川省始め北支地方に度々探檢隊を出して時局を餘所に着々實地の踏査を遂げ又その報告文を出してゐる。しかしいつもその探檢隊のメンバー中に日本の學者は除外せられてゐるのである。日本はこの文化的方面だけでもせめて日支兩國双方から親しみの心持ちで共同の三代研究の出来るやうな熱を高めて行きたいものであると思ふ。

## 十 金石龜甲文字

支那の文化の研究は是迄書籍の上からでなくては出来ぬものと考へられて居た。どんなに重要な事柄でも書籍の上に見えてゐなければ權威のないものとなり、又どんなに興味のある事柄でも歴史に載つてゐない事柄は價值のないものとせられてゐた。すべてこの書物本位で行くと云ふ文獻過重な傾向は久しく東亞學界の常弊をなしてゐた。固より老大國の研究のことなれば孰れの方面より入るにせよ、



古來の文獻記録は兎に角重要な手掛りとしなくてはならぬのである。

然し今日の機運はそれよりも一層具體的材料によつて古の文化を突きとめ、且つ之が研究方面にも大いに擴張を要することになつて來た。現に最近十數年以來支那河南並に新疆諸地方から有益な考古資料が發掘された結果、文化史の研究がよほど具體的になり、實物を確むるの傾向を生ずるやうになつた。書籍萬能主義の研究界は爲めに新しい空氣を入れて研究の基礎もやゝ堅實になつて來た。四千年前殷代の人々が龜卜に用ひた龜甲獸骨の斷片、又は二千年前漢代の人人によつて使用されてゐた木簡縑帛、その他六朝時代唐宋の頃の寫經佛畫の類が今日天與の神品として夥多しく現れて來た。中にも殷の龜甲斷片は其數、萬餘を算しその面に刻まれた元始的文字は繪文字をなして居て支那文明の搖籃時代を闡明するに最も有力な資料となつて居る。詩、書、易等の書物の上よりする上代研究は茲に殷の龜甲を獲て研究の範圍が著しく擴大されてきた。

支那文化史の出發點はこの龜甲文字の研究に在りとも云ひ得べく、又その研究によれば上古の法制經濟、祭祀、軍事、刑罰、博物、人情、風俗各般のことが判明するのである故、龜甲文字の研究は文化史の一新方面を劃するものと云つても過言であるまいと考へる。支那は書物の國であり文字の國で

ある。然しまた同時に非文字國でもある。古い事柄は多く書物に見えてゐるとは云ふけれども、其載録されてゐない社會現象がどれ位あるか判らぬ。又載録されては居ても事實を事實の如く録して居ない場合がいくら有るか判らぬ。又現在の卑近な土俗、人情、風習、傳説、迷信の如き一々書物に載録されないで口碑に残つてゐるものがどつさりある。又多くの技術に關することや道具のことなどになると殆ど記録の上に見えて居ないのが普通である。されば支那は文字國と云つても同時に文字に洩れた材料の多いことをも觀ておく必要がある。つまり現代の土俗、口碑、風習の類尙詳細に擧げ來れば趣味、信仰、冠婚、喪祭、占筮、遊戲、衣食住等を一々細かく闡明し、そして支那文化の神髓の研究に資することは斯道に向つて健全な基礎を與へる譯になるので頗る結構なことである。然るにこれ迄この方面は兎角等閑視されて來た。思ふにこれは學問の點ばかりでなく、日支親善の大局より見るも、吾人がその現代の各般の研究を遂げ且つその真相を理解しておくことは、日本人の立場として極めて必要なことである。現在及び將來に於いて支那の人々に接し交際、起業、取引、談判をなす等その交渉の頻繁なるべきは疑を容れぬ。それにも拘らず支那の事と云へば一般人の注意が緊張しない。加之極めて普通な日常生活のこと、趣味信仰の如きこと、國民性に關すること、何でもないことが却つて



その卑近な事の爲めにすべて閑却されて居ると云ふ情態である。

従來我が國に於いて支那問題と云へば南北兩派の政治論又は軍閥論などで持切りの體であつたが、今後はそれ以外幾多の文化の方面にそれ以上重大にして永久的價値のある研究問題のあることに留意されなくてはならぬのである。

現代の支那研究は現代の土俗、文化の方面よりすべく、現代の土俗、文化は必ずや古來五千年の歴史に關係があり、又地理、交通、氣候、政治、經濟各般の問題とも密接の關係を結んで居る。されば現代の文化の研究は畢竟古來漢族の養ひ來たれる國民性を現時の支那社會の現象に求めんとするに外ならぬのである。而してこれが研究には常に生きた支那社會の渦中に踏み込んで生きた土民に接觸し、そして生きた材料を蒐集することを必要條件とする。自分は年來三十回あまり支那旅行をして揚子江四川湖南廬山から泰山曲阜を始め山東各地に古の齊魯の故地を訪ね、又は北京を中心に北方、萬里長城、居庸關、明の十三陵山西大同府太原天龍山方面を驢馬で巡つて見た。南船北馬未だ幾何の視察も遂げた譯ではないが、所謂書籍研究以外、實際支那の地を踏んだ爲め獲られたかと思はれる特別の材料がいくらかあるから、單に論語、左傳、八家文などから今の支那を想像して居られる大方の君子の

爲めに、支那文化の小觀を陳べることとする。先づ古い時代に關係の多い文字のことより卑近を述べて江湖の吐正を仰ぎたいと思ふのである。

支那は建國以來文字を有し文字のお蔭で國家の統一が保たれて居ると云つてもよい位である。併し一方から見ると支那は近來文字の中毒に罹り文字の爲めに他のあらゆる國家的要素の進歩發達を犠牲にして居る。北京大學の教授の中にはこの中毒情態より國家を救ふべく在來の漢字を全廢して新字を用ひんことを絶叫して居るものさへある。けれども一般人は尙その中毒情態より覺めないでどこ迄も文字の美にあこがれて居る。電報を打つ時の如き極めて緊急を要する場合に於いてすら尙且つ文字の雕琢に腐心をする。そのどこ迄も文字に凝つて已まざる所の特性は支那民族五千年の歴史に歸因せるもので、上古の支那人が發達させた象形的繪文字は實に驚く程巧なものである。文字は支那民族の生命である。彼等特有の思想、民族性はその文字の上に宿つて居るものと見られる。されば支那上代の社會的文明は必ずしも書物の上のみに求めずとも古代文字そのものから澤山求められる。のみならずその文字によりて當時の文明を語るべき品物、風俗、習慣の具體的に判明するものが又甚だ多いのである。かやうに支那最古の文字は古代文明の結晶物の如きものであるから、これ等各種の古文の字體



の解剖的研究は支那上代の文化史の研究に資する譯になるのであつて、この方面に手を付けることになれば支那學に一つの新しい局面を開くことになるのである。今古代文化の一斑を文字の方面から探るべく二三の例を採つて卑見を陳べて見よう。

### 十一 貝の字に見る貨幣の考

貝は今から二千四五百年前少くとも秦始皇帝前後までよほど重んぜられてゐた。貨幣として財寶として貴重視せられ、又儀式用の飾としても身分の上下でその數に差等が付けられて居た位であつた。獨り古代支那許りでなく今日比律賓南洋諸島、阿弗利加ギニイ邊でも之を通貨或は裝飾に使つて居る所がある。而もそれらの貝と云ふは大抵寶貝一名子安貝（カオリ・セル）を用ひ六七分大のものを採つて居る。卵形で縦の裂目に添うて鋸齒状の切れ込みがある。之には骨片金石の模造品もあるが支那諸地方から發掘されるものは多くは小形のものである。

支那古代の繪文字を調べて見ると、この貝貨を連続して緡錢としたり又は貝そのまゝを財貨の符號として描寫して居るのが澤山ある。一體、串（貝二箇の連続）とか貫とか實とか云ふ字はもと貝の珠數

つなぎの象形を字素としたものでその意味は字面にも幾分現はれてゐる。然し時には論語に見えた有朋の朋の字の如く楷書の時に現はれた形丈では貝の緡錢たることの見えてゐないやうなものがある。今朋の字の源に遡つて見るとその元始形は人が貝貨を澤山有して居るに象られてゐる。而してその象形は横向きと正面向きとの二種があるが、これは孰れも殷周時代の古銅器の銘文に鑄込まれてあるのでよく判つて居るのである。即ち朋の字は次の如くであつた。



こは横向きの朋の古文でもと側（たがひ）の字と書く。



こは正面向きの朋の古文である。

尙朋儻の朋も朋友の朋と同音同義であつて古人は之を輔也の意に解して居る。思ふに貨幣で援助する人のことを指せるものなるか。後世でこそ朋は友人の義にのみ用ひられて居るが、詩經の中には我到百朋を錫ふとか、易には十朋之龜とか云ふ語のあるやうに、もと朋は貨幣の名として用ひられてゐたのである。周の世に貝貨五箇（緡聯）を朋と呼んで居たことから考へて見ると朋友の朋の原義も大抵判ぜられる。上記古文形に緡錢を左右兩肩に懸けて歩む象形字に關して吾人は之と同じ風習を今日



の支那に求むることができる。先年制錢が盛に支那内地から外へ輸出されてゐた當時天津、青島、上海邊ではいくらでもこの風習が見られてゐた。その時の光景を云つて見ると、支那人は穴錢に紐を通して長くしたものを幾條となく肩にかけ、そしてそれを官憲の目から遁れる爲めに寛かな支那服の上から蔽ひ纏うて全くそ知らぬ風を装ふのである。幸にも日本租界の内まで運び来れば最早支那の法律は之に及ばないのみか、買手側からむしろ保護される傾きがあつた爲め陸續肩にかけて持ち出されたものである。かやうな譯で今の風俗を古のそれに比べて見ると穴錢と貝貨との區別はあるが、とに角之を連続した形に拵へて居ることだけは古も今も變りはない。殊にその朋友朋黨の朋が本來財貨を主たる意味として居るところなどは、富者に非ざれば友とするに足りないとの如何にも徹底せる斷案を字面以外に聯想せしめ、人情に古今の違ひなきことを暗示せるところに頗る興味がある。

貝が古の貨幣であつた文字上の證據としては尙貝に因んだ諸種の合體文字があるので推知せられる。上代の風習殊に經濟關係の事柄には貝の字の合體から興味ある解釋が出来る。第一に貧乏の貧の字は分と貝との兩字より成立つ。家資を分散するの義である。貝が古財貨を代表して居たことは之によつても明かである。又貶の字の如きも財貨の損失窮乏の義より起れること言ふを俟たず、又贖の字、

賊の字の如きも財貨に關係の深い意味を有してゐる。その外上古の禹貢の貢の字の如きも、賦の字と共に之を考ふる時は上古の民が貝を上納して居た事實を想像し得るのである。こは猶租税の二字から古代の禾稻上納の事實を推知し得ると一般である。その外賣買とか購費とか、資賂とかのやうに後の金錢に因める事柄を示す文字は多く貝を有してゐる。更に縁の遠い方面の字であつても、例へば賢者の賢の字には多財の義が説文に見えて居る。こは多才とあるべきだと云ふ説もあるが字の成立ちより見て理財の方面を抜きにして考へることは出来ない。その他賚賜の兩字を見ても、頼刺と貝の合體)を見ても、或は祝賀の賀の字の如きものにも貝が用ひられて居る。慶の字が鹿皮を以て奉慶の禮物とせるに對し、賀は貝そのものを禮物としてゐた古俗を裏書きせるものである。又抵當質入の義なる贛の字に就きて見るも貝の字が含まれて居る。むかし漢の頃贛子の語の用ひられてゐたのもその當時、子を質入れて貝貨を得てゐた遺風の傳はつて居たことを聯想せしむるものである。貧民の子は親の手許の都合で質に入れられる。三年でも五年でも受出しに行かれない間はそのまま、婢僕奴隸として追ひ使はれるのである。又それが他に轉賣されることもあつたらしい。贛子とはその賣子の新規の家に行つてから附けられる稱呼であるが、兎に角子を擔保に入れて貝貨がそれによつて獲られると云ふ風



習のあつたことはこの贅の字によつて證明されるのである。

今日の支那の風習では子供で錢を得るに當(質屋)には入れに行かない直接賣りとばすのである。楕圓形の竹籠に入れて市井を賣つてまはるのである。生後三四ヶ月の少孩兒であると上海の相場で六七弗の墨銀なら賣買が出来る。小さい乳兒の間は男兒でも女兒でも價に大した違ひはない。十二三歳以上になつたものなれば勿論女の方が高く賣れるのである。又一方奴の字(女扁に又即ち手にて取るの義)などから考へて見ると女兒などは掠奪をして取つて来る。それを奴婢として使ふ時には之を奴と云ふのであると解かれる。併し今日支那の市中で日暮又は夜中は兒女の竊まれる危険があつて油斷がならぬと云ふことであるが之を考へると其行商が籠に入れて来る子供の如きも、どうせ他所で盗んで来たか拾つて来たかしたものであらうとの想像がつく。子供でも已に東西を辨へる年齢になつて賣られたものは買手なる主人が之を所謂贅子として働かせるのである。何かの場合に實家に歸つて父母を訪ねたいと云ふ本懐を願ひ出ることがある。すると主人主婦は決して之を許さない。子供はあけくれ泣き悲しんでゐると云ふ意味の記事が去る八月上旬の上海日々にも見えて居た。賣られた子供はどのやうな取扱ひを受けるか判らぬ。よい買手がつけば何時また轉賣されぬとも限らぬ。十五六歳迄養

つて置けば損をすることはないと考へてゐるものと見える。此やうな有様で今日の支那には子供の賣買が行はれて居るのである。山東省あたりで高粱畑の間から馬賊が現はれて来て旅客の行列を襲ひ主人公を人質に取つたり、又廓を有する豪族の家の主人公を奪つたりして巨萬の金を強要すると云ふやうなことも屢々あるが、これも一種の錢と人との交易である。古の贅の字の現はす意味は此れ程までにひどいことを示して居るのではないが子安貝の偉大な力の爲めに子供を質に入れると云ふ風習のあつたことを現はして居るのである。今日の支那の人情から推して考へると貝に對する古人の執着心と云ふものも相當に濃厚なものであつたであらう。貪の字、賄の字、賊の字、贓の字などに貝の字が含まれて居ることは隨に此間の消息を明かに告げてゐるものと解釋される。尙序ながら支那には知人の間柄で大金を借り受けその代りに働くことの出来る壯丁を債權者の家に遣はし其勞役を以て債務を濟崩しにする方法がある。或は借財を辨償期に返せない時はやつてある人間は賣られやうとどうされやうと抗議の限りでないと云つた方法もある。兎に角人間が金のかたに取られることは珍らしくはない。

## 十二 縣の字に見る刑の考



縣の字は云ふ迄もなく府縣郡村の縣である。禮記の王制には天子之縣内と云ふ語で見えて居る通り、殷周時代の所謂畿内の畿の字と同様に行政區域を現はす文字として知られて居る。しかし縣の字の元始的の意味はかやうな行政區域の意味を示して居るのではない。説文にも見えてゐる通り、もとは物を繋げるの義である。今此字の上代の形を見てみると木の字が含まれてゐて其上の端から系の字が書かれて居る。而して其系の下に首の字の倒形が懸けられて居るのである。其鐘鼎古文に遺つて居る字形を求めると次の如くである。



縣の字の古形二種（古文）此形は今から二千年以上も古い時代のもので筆畫は完全に遺つて



居るとは云へない迄も、其要領は得て居る。樹枝の高き部分より綱を下け之に人間の生首と思しきものをぶら下げたのに象つたものである。後其木の字が省かれるに至つた。



木の字を失へる縣の字の新形（小篆）

此小篆の形は今の楷書の縣の字の前身とも云ひ得られるが、此字體の構造は唯此に見えて居る丈の要素では明瞭に理解されない。此字の起源を突止める爲には是非とも古銅器に見る木扁の付いた古形

に遡らなくてはならぬ。加之、縣の字が上古木に从つて書かれて居たと云ふことは支那の古典を読む場合に頗る興味のある事實を發見するのである。若し今の縣の字だけを見るときは、其字面よりして人の首の倒形と系即ち綱の如きもの、配合文しか聯想されない。綱で倒にぶら下げられてあることが分るが古文の方である、此に木の字が加はつて居る。即ち上古の風習として樹木の枝に繩か綱かが掛けられてあつたことを考へ得られる。其木と云ふは後世の處刑臺のやうに木材を以て態々拵へたものでなく、立木其まゝを利用したと云ふことが分る。自然木の枝に繩を懸け、それに倒首が吊り下げられてあると云ふ事實が、其の古文形から讀めると云ふことは抑如何なる史實を物語るか。又其史實と此字の普通の意味である所の府縣の縣とは如何なる關係を有するか。

莊子や孟子の内に記された支那古代の習慣を察して見るに、恐らく支那有史以前の社會は必ずしも所謂堯舜の世とか、黄金時代とか云ふやうな者でなく、餘程現實的であつたらしい。時には又易のうちにも見えるやうに、上古の習慣の内には、例へば死體を葬る場合に後代のやうに土を盛つて土饅頭を拵へることをせず、唯草を以て蔽うた丈であつた。人類學的に見て、頗る面白い事實に數へることが出來「縣」の字の古形も亦之と同じ程度に上古の文化を物語つて居る。上古の社會には實際ありさ



うな事實で、殊に支那民族には如何にも似つかはしい事實が縣の字の成立の内に編込まれて居る。それは莊子や孟子の内に古の帝の懸解とか倒懸を解くが如し云々の語があるが、上古、民を懲戒する方法中最大極刑は人間を倒にぶら下げるにあつた、従つて若し天子が恵を垂れ、徳澤を普く行渡らせようとするには此倒懸の苦痛に遇つて居るもの、繩を解いてやるに限ると云ふことを云つて居るのである。此意味の倒懸の縣が即ち問題の縣の字に關係を有する字である。縣の字の左半は毛髪を垂れたる倒首の象であるが、次の如き形に書かれてゐる。


  (首)の字の倒形。

縣の字の場合には鼻首の意味で用ひられてゐるのではない。毛髪の垂れてゐる方向から察するも、これは人間のからだ全體の倒形である。つまり繩で兩足を括り、手も首も總て下に垂らしたまゝ、之を樹枝に懸けてぶら下げてあるのである。されば縣の字に於ける左半は人間のからだ全部の倒形の符牒であると見れば宜しい。然しかくの如くして出來た縣の字は懸けると云ふ義をいつしか漸次失ひ、單に處刑所の意のみに局限せられ、遂には一小地方の處刑區域のことのみを指さすに至つたものらしい。

い。それから後になつて處刑のことから全く離れて一般行政上の一地域丈に限つた意味に移つて來たものと説明されるのである。

### 十二 尊の字に關する酒器の考

尊と云ふ文字は周禮禮記あたりでは祭祀用の器物に關した意味で使はれて居る。一方には敬重敬虔の義で知られて居るが、本來は神前に酒器を供へるに左右兩手で以て奉持して居る所の象に起つて居る。つまり尊の字の古形は左の如くに現はれてゐる。

 酒器を兩手にて捧ぐる象。

酒器を捧げ階を登る義か。されば尊とはもと樽とか罇とか云ふ文字の示す通り名詞としてのの如き象形が配せられたるのは祠堂等の高所に供へらるべきものと云ふ義である。果して然らば尊の字がたとひ最初は禮器としての酒器の義に始まつたにせよ、後には單に敬虔尊重の義をとるに至つたのである。尙此種の例は上代公侯伯子男に授けられて居た盃即ち爵なるものが後には其本來の意味を



失ひ原義が移つて行つて遂に身分を現はす榮譽の地位を指すやうになつたのと似て居る。尊の字の意味の變遷は略これだ判明したと思ふが、さて次に然らば其尊の字の上半の「尊」はなぜ之に酒器と云ふ意味があるのであるか。思ふに上古の酒器の形は尊の字の古文の示す形に近い形をなし、



(龜版文)



(鐘鼎文)



左記の如き體裁であつたらしい。而も此酒器はかの黑黍で造られた香酒なる鬱鬯の鬯の字の古形と同じ、



鬯の字の古文 (酒器の象形)

本來容れ物の象形であつたかと考へる。尊(奠)と云ひ鬯と云ひもとは神酒に關係のあるものである。而して其容器が籠の象形から起つて居ると云ふことは一寸受取れぬ説のやうである。けれども外

見籠の形を有するものであつて事實其中に液體を容れて居る場合が支那には餘程澤山ある。又之に液汁の滴るやうなものを入れて居ることも屢々見る。籠と云つても其内面に豚の血を塗つたり又澁紙の如きものを貼つたりして、籠目から液汁が漏れないやうに出来てゐる。今日もかやうな籠は随分まだ土民に使用されて居る。又實際其容れ物として支那人の間で粗末な燒物、徳利或は小壺の如きものを使用する場合に於て、其外側を籠で以て編み包んで居るやうなことが多いのである。一見籠の如くに見えて其實口の部分に中から燒物の首の現れて居るものがある。龜版文や鐘鼎文に見る所の「酉」「尊」などの古形は即ち本來かくの如き物に象れるものと解せられる。一體支那人の日常生活には出稼ぎが多いから持ち運びに便利な形をしたものを多く使ふ。今日土民の使用せる平瓶にも全く平扁で圓形を爲した首の小さい酒容れがある。一擔の世帯道具を持ち運ぶとき瓶が球狀をなしてゐては困る故平たく造つたのを用ひるのである。小瓶、酒器などに籠を着せると云ふこともあり、運搬のときの破損を防ぐ爲めから來たものもあつて、現に土民が胡麻油などを運ぶ時の大壺の如きは殆どすべて之に籠が被せられてあつてそして其籠の底には網をかけてゐる。棒の兩端に此籠を吊るして運ぶのである。

此等の品物の構造は實際揚子江方面の片田舎を視察する際親しく實物を目撃してゐるので一層自分



の考へが確められた。従來象形文字の古い形を調べて居る時に酒の字、尊の字など酉の字の部分が單なる酒器としては餘りに精密に出來過ぎてゐるので適當な解釋を求めたいと思つてゐたのである。ただの酒器であるに輪廓以外にこまかい線が多く使はれてゐる。これは器物（燒物として見たる）の表面に畫かれた線ではなく其器物の外に更に被せられたる籠の編目が線で現はされてゐるのであると解するを妥當と考へるに至つた。因に罍の字の如きも上舉古文形よりすれば同じく其象形は籠目の描寫として考へられる。従來學者の説では米から釀造するのであるから罍の字の古文には、米の字が入れてあるのであると云ふ風に説かれてゐる。これは暫く一説として見ておくが自分は實地見た籠の容れ物或は籠を着せた壺類などのことから此等の尊の字、罍の字なども籠の象形に縁のあるものと考へてよからうと思ふ。

#### 十四 粥の字に見る露店の考

粥は北京で稀飯とも云ひカユの義である。そのうちに濃厚なドロドロしたもの（饘或は稠粥）と水を多く入れたうすい方のもの（稀粥）とがあるが普通は後者を指してゐる。禮記の檀弓などを見ても

既に饘粥の食事のことが見えてゐるから粥のすゝられて居た起源は相當に古い。むしろ書物に記されてゐない上古に既にあつたとも云ひ得る。しかし茲に粥の字を持つて來たのは粥の起源などを調べる爲ではない。漢にも周にも尙それ以前にもあつたものと見ておいても差支ないだらう。今こゝに之を問題としたのはその字の古體の鬻の字に就てである。爾雅には鬻は糜也と解き説文には健也と説いて居る。同じカユのことを指して居るのであるが、更に面白いことには此の字は賣買の賣の字に訓ぜられることがある。理窟を云へば鬻の音が之六切（シク）の音でそれが同音の賣（シク、イク）に通ずるからであると説明されるのであるが、結果から云へば鬻は賣の字と同様に物をヒサグの義となつて周禮あたりに既に用ひられて居るのである。今其の間の關係を見てみたいと思ふがそれには先づその古文形を見ておく必要がある。



鬻の字の篆文

元來此の字は煮焚きに係のある文字である。その要素が總て之を證明してゐる。先づその下半に見ゆる鬻の字をとりて見るにこは三足の器で鼎に類したもの、釜のついた竈の如きものである。



## 鬲の古形

而してその上方左右に弓の字のやうに書かれて居るものは武器ではなくて、竈より立ち上る二條の煙の象形であるから筆は之を下方より上へ向け運ぶべきものである。これは鬲の字一字のみから考へると根據が薄弱なやうであるが、多くの鬲の字の系統部屬文字に就いて調べて來るとその炊事關係の構造に成つて居ることは了解され易いのである。その二條の煙の間に書かれたる米の字はその釜で煮られてゐる物の内容を示してゐるものである。この所には羊の入れられてゐることもあれば又羹の字などの入れられて居ることもある。時には、湯の沸騰することを現はすやうな場合には沸の字がそのまゝ用ひられ之に鬲の字を配して居るやうなこともある。かやうなわけで鬲の字は、竈の下に火が焚かれて現に米の粥が煮られつゝある様を宛然畫のやうに描寫して居るのである。この構造を有する文字が賣ると云ふ義をとるに至るは如何なる事情に基づくものであらうか。普通假借と云へばそれ迄であるが事實その粥と云ふものは支那の社會生活に重要な意味を有してゐるのである。

支那市街殊に賣物屋の多い横町などで、例へば何胡同とか安定里とか云ふやうなところの陋路の入

口には、朝早くから飯でも汁でも天ぶらでも御茶でも何でも暖いのを賣つて居る。饅頭や米糕や月餅、萃菓などは賣聲に面白い節をつけて客を呼んで居ると云ふ情態である。中以下の家庭では勿論家のうちで飯を焚くこともあるが道路に出て立食をやつて居るものゝ方が多い位である。殊に勞働者苦力社會のものは家をもたず、従つて屋根の下に寢泊りすることはなく大抵夏季には道路の隅々にゴロ寝をする。勿論着のみきのまゝで茶椀の一つも持つて居るわけではない。かれらは三度の食事毎に大道で茶椀に熱いのが入れて列べられてあるのを買つてたべるのである。その時の勘定と云ふものが又却々の騒ぎで口角泡を飛ばすこと非常、到底見て居られない位である。ところで粥はどうかと云ふと、その湯氣の立つてゐる熱いのが直徑六七寸大の茶椀に入れられて賣り臺の上に幾椀となく出されて居る。朝などは町の横町で賣子が盛にそれについて行く片はしから賣れて行く。鬲の字は別段茶椀から湯氣の立ち上つてゐる所を寫した象形ではないが、これによつてその飯屋が火爐子に釜をかけ熱いのをたいて賣つてゐる光景丈が如何にもよく現はれて居るやうに思はれるのである。上代支那の社會生活が若しかりに今日の卑俗なめしやの習慣から推して考へることが出來るとすれば、粥の字から鬲の意味の字が出てゐると云ふことは、最も一般的な下流社會の日常生活は之によつて察せらるべく徹



底した文字現象として之を解することが出来るのである。

尙序ながら饗の字の古形を見てみると殷あたりでは之が次のやうに書かれてゐる。これは鐘鼎古文よりも古い字體である。即ち



龜版文に見えたる饗の字

この字は御馳走を中央に於いて差向ひに享樂の状態に在るさまを寫してゐるのである。此の種の文字は殷の龜卜用文字に尙あまた發見されるのであるが、要するに食事に關した象形會意文字はとかく意匠が赤裸々に見えて居て頗る興味が多いのである。饗の字なども實際社會の光景が目に見るやうに描かれて居るので、文字文化史の上には重要な價値を有する一資料として掲ぐべきものであると考へるのである。

## 十五 文字の過重

支那の文字は其起源沿革に遡れば總て謂はれがある。個々の文字は謂はゞ支那古代の社會事實の標

題の如きもので、其目標を手掛りに調査を進めて行つたならば各般の古代文化を調べ出すことが出来る。

支那民族は古來文字の製作と運用とに巧妙な技能を有して居る。實際支那人と云ふものは、文字其ものに深い享樂的の興味を感じて居るのである。智識階級のものに有りては殆ど文字に溺れて居ると云ふ情態である。溺れると云ふよりは之に中毒して居ると云ふ方が更に適切であるかも知れぬ。支那文字の歴史は頗る古く夏の時代に於ける文字上の證據は未だ擧がらないが、殷代の文字に至つては自分の調べに據るも約一千個ある。其内には次の時代の周までも傳はらずに當時限りで滅んで了つたものも澤山ある。以來新陳代謝はあるが兎に角今日五萬五六千の字が辭書に載録せられて居る。今日電報に用ゆる字も九千九百餘字を超え確か一萬二千個に上つて居る筈である。一々所定の番號に直し連續して打電するのであるから其煩雜さ加減は全く御話しにならぬ。ひとり電報ばかりではない、支那では文字の爲に殆んど總ての事が拘束されて居る觀がある。國家社會が文字を支配するのでなくして、文字の爲に國家社會が支配を受けて居る形がある。政治の方では徹底的統一は容易に期せられないが、文字の上では夙に統一が出來て居るのである。さうして今日では文字過重の弊に陥つて居る。



第一國家の發展を期し百年の大計を立つべき秋に當り、一般支那人は依然文字に囚はれ文字の徳を頌し文字の美に没頭して居る。支那人が民族の歴史を重んずることは宜しい。けれども文字上の制肘を受け文字上の形式に禍されることは譽めた話ではない。支那民族が殷代より今日に至る數千年の間に、其象形的繪文字を簡單な音文字に進歩させることの出来なかつたのは形式美を尙ぶ漢人としては致し方ないことかも知れぬが知慧がなさ過ぎる。尙古主義は確に此點に於て禍を残した。文字の統一は出来て居るから夫れで善いとして今後大改良は出来ないとしても、責めて其一大整理を斷行する必要があるのである。

第二支那民族全體の感情が文字の値打を買被つて居る。寧ろ迷信に陥つて居る。而も精神の伴はない文字は畫餅同様のものであることに氣付かず、虚禮に虚禮を重ねて唯文字辭令の末にのみ腐心して居る。支那人が内を省みず文字の形式のみ偏重することは、支那文化史の研究に従事するものゝ最も意を用ふべき點であらうと思ふ。

今日支那の社會は儒教の精神は地を拂つて空しと云ふ有様である。實際論語や大學中庸に見る空氣と今日の支那の社會とは少しく隔たりがあり過ぎるので自分は頗る異様の感に打たれた。極端に云へ

ば四書などに録された四角の文字は、社會と正反對な殆ど實際に行はれて居ない事柄を歌つて居るものとも思へる。文字の美の爲めに處世上の要具として、古來の君子が好んで之を振廻して居るに過ぎないではないかと云ふ風に考へられもする。要するに現在支那の實情は唯表面を文字と云ふ顔料で極彩色に塗立て内實は全く之に伴つて居ぬ。文字過重の弊も茲に至つて極まれりと云ふべきである。

## 十六 文字に關する風俗

支那の社會で文字過重の弊の見出されるとは以上述べた通りである。今其風俗習慣の上に現れた一二の實例を擧げて見ると次のやうなことがある。第一支那は秦漢時代より此方、建碑の風が盛である。其碑の形式には時代によつて違ひはあるが漢魏六朝隋唐宋元明清いつの時代にも刻文の熱が強烈である。尤も中華民國になつてからはまだ日の淺いのと社會に未だ落付きの出来ない爲めとでそれ程見出されないが清朝末までのものは却々多い。山東に遊んだ者は必ず泰山に登られたことと思ふが、あの泰山には今日では六朝以後清朝宣統に至る迄の碑がパノラマ式に路の左右に無數に現はれて居る。固よりそれは磨崖の碑と云つて山の崖壁の面を平滑にし之に刻字せるものであつて、登岱者の目には必



す絶えず映する所のものである。

漢代の碑は曲阜孔子廟内に澤山見られるが泰山には見えない。泰山は惟れ石巖、すべて花崗岩である故刻字が鮮明に見えない。爲めに多くは朱を入れたりなどして読み易くして吳れて居るやうな次第で、碑としては其色の白いのが缺點であるが、兎に角山が天下の名山である丈に登岱者は文雅の士でなくとも随意刻文を遺して行つたものと見える。かの有名な五太夫の松の下、懸崖絶壁の斜面には乾隆帝御筆の萬丈碑と云ふが眺められる。これなどは如何にしても足場のかゝらぬ高所で猿の藝當でもなくては刻するとの出来ぬ位危険なところである。之を望み見るものは誰も其如何にして刻し得たかを不思議がるのである。又傳六朝王子椿書金剛般若經の大字九百餘個廿四行の經石峪溪底の一枚石に刻り付けられてあるものがある。六朝の佛教興隆時代の遺蹟であるとは云へ其現場の規模の實に大なるには驚歎せざるを得ぬ。其他南天門内、唐玄宗の紀泰山銘、中天門内、清、吳大澂の古文「虎」の大字を始め岱麓より絶頂捨身崖の紅壁邊り迄の間にどれ程澤山の碑文があるか判らぬ位である。獨り泰山の場合ばかりでなく上述曲阜の孔林に見る碑の饒多なること、或は北京城内でこれも孔子廟の内に見る歷朝各進士及第者の建立に係る登第記念碑の林立或は遠く西の方にとんで西安府古の長安の都

の跡にある碑林（これには東大工科大学に全景の寫眞があり又塚本關野兩博士の調査もある）の光景などから考へて見たり又南京、蘇州、杭州より揚子江方面一帶の地方に於ける碑碣の類の多く遺つて居る事實などから綜合して考へて見ると先づ支那人の刻石の盛なるは古今を通じ一貫せる風習である。支那石は日本石と違ひ概して其質に於て其色に於て碑に適したものが多く爲め碑の發達を助けて居る。大に天然の助けがある。其上に支那人自身の趣味嗜好が更に多く然らしめて居るが、建碑の風習に次いで注目される者は所謂對聯の風習である。其内でも殊に家々の門柱に掲ぐる門聯の盛なることは日本で想像もつかぬ位である。先づ第一に門聯は其書の美ならんことを勉め、支那町は聯の爲めに光彩と趣を添へて居る。實際又聯文其ものゝ意味が文學的の趣味に富んでゐる爲め其背景の街衢を餘程變化させて居るやうにも見える。例へば書肆の門聯であると「萬卷常新。五車富有。」とあつたり「聖賢義蘊。天地精華」などゝある。筆舗であると、「翰苑傳千古。文房第一家」などゝある。或は「百祿是總。萬福攸同。」とか「自求多福。厥命維新。」とか或は「業創新天地。功成富國民。」などゝあつたりする。又學者讀書人の内には「門無俗客。家有藏書。」とか「東壁圖書府。西園翰墨林。」とか「友天下士。讀古人書。」或は「忠厚傳家久。詩書繼世長。」其外「詩書禮樂傳東魯。經濟文章溯盛唐。」な



ど、ある。尙聯文は大門樓閣・廟宇、園亭幽居、厨房、糧房、戲堂などにも色々名句が書かれて居る。却々面白く出来て居る。殊に料理屋などでは、聞<sub>レ</sub>香<sub>下</sub>馬<sub>と</sub>か、貧民の家屋では、出<sub>レ</sub>門<sub>見</sub>喜<sub>の</sub>如<sub>き</sub>却々氣の利いた文句の聯もある。すべて聖賢詩書圖書など、美しい文字が盛に並べられてゐる。

上述碑文聯文は共に支那人の最も力を注ぐ所のものであるが、碑は事實を誇張し過ぎたり楯の半面を述べて他の半面を蔽うてゐたりするものであり、又聯は徒に體裁のよい事ばかりを標榜してゐるのみで、陰に惡事を敢行し得ることの氣休めに掲げおきたる金看板の如きものであると云つてもよろしいものである。

かやうに今日の支那では全く文字尊重の度が過ぎて各地方共に文字は即ち空文となり一向に精神が伴はず血液が通つて居ないやうになつた。従つて手習ひの如きも紅線の手本の上をなすくらせるのみで型に箝つた書體に没頭せしめてゐる。自由瀾達な聯縣草書などのことは教へもせず、又其爲め書けもしないのである。唯道教の方で無常鬼其他の惡魔を驅除する時に、毎戸室内に掲げられる黄色の符紙に字に似て非なる速書を草體の如きもので書いて吊すやうなことをする。先づそれ位のものである。要するに、國は亡びても文字はある、と云ふ格で而も其文字は形式上形骸のみを留めて居て之に國家

興隆の氣分の見えてゐる所がない。中盡狀態から覺めて文字過重の弊を打破すると云ふことは今日民國有識者の最も意を用ふべき點であらうと信ずる。同時に此問題は日本帝國の現状の上にも移して豫め考慮し置く可き事柄であることを注意して置く。

## 十七 江南の略字

支那人が文字を尊重し辭令を厚うするは本來形式美に憧れる國民性に因るものと判定せられる。詔勅詔諭に拮屈敖牙の文字を並べ、詩賦文章に艷麗雄渾の文字を聚めて來るのも皆此理窟に本づいて居る。總體支那の文辭は内容よりも形式に凝る傾きがある。何でもないことでも難澁な文字を以て現はすと、ひどく大袈裟に見える。言語學上の立場から云ふと、文字は成る丈け易いを使い、音標的であるのを可とする。思想感情を表す目的から云ふと、難字を一々持出すことは餘程不都合なものである。しかし此難字は支那五千年の國民を同化し幾度か獵狃、匈奴、肅慎、拓跋遼金等蒙古滿洲諸狄から侵害を受けたことがあつたけれど一度もそれに滅ぼされたことはないのみか、其支那文化を背景に有するが爲め中原に這入つた北方民族をば支那流に化した。文化の程度の低い外民族は此支那文字を



學んで居たのである。

抑も文字は支那の内政統一に與つて力があり、文化を域外に及ぼすにも有力であつたので支那に取つては最も緊要な機關の一となつて居る。殊に其繁瑣難澁の所が形式美に憧れる國民性に合して居る。形式上の文字美と云ふものは此難かしい古典的の文字によつて支へられ統一が保たれてゐるのである。しかし此に最も注意を拂ふべきは一面實用本位の文字が滔々として行はれて居ることである。これは形式美を眼中に置かず寧ろ全然之を打破した氣樂な簡略文字である。これは昔からである。古くは殷代に於ける龜甲獸骨文字に就て見ても同一文字に難かしい元始的の文字と略字とがあり、周の古銅器や古壘古陶の文字に就いて見ても亦同様である。秦漢三國六朝隋唐いつの時代に就て見ても同様である。古典的の字形は多く形式美を必要とする時に限られ、支那社會の日常生活一般の上より見れば、難字難畫の文字を用ふるは學者、文人に限られて居る。尤も古人が遺した版本の文字の如きは學者著撰者の手に成つたものでそれを見てすぐ古代に實際行はれてゐた文字情態をトすることは出来ぬ。版本の上には傳統的に難字を踏襲して唯古い字體を載せて居るに過ぎぬのである。而して實際一般に古代の人々が日常書いてゐた實用の字體は版本などの上には滅多に残つて居ないのである。實用的字體なる

ものは實際其時代々々の文字の生命を宿してゐるものであるが、いざ書籍の上に録されるとなると謹嚴體に變ずる。例へば、版本の古いところで宋版などの字體を見ると之には正楷の書體のみしか見えぬ。時には稀に「京本通俗小説第十卷」の如き正しく宋代當時既に阴阳（陰陽の二字に當る）と云つたやうなものがあり、其他今日の支那に見る簡易字同様の文字の毎頁六七十字乃至百字もあるやうな文學書類もないではないが、斯の如き古版本は寧ろ例外の方である。一般著作物に見る版木の字體は之に依つて當時の社會の實用的文字の體を見る材料になると云ふ譯にはならないのである。しかし今日出版される木版本の支那書によりて之を見ると洪金山、黄金窖、或は樵子口（重慶萬卷閣）とか王監生行伯（萊蕪縣）とか云つたやうな赤本黄表紙類のもの、内には、現在支那社會に手書せられる簡易字略字なるものが思ひ切り澤山用ひてゐるのを見る。之で見ると難字を必要とする場合の形式はどこ迄も形式で行くが、其反面に極めて非形式的な氣樂な實用本位の文字を澤山發達させて行くものであることが判る。茲に支那文字の潮流が見える。左に少しく例を擧げる。（括弧内は普通字體）

効(勸)、規(觀)、欢(歡)、汉(漢)、叹(嘆)、鸡(鷄)、过(過)、还(還)、远(遠)、仗(儒)、办(辦)、  
 劳(勞)、禾(樂)、罗(羅)、戢(職)、岂(豈)、禾(殺)、婚(婚)、痕(娘)、亥(歲)、孙(孫)、価(價)、



嬰(龍)、夙(鳳)、𠄎(言)、

今日の支那には殆ど草書が用ひられない代りにかくの如き略體が盛に行はれて居るのである。現に先年自分が安徽省遊歴の時連れてあるいた兵隊頭の王雨田と云へるものゝ書く字體は殆んど此式の略體のみであつた。試みに其正體の書振りを聞いても知らない。先づこれは日本で云へば、いろはの假名にあたる位の程度のものであつて實際の支那土民の文字の力と云へば先づかくの如きものを知つてゐると云ふ程度にあるのである。支那文字國の半面の實況は大略これを以て推測することができるのである。

## 十八 文字遡源

畏れ多いことであるが聖天子なり皇室なりに關聯した方面の研究で、支那古代の文字上からする考覈は、從來殆んど發表されては居なかつた。殊にそれが有史時代を超越した字源の原始情態に遡り上古東洋民族は帝王を如何に敬し崇めてゐたかの消息を窺ひ知ることの出来る資料などと云ふと、全く考へられてもゐなかつたのである。こゝには今皇室に因める文字の一斑を窺ひ之を紹介して聊かなり

とも字學の上から世道人心に資する所あらしめたいと思ふのである。今日支那に於ける歴史上の出發點は、周末春秋戰國の時代あたりにおく可しとなす白鳥博士などの説もあるが、これ迄の夏殷周の三代を出發點となせる傳統的の考の相當ひろく行はれてゐることは云ふまでもない。その傳説上に見ゆる堯舜禹の時代と云ふものも、親しく支那各地を歩いて見ると、古書に見ゆる記述方面の裏書きさるる説話的資料が相當發見せらるゝのである。けれども元來傳説は半ば後人の假説に本づける色彩をとり易く、かの禹王廟の如き南方一帯治水に苦しめる處には大抵おきまりのやうに建立せられて居るのである。

文字上からする上代文化の考察は、かうした傳説とか記述とか云ふものよりか、更にもつと確實に實際社會に活用力を有してゐた古代文字そのものを基礎として研究を進めたものであるから、比較的確かな價值が置けるものとして信ぜられてゐるのである。その古代文字の資料としてこゝに用ひられたものは、從來の金石學上に知られたる鐘鼎彝器の銘文、並に河南省彰德城外は安陽河畔に發見せられたる所の殷墟出土の龜甲獸骨を主たるものとなしてゐるのであるが、前者は鐘鼎古文として、後者は龜板文として文字學上それぞれ便宜呼びなされ、又認められてもゐるのである。これらの資料はやや



もすると偽物や後人の假作に成るものも少なくないのであるから、出来得る限りその確實なるものを厳選して、それらの中からこゝに適當な文字を採り出し比較研究を試みてみると云ふ順序に出たらどうかと考へ、先づ自分は之に就いて次の如き前提的事實を見出し得たやうな氣持ちがするのである。

その一 龜甲獸骨は何れも殷の都の跡から出土した遺片であるから、大體之で殷代の文字が示されたものと見て差支なかるべく、又一方の鐘鼎の銘にしてもこは三代文字そのまゝのものであるから、之で以て當時の象形文字の原始形式が汲みとられると云つてよろしいこと。

その二 原始形式の文字にはその字の成立ち構造が自然の發達そのまゝに現はれ、その文字は象形の外に會意、指事、諧聲、假借、轉注とそれぞれその成立ちこそ違つて居れ、主たる象形、會意、指事の造字原則には動く所がないのであるからして、當時の上代文化が大體をつくり字面の上に反映し、細大となくそれが意匠化されてゐるのである。さればそれぞれその各字の内部には意味深長な内容が藏されてゐるものと見られるのである。

その三 三代の文字はそれ故支那上古の文明史を如實に物語れるものと云ふを得べく、従つてその各字の構造組立ては上代漢族の自然物に對する表現、衣食住等の生活に關する表現、信仰そ

の他の精神方面に關する表現そのものであると云ふ風に見て行つて差支なきことと考へらるるのである。

かやうな見方からすると、文字研究の方面から這入つて行く支那上代の研究は、文字そのものを通じて上代文化の新事實をいくらでも無限に闡明することが出来るやうに思はれる。とかくこれ迄歴史とか考古學とか云ふ有力な文化史研究の方法を以つてしても判らなかつた所の上代人の思想に、國家社會や家庭生活などの實相までが、今日の吾人のあたりに判然と映じて來る。されば上代文化史の問題も、直ちに此の文字を介して突き進んで行くならば、比較的手つ取り速く之を攷察することが出来るかと思ふのである。かう云つた見方からしていま上代の帝王觀、祭祀觀と云つた方面を調査するには、新しいこの文字を通じた所の研究方法によつて進むならば、他の資料なんかから得られない新事實を見出すことが出来はしないかと考へるのである。

### 第一 上代の文字慣習

殷代の龜板文に見る龜卜用の卜辭から觀察して見ると、當時の帝王の名前などは他の數字や月名の記述法と同じやうな式に、その書く様式はきまつて居らなかつた。必ずしも縦書でなく、或は横書で



右からするもあり、又左からするもありと云つた風に、自由自在なものであつたらしい。その實例は枚擧に違ない位澤山あるのであるが、こゝにはその數例を原形のまゝで示して見る。尙后妣などの場合も之と同じことなのであるから序にこゝに記入しておく。

殷代帝王名

妣甲 妣丙 妣丁 高妣己 母壬 母癸

大乙 祖乙 祖乙 祖辛 大甲 大丁 大丁 武乙

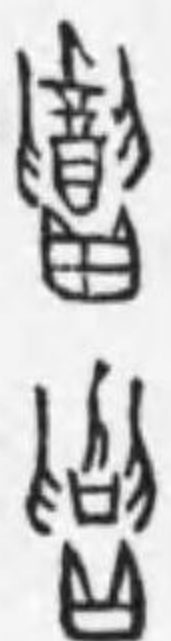
妣甲 妣丙 妣丁 高妣己 母壬 母癸

と云つた風に記されてゐるのである。

之によつて見ると上古の支那文字は、順序が極めて自由なものであつたことが判る。これは當時文字に左行から始まつたものがあつたり、又文字に左文のものがあつたりする現象に併せ考へて見て、その邊はどちらでも差支なく、決して喧しく云はれてはゐるなかつたものと考へらるゝのである。

それに文字を構造意匠の上から見ても、當時は頗る實際的の處があつて上代の生活情態の氣持が手にとる如く明白に汲みとられるのである。今その顯著なもの數例を左に擧げて見よう。

その一 招召の文字



上古の招の字は人を呼ぶに酒を備へて招き召すとの義を示してゐる。後世になるに従ひその字源の要素から酒器が除き去らるゝに至つた。

その二 家の字



上古の家は人が豚と同居してゐたことを示し今でも支那の田舎に行つて見ると全然之と同一なる有様を目撃するのである。

その三 暮の字



上古は落日の表現は林間に太陽の没するの意匠を以つて之を現はしてゐた。林は或は又艸ともなし莫ともなしてゐる。莫に日を加へ暮となしたのは後世の蛇足である。

その四 問啓の字

翰 墨 行 脚



問 問 問

上古は扉の間から聲をかけて問ふの義を示してゐる。又戸の間から言葉をかけることもあるとしてゐた。故に問の字や啓の字を生ずるに至つたのである。

その五 郷饗の字



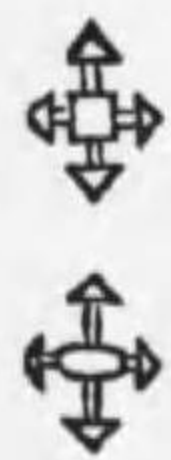
上古、饗は郷にて現はしてゐたが後世は之に食の字を加へなくては意味が判らなくなり、本來の郷は別の義をとるに至つた。

その六 麋麋の字



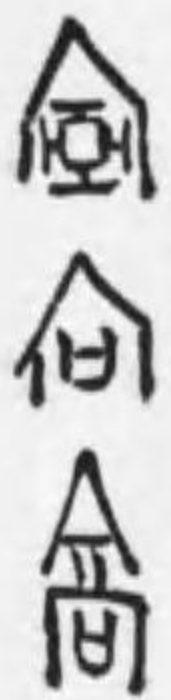
無角の鹿に禾を配し、又有角の鹿に鹿の仔を配しそれぞれ麋、麋の體を作つてゐる。その淵源又遠しと云ふべきである。

その七 郭の字



上古、城壁の四周に樓門を築き以て城内市民の警備に供へてゐたこと後世の城壁に見るそれと異なるところはないのである。

その八 室向高の字



上古の建築後世の土廓建築と相似てその屋蓋、破風、窓の形など聯縣として系統の存するものゝあるを認むるのである。

これらの數例によつて見ても、支那上代の生活情態がいかにその有りのまゝを文字の構造上に現はしてゐるかが察せられるのである。して見ると此の流儀の見方で以て皇室關係の文字を隨意に蒐集し、その原始形に遡り且つその意味を探つて見ることは、文字學上ばかりでなく支那文化史を知る上に少なからず興味のあるものと思ふのである。こゝには便宜上これらの文字を二大別して一、皇室に因める文字と二、祭祀に因める文字三、君臣關係の文字と云ふ風に分けて順次述べて見よう。

第二 皇帝に因める古代文字

その一 皇の字



これらの古形は古銅器鐘鼎銘より採りたるもので豊亨口敦、徐王子和鐘、饒叔編鐘、寶林鐘、刺心敦、齊子中姜罇、毀敦などに見ゆる皇の字を示したものである。その比較的後世になつて出來た字形を見るといくらか古形から脱化した姿を採り説文解字に云へる自王二字の合體と云へるものに近い形







る。

采帝帝帝帝帝

これらは何れも鐘鼎古文に見る帝の字で、即ち齊侯鐘、駟敦、周憲鼎、宋周鐘、犧尊、秦量などに見るものがこれである。龜甲文は刻文であり、鐘鼎文の方は鑄銘であるから、自らその間字體の上にも趣の違つた處が見出さるゝが、大體大同小異のものである。帝の字の構造については、許慎は帝は諦也天下に王たるの號なりとし、帝の字を以つて二即ち上の字と **采** (束) の二要素より成るものと説いてゐるけれども、しかしこれ丈では十分な帝の字の形の成立ちについての概念は得られないのである。

帝の字の原始形から持つて来て、直ちにその原義を洞察しようとすることは困難なことであるが、自分が多年支那文化の視察中感じたところに據ると、これは説文流に要素に分解するべきものではなくして不可分のものとなすのである。そしてその意味は上古天子が上帝を祭るときにの式場に備へられた燔柴の祭壇そのものではあるまいかと云ふ感じがするのである。これは北平の天壇あたりに行つて見ても判ることであるが、その寔丘の周圍に、皇帝が柴を焚き上帝に告ぐるの大典を行はるゝ時用ひられ

たるものである。勿論これは後世のものであるから、圓範式に出来てゐて、上古の文字の示す形體とや趣を異にしてゐるのであるが、大體同じやうなものと推定せらるゝのである。

その文字の原始形の上半三角形をなせる部分は、即ち燔柴のところを示せるものであるかと察せらるゝのである。或はそれともその上部は之を一枚の祭壇と見なし、こゝで儀式的の燔柴が行はれたものと云ふ風にも考へらるゝのである。向上代の帝の字の極端に圖案化せられたものには、上述の皇の字に組み合はされたものに次の如きものがある。



秦漢小璽文、金石索、

帝の字は之を上代の言葉の音の方からすると、こゝに専門的の考證は一切省き、單にその結果のみを掲げて見ると大體かう云ふ風に假定せらるゝのである。

皇は Huang, Kuang の古音からして古代支那では光の Kuang と同音又は同系の語を示せるものと云ひ得べく、従つて皇が煌煌乎としての煌の義に詩經などで用ひられてゐるのも當然のわけであると察せらるゝのである。皇の光なりと解せらるゝに對して、帝の方は古代支那音が **𠩺** であつて、嫡 Chak や適滴 Tok はその古音關係で密接の間柄にあるものと解せらるゝのである。そしてその Tok









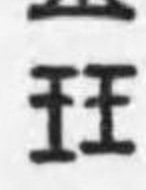


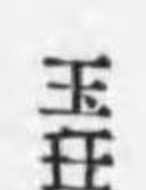

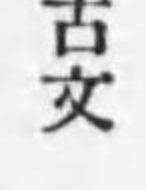
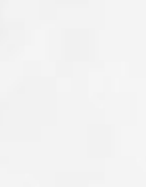










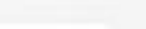


出来てゐるものであるかと云ふ疑が起る。こはいかなる調度の形を現はしたものであるか、上古、王より諸侯に授かつたところのものには、公侯伯子男に或は白玉或は酒爵と云つた色々のものがあつたことが考へらるゝが、王自身にはそれはない。そこで王は之を何で表象してゐたものであるであらうか。説文には王は三と一との兩要素より成り、三畫にしてその中を連ぬるもの、之を王と謂ふとなし、三とは天地人なり之を參通するものが王である。一、三を貫くを王となすなどと喧しく云ひ、孔子や董仲舒の説を引いてゐるが、一向に自分共の腑に落ちて來ないのである。かく王者の徳を哲學的に喧しく説かうと努むるよりも、上代の人心を解して赤裸々にその王字なり君王そのものなりの關係を明かにすることが第一義である。それが判れば問題はないのである。

思ふに上代では王の字は玉の字と同じであつて、玉を一に丕と書かるゝものゝあるのは、つまり龜甲文に示すその丕から分岐して出來た發達せる形であると考へらるゝのである。決して王と玉がもともと別字であつたと云ふ風には考へられないのである。して見ると王の字の古形はもと何か玉製のもので王そのものゝシンボルにしてゐた物を象形的に現はしたものと見られないであらうか。

尙玉の字として讀まれてゐる上代の文字には、單獨の玉の字と 玨 Kan と云つて雙玉を呼んだも

のと、及び五弦七弦の古琴のときの 玨 などと云ふ色々の場合があるが、これらは次の如く書き分けられてゐる。即ち

王           玉           玉     

こゝには後世の文化の進歩した思想から之を解く方法は採らないで、なるだけ上代文化のうぶな情態から之を解釋したいと思ふのである。しかし古今東西未だ誰れ人もこの王の字の象形的原義について、的確にして動かざる説をなしたものは聞かないのである。暫く記してこれも亦後人の研究を待つことゝしたいのである。

### 第三 祭祀に因める古代文字

上代支那に在りては、天子は天地を祭り自然を拜し祖廟の靈を祭る。さうした古禮に見るところの祭祀中心の氣分は最も鮮かに上代の文字の下に窺はれて來るのである。固より上古の字形は原始形であり、従つて尙未だ動搖をしてゐて、一定の固定した形として定まるまでには至つてゐなかつたのである。こは全く皇帝關係の文字と一般のわけである。

先づ祭祀に因める文字をこゝに出來得るだけ古く遡つて蒐集して見ると、その虔敬の念、敬神の念



の燃ゆるものがあることを痛切に感ずるものであるが、又それが字面の上にも髣髴として現はれてゐるのである。こゝに先づ便宜上その祭の字、祀の字、祝の字、祖の字、神の字、豊の字、燎の字と云つたやうなものに就いて述べ、そしてその上代の宗教思想の一斑を窺ふ爲めの手掛りともなしておきたいと考へるのである。

𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎

これらはすべて古代龜甲文字に見る祭の字の最古のものであるが、龜甲獸骨遺片及び殷虛書契その他から採りたるものである。形とその構造はどうでもよいらしく變化の極めて多い文字である。これらの文字を通じて見らるゝ點は、その手に配せられたものに牲肉と酒滴、並に祭壇の取合はされてゐることこれである。肉片の代りに時に豚の體を以つてせることもあるが、概してその牲肉を捧げてゐる所が神酒を供へてゐる所と共に主要なる點となつてゐるのである。ところが鐘鼎文の方から之を調べて見るとやゝ趣を異にしてゐるところがある。

祭 祭 祭 祭 祭

これらは周公華鐘、史喜鼎、古陶器などから蒐集せるもので、龜卜文の方よりもまとまりのよいだけに、そこには原始的の味の缺けてゐる感じがするのである。そしてこれには神前に供へてゐる形が示され、時には又簠簋豆などの祭器の形までが明かにされてゐるのである。尙上古その潔菜豊盛の古禮が喧しかつたことは、左傳の桓公六年の條にも見えてゐる如く、祭菜のことや牲肉を神前に供へることは史上に常に見る所なのである。従つて祭祀と云へばどうしてもかうした牲肉なり、嘉穀なり、酒饌などが供へらるゝはおきまりになつてゐるのである。嘉の字の原始形には、その明かに嘉穀の供へられてゐるところも見えてゐるのであるが、すべてかうした意味合が各字面に表現されてゐるとは、いかに上代の祭祀の古禮を窺ふ上に参考となることか判らないのである。

云ふまでもなく祭の字の龜卜文並に鐘鼎文に於いて、「又」の字の形に見ゆるものは何れも皆手の象形、手にて物を取れる形を現はしてゐるのである。又その「示」の字は神前を現はし、「口」の形に見ゆる各様のものは、豚の頭又はその肉を現はせるものである。そして豆の字に見ゆるは祭器としての豆(笠)を示せるものなることは勿論である。

その二 祀の字







ことが出来ると思ふのである。

その四祖の字



殷代龜甲獸骨の文字及び殷虛書契より採る。上古の祖の字は普通に示偏をとらず、示の字の附せるは比較的後世のものとなすのである。これは且の字そのものが祖先のシンボルとして用ひられてゐたからであると察せられる。然し鐘鼎文の祖の字となると示の要素をとれるものが少くないのである。



金文に見る祖の字

これらは豎教、齊侯鐘及び齊子中姜罇等より採りたるものである。その偏と旁の位置關係は、何れが右にならうと左にならうと例によつて古代のものはその意義に關係はないらしく思はれる。つまりその右より招するもよし左より拜するもよしと考へられたのである。こは次に示す如き文字のあるによりて殷代又は上古の一般の遺風に之を見ることが出来るのである。即ち

祖の字の系統を示せる上代文字



これらは殷代龜甲文字中にも特に原始時代の文化を證明せる文字として見らるゝものであるが、その字體の構造よりすれば、祖の字の象形と考へらる。しかし最初の二者は既の字に似たるところもあり、即の字に似たるところもあつて未だ詳かでないのである。唯その且の字に肉片の象形を配したるところは、古禮今俗一貫して見らるゝ所であつて、祖先の靈前に於いて之を供へられたるものと解することが出来るのである。さてかうした祖の字及びその系統の古代文字を見て來ると、その象形的最初の構造が何を表明したものであるかを察することが出来るのである。説文には祖の字を解いて始廟也とあるが、こは祖の字そのものゝ解釋になつてゐない。尙爾雅にも祖は始也と見えてゐるが、祖の字の構造は之だけでは判らないのである。思ふにこはその形から察して原始情態に在りし頃の支那民族が、墓の形で以つてそのまゝ祖先を表象する文字となすに至つたものではあるまいか。その墓形に就いては大體且の字がそれを表現してゐるのであるが、それにも詳細に材料を漁つて見ると色々のものがある。先づ龜甲文字に見る一種屹立した如き躍動狀の姿をなせるものと、而もその頸れたところに二條の筋の入られたのが原則となつてゐる。或は又その圓筒狀をなせるもの、又圓錐狀ピラミツ



ド型をなせるものなどもあり、そして中には墓上肉片の供へられたる如きものがあり、小卓の如きもの、配せられたるものもありして、頗る上代文字中その用途の繁多なることを裏書きせるものがあるのである。今日支那では砧橙と稱せらるゝ祖の使用せられ居るを見ても、古來その祖形が圓筒状をなし、上代の墓形そのまゝのものであつたかに想到せしめらるゝのである。そしてこれが後世の土饅頭型に變化したものと解せらるゝのである。

尙祖の字に見る示は、本來且の獨體で以つて祖の義が現はされてゐたものであるから、むしろ原則としては示の必要を見なかつたものである。そしてその祖先第一、祖先第二と云つたやうな順番を示すに、甲乙丙丁の十干を以てしてゐたことは、夥しい殷代龜卜文字の上の實證から之を發見することが出来るのである。即ち

祖の字と十干との配合せられた文字

𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗

文に曰く祖甲、祖甲、祖乙、祖丙、祖丁、祖戊、祖庚、祖己、と云つた風に組合はされて出來てゐるのである。支那上代の民俗がその祖先の考を描出するに、墓の恰好をそのまゝ採り來たつて之に當

てるとはさうありさうな意匠であつて、上代文化を見る上に興味ある一事實として特筆することが出来るのである。

その五神の字

𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒

宗周鐘、詛楚文、秦豈、邢侯尊、石鼓文、說文古文などより採る。

神の字の古形は說文には陰陽の激せる燿きなりとあるが、かうした彎曲せる象形の恰好を見るときは、その起源を他の多くのそれと比較して判断しなければならぬのである。同類の字源たる電の字雷の字などを求めて之と比べ合せて見ても、どうしても神の字の起源は天界に現はれたる陰雲濛濛たる氣象を表出し、之によつて神の存在を考へんとしたものであると云ふ心持が察せらるゝのである。つまり風雲暗澹たる天上の躍動は、すべて悉く神の所爲なりとなす上代原始思想の發露としては、尤も至極な考なのである。こゝには比較の爲め殷代に於ける電の字數種を列擧して見よう。

𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒

上代の電の字の象形情態



これによつてその雷電の象形に雨滴の點體が加はり、電の字の原始形をなすに至つたことが察せらるゝのである。尙かうした繪文字の原形に就いては、殷代龜甲韻骨並に殷虛書契と、その後篇参照のことを注意しておく。支那上代の宗教的思想が、かくして文字上から得られた結果によつて、その有史以前より上帝を神となし、その陰陽の根本も神の所爲にありとなし、神は太陽の溫熱、日光の恵を下界に垂れてくれると同時に、又時には雷電風雲の災禍をも降すことがあるとの概念を抱いてゐたことが、髣髴として察知せらるゝのである。そこで之を神聖視し、上帝を仰ぐの考から之に示偏を附するに至つたものと解せらるゝのである。支那の原始的祭祀の考が、かくして天界の現象を採り入れて、之を文字上に描出してゐたとは、その敬神思想の發達史を見る上に留意すべきことと思ふのである。

その六 豊の字



殷代龜甲獸骨並に鐵雲藏龜、殷虛書契による。之を鐘鼎文に就いて比べて見ると金文の方には更に各様の形を見るのである。



これは金文に見る豊の字であつて、豊媾敦、豊兮敦、父丁彝、井侯尊、父己鼎、聘敦、散氏盤、周豊宮瓦などから採つたものである。その何れも確實なる象形たるに相違ないのであるが、かうした象形的繪文字からするに、明かにその古代の祭器に象れることは云ふを俟たない。これは古銅器の現存するものでいくらでも立證することが出来るのである。かうした形せる祭器は、禮器であるから神前に供へ之に芳艸綠樹の枝などを挿して祀るのである。謂はば一種の花瓶様の禮器であると云つてもよろしからう。説文に豊は履也神につかへ福を致す所以なり、とあるは當たれりと云ふべきである。而してその後世の形では豊は更に禮の字の右半のライ、レイと讀ますべきものを分出してゐるが、古代にては何れも同様に書かれてゐるのである。古來その祭器の胴の豐滿なるものを豊と曰ふと云ひ、豆(饗豆)の形に従つて象られたものとされてゐるのである。或は酒醴の醴を見ても儀禮にある有豊の豊と、その禮器としての形は殆んど同じものであつて、古銅器に現存するものから確實に之がその祭器に象れるものたることを證し得るのである。

尙その他支那上代の祭器として用ひられてゐたもので、字源から直ちに推知し得るものは甚だ多いのである。何れもその莊嚴なる禮祀に因める大切なる禮器たることは勿論のものである。左にその主



なるものを列挙して見る。



これらは龜甲獸骨に見出さるゝ上代の禮器の象形であつて、その上半は大抵鼎の字及び爵の字の原形に該當し、下半は喜の字に見る禮器又豆の字、鬲の字、酒の字、壺の字などである。尙上代に見る喜の字は、



喜の字に見る原始形の一例

としてこゝに掲げたるものを見るときは、略々その一斑が首肯せられるのである。

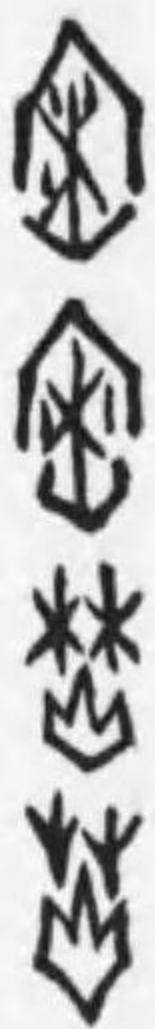
その七燎の字



殷代龜甲獸骨文字及び金文居彝に據る。

こは云ふまでもなく燃料としての柴薪を火炎上におきて焚き、火をなしその光明を取り入れんとするの意匠を示したもので、上代の祭祀にかがり火を用ひ、庭燎の方法に據れるは全く此の文字の現は

す通りなのである。その單なる炎上の柴を焚いてゐるところを現はせる焚の字とは異なり、それ以上に火炎の上騰飛散してゐる所まで指示せるあたり、用意周到なるものがあるのである。序でに燎火を屋内に取り入れて大史寮内卿事の夜勤に便せしめてゐる文字に寮の字がある。これ亦上古屋内に於ける照明方法として趣味深く考へらるゝものである。左にその寮の字及び焚の字の古形を示しておく。



寮焚兩字の原始形

こは鐵雲藏龜及び殷虛書契の諸材料より採りたるものであつて、實に有史以前に於ける照明法を知る有力なる手掛りとなれるものである。尙その發火の材料として燧石の用ひられたることは燧人氏の傳説のあるのでも知らるゝのであるが、燭の發達は之に比べると餘程あとであつて周末に至つて出來たものではないかと考へらる。

説文解字に寮祭は祭天也とある如く、その祭祀用の燎火としてかうした象形文字の發達を見るのは上代祭器關係の文字を見ると共に、一入の興味を感じるものである。

#### 第四 忠君に因める古代文字

上代の支那は國として見るよりも社會として見る方が適當と思はるゝ位社會的にはよく組織され、



國としては興亡常なき情態であつて、日本人のあたまには入りにくい處もある。従つて君臣關係の氣持の如きも日本建國の思想と相容れぬ處もあるのである。けれども文字上から之を察するときは、自らその間趣味深きこともあり、又君臣の間の人情味もよく解せらるゝものがあるのである。その忠の字にしても徳の字にしても、又仁義の二字にしても、支那流の解釋を以つてせざればその字義に徹底を缺ぐことがあるのである。その忠の字にしても君臣關係と云ふよりもその心を盡すを主となせるが如く、社會的に努むる盡忠、忠恕の考が根本となれるのもその一例である。

されば君臣の間柄の氣分の如きも、之を上代の文字に因みて説くときは極めて廣汎の範圍に亘る傾があるが、そこが又支那文字の特色とする所でもあるから止むを得ないとしなくてはならぬ。さは云へこゝには比較的日本人に解し易いもの二三を採りて、その上代思想を窺つて見ることにする。先づ朕の字、臣の字、命の字、事の字、旗の字に就いてその淵源を述べて見よう。

その一 朕の字

朕

殷虛書契並に殷虛書契青華など参照。

これらの構造は説文解字に據ると、火を兩手に捧ぐるの形と舟の形との兩要素の合體字として知られてゐる。しかし更に多くの金文に見ゆる朕の字を集めて來て比較しても、火の字を含んでゐる朕の字と云ふ字は見出されないのである。即ち

朕

これらは照匱、齊侯罇、丁亥敦、邾敦、秦銘動鐘、大鼎拍盤、伯頤鼎、鑄公簠などに見ゆる銘文より採りたるものである。これ亦一つの火の字を含めるものを見ないのである。而してこれらの朕の字の原始形を見ると恰好こそ縦書きとなつてゐるが、第一に舟の形を有することゝ今一つは長き棒状のものを兩手にて操縦せる形のものをも有してゐるのが認めらるゝのである。支那古代では書經堯典などに見ゆる如く「朕在位七十載」の朕の如く、一般的に上下の別なくひろくこれが我れの義に用ひられてゐるものが、秦始皇の時よりして嚴重に天子自身の自稱として限定せらるゝに至つた。しかしその古代文字の上で舟と双手の操縦せる象形とを配合したもので以つて、なぜ我れの義が生ずるに至つたかは未だ詳かでないのである。般の字が舟を旋はす義にて出來てゐたり、服の字が舟を用ひる義で構成されてゐたりする如く、朕も亦舟行上の用語であつたのが本來の出發であつたと云ふこと文は考へ



らるゝ。従つてこの朕の字は南方支那水郷方面で發達した舟人用語の一つであつたことも想像するに  
難くないのである。更に鐘鼎古文の側を調べて朕の字の合體を見ると之には貝の字と配合せられたも  
のが夥しくある。即ち

𦉰 𦉱 𦉲 𦉳 𦉴 𦉵 𦉶 𦉷 𦉸 𦉹 𦉺 𦉻 𦉼 𦉽 𦉿

朕の字の原始形

これらは李良父簠、中姬盤、蘇冶妊鼎、許子簠、鄧公子敦などから採つたものであるが、大體朕の  
字に貝貨、財寶の加へられたもの、説文には之を物の相増加せるを云ふとあるが、剩餘の義であり又  
送也、副也ともある。つまりこは舟上に財貨を積載し、双手で以つて艫を漕ぎ行く人を云ふものと解  
せらる。そのこゝに劈頭に擧げられたるものは、人偏がついてゐるので舟人そのものゝ義を明にせる  
ものと解せらるゝのである。かくて貝貨財寶の朕の字に配せられた合體を見ると云ふことは、之が秦  
の始皇の帝王自稱の語となる以前のことであるとは云へ、その因縁の面白きことを察するのである。  
その爲め我れの義が餘りとか送るとかの意味になつたのであるから、朕の字の意義の變遷も亦異とす  
べきものと云へるのである。

その二 臣の字

𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗 𠄘 𠄙 𠄚 𠄛 𠄜 𠄝 𠄞 𠄟 𠄠 𠄡 𠄢 𠄣 𠄤 𠄥 𠄦 𠄧 𠄨 𠄩 𠄪 𠄫 𠄬 𠄭 𠄮 𠄯 𠄰 𠄱 𠄲 𠄳 𠄴 𠄵 𠄶 𠄷 𠄸 𠄹 𠄺 𠄻 𠄼 𠄽 𠄾 𠄿

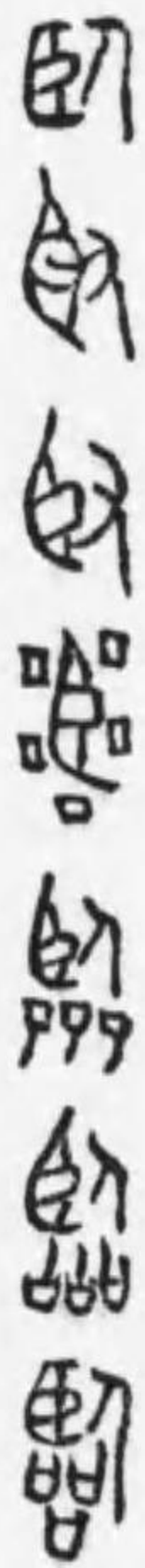
殷代龜甲獸骨文字及び殷虛書契参照のこと。

これらの臣の字はいつも必ず小の字と合體して小臣の字で現はれてゐる。これらの象形は又金文の  
方を見ても大同小異であつて、何れも

𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗 𠄘 𠄙 𠄚 𠄛 𠄜 𠄝 𠄞 𠄟 𠄠 𠄡 𠄢 𠄣 𠄤 𠄥 𠄦 𠄧 𠄨 𠄩 𠄪 𠄫 𠄬 𠄭 𠄮 𠄯 𠄰 𠄱 𠄲 𠄳 𠄴 𠄵 𠄶 𠄷 𠄸 𠄹 𠄺 𠄻 𠄼 𠄽 𠄾 𠄿

金文、追敦、頌敦、仲弛盤、臣廟彝使夷敦、侯齊罇などに見らるゝ如く、人臣の束帯したる形がそ  
のまゝ現はされてゐるのである。つまりその字形の示す如く、威儀を正して容姿を作つて君側に侍し  
てゐるのであるが、しかしこの臣の字の合體となれる古文を見ると云ふと、人の手の誘惑があつても  
かたく臥（臣を誘ふ手）の字の示すが如く、而も臣は人君の前には臥（臣と人の合體）するやうに出  
來てゐる。又君王の藩屏となつてはどこ迄も臥（堅）い態度であるべきものとなつてゐる。殊にその  
君に代りて人民に臨むときは、衆口のかまびすしきに接しなくてはならぬ役目に出來てゐる。かうし  
た關係はそのまゝ上代文字の構造上に明白に残つてゐるのである。即ち

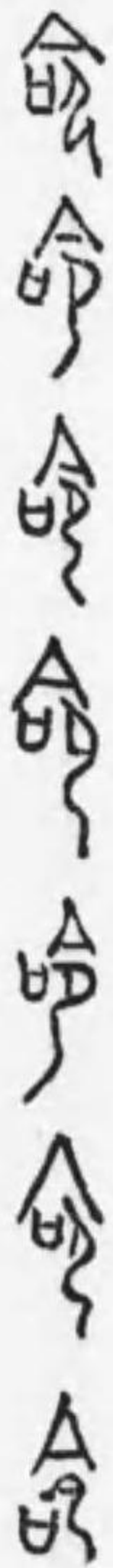




臨四字の古形

こは漢尙府金行盤、文父丁鼎、父癸敦、孟鼎、叔臨鼎、毛公鼎、詛楚文龜甲獸骨文より採りたるものであつて、その象形に示すものがいかに臣として民論の喧噪を一手に引受け、而もよく君側にひれ伏してゐる態度をとれるかが察せらるるのである。その民衆を前に士臣の禮をとれるところは、古も今も異なるところはないのであつて、支那の社會はその民意の尊重、民論の喧騒と云ふことが常に安定まりとなつてゐる。その文字上に有りのまゝ、明示されてゐる所に文字としての價値があると云へるのである。殊に其臨の字に見る臣の字の要素の示してゐる態度は、最もよく支那の國情を赤裸々に物語つてゐるものとして留意せらるゝのである。

その三 命の字



これらは歸父盤、宰辟父敦、然虎彝、齊子中姜罇、齊侯罇、齊侯櫛などの全文より採りたる上代形であつて、而も何れもその命の字の構造とその要素とを明示せるものである。説文によると命は使也、

口と令とに従ふとあり、又爾雅の釋詁には命は告ぐる也との意味を述べてゐる。その主君なり上帝なりからの告命そのものを跪坐して畏こみ拜承してゐるところの意匠が、實によく見えてゐるのである。命の字の上半は宮室なり祖廟なりの建物の内部を示せる義であるが、その宮廷内に恭々しく告命の辭を聞く態度を示したものと見らるゝのである。ところで殷代龜甲獸骨の文字を見ると云ふと、その命の字には更に室外より急遽馳せ参じたる意味を示せるしとしての止の字の加へられたるものがある。即ち



命の字の龜甲文字

殷虛書契及其の後篇、並に鐵雲藏龜參照のこと。

これらは各の字に従ふ容ではないかと説いてゐるものもあるが、字の構造はむしろ命の字或は令の字に近いのである。果たして然りとすれば、命の字の要素は即ち宗廟の神託なり、又は君主の誥命なりを恭しく拜して畏こまり跪坐してゐるところの意味を現はしたものと見るを妥當なりとなすのである。

その四 事の字

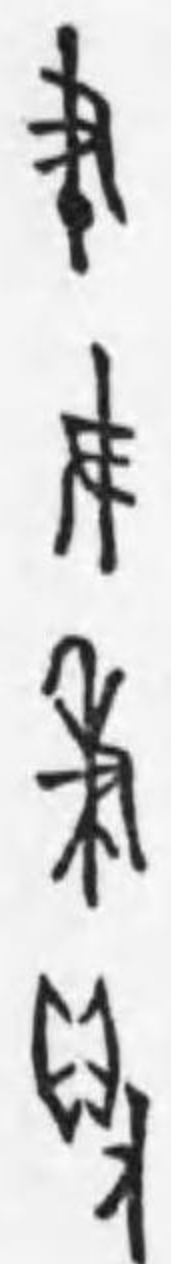
翰墨行脚



𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

これらは殷虚書契並びに全文の穴敦、宰辟父敦などから採りたるものである。説文には事は人を治むるなりとあるのであるが、その手に執るところの中の字型のものは何を現はしてゐるのであるか。思ふに史の字、吏の字などもその構造は相似たるもので文事、刀筆を以つて仕事となせるもの、或は何か上代の文具關係のものにてもあるか、それとも刀刻關係のものにてもあるか。

その字形は龜甲文にしても鐘鼎文にしても大同小異であつて、その手に仕事する所のものを配して出来てゐるものたることは容易に肯首せらるゝのである。或はその周以前の上代の古俗のことゝて、簡策その他吏僚としてふさはしいシンボルを有せしめてゐるものではあるまいか。宛もこれは龜甲文及び金文のうちに、手に筆を執るの意匠から筆の字の古體が出来、又手に禾を執るの義から乗の字が出来、又その貝を取るの義から得の字の出来てゐると云ふやうな様子から見ると云ふと

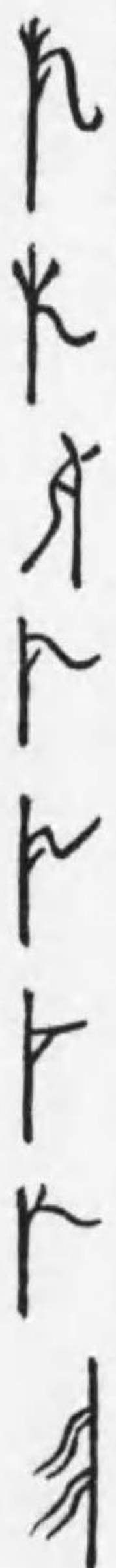


筆、乘、得の古文

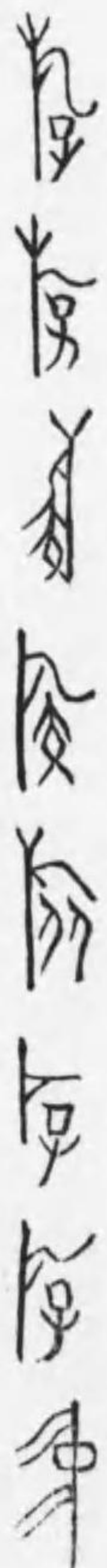
その間又事の字の原始形にしても何等か辭令、簡書その他の身分を象徴すべきものを執つてゐるこ

とを描出してゐるものではあるまいかと云ふことが考へらるゝのである。

その五 旗の字



これらはすべて殷虚書契や龜甲文に見る旗の象形である。その大纛、錦旗として知られた實際の形式がどうあらうと、上代の旗飾はかうしたものゝ範圍内に在るのである。尤もこは游の字、族の字、族の字、中の字などの合體字から來てゐるものであつて、その原始形は次の如くにあるのである。



龜甲文字にはかうした旗手軍族氏族弓矢關係のものがあまた見出され、何れも旗旂を以てその近衛の任を盡くしてゐる處が窺はるゝのである。更に之を金文の方面から見ると、いくらか變つたものも見出さるゝのであるが、大體は上述のものと大差ないやうである。即ち



これらは宰辟父敦、頌壺、石鼓文、晋姜鼎、齊侯鐘あたりに見る旗旂關係の文字から取つたもので



あるが、時には鳳輦、儀車の前にかうした大森を建て、鹵簿堂々進んでゐたやうな光景の考へらるゝ所の象形的鐘鼎文を見ることもあるのである。

以上は皇室帝王關係の文字を中心として支那上代文化の實相を躍如たらしむ可き象形文字の一群を集め來たり、こゝに殷或は殷以前の太古の君臣情態を説いたものである。固より太古の支那に云ふ伏羲、神農燧人氏と云つた傳説時代の文化と云ふものは、どの邊を核心として考を纏めたら物になるものか、薩張り具體的の手掛りだも得られない今日であるから、たとひ漠然たる假定材料であるにしても、かうした確實な殷代龜卜用の象形文字なり、又は莊嚴この上もなき祖廟神前用の禮器、古銅器あたりの銘文に見る象形文字なりを基準として研究し、それによつてその當時の文化の一斑が窺ひ得らるゝと云ふことは、何と云ふ有難い昭代ではないだらうか。

今日金石文字の到達し得る範圍にては、既に大體千有餘の上代文字が的確に指摘が出來、その中には既に太古濃昧の世に存在してゐるが、その後使用せられなくなつた類のものも少なくない。或は又明瞭にその字の構造要素は闡明することが出來ても、その出來上つてゐる字の音なり義なりの見當さへつかぬものが少くないのである。本論文中に掲げた僅かばかりの例證のうちにも、筆畫は明白で

あつてもその構成意匠の何の義たるや判定に苦しむものがかなりあつたやうな譯で、こは幾千年の星霜を隔てたる上世の事として、頗るその概念の捕捉に困難を感じる次第であるのである。

尙かうした文字の研究上には比較傍例を引用して來るべきであるが、こゝには又努めて考證の繁瑣に流るゝことを避ける爲め、一切その古典や龜甲、鐘鼎の詳細なる比較考證は省略することにしたのである。思ふにこは極めて少數の専門家以外には興味のないことであるから、心ならずもその邊には特に意を用ひてその大要を掲ぐるに止めた次第である。本來帝王君主關係の文字で始まつてゐる文字であつても、世を降るにつれ原義から遠抜いて來たものが多く、或は又それほどでなかつた舟人用語の程度のものにして、天子専用の語となつたものもあると云ふやうな譯で、文字上の變遷沿革は轉た感慨無量なるものが少なくないのである。茲には自分としてかうした上代文字の實際を讀者の眼の前に指摘し、出來る丈多く實物の原色寫眞やコロタイプで以つて逐一挿入し、それに據つて一層所見の具體化を考へてゐたものであるが、紙面に都合もあり、一切それらの企ての出來なかつた事は遺憾に思ふのである。若し幸に將來機を得て讀者と直接相見ゆるの榮譽を荷ひ得るときは、全部の材料を傾注して各字それぞれその基づく所を擧げ、昭和四年の今日から五千年前の太古に遡り、その支那社



會相と帝王との關係に就いて申述べて見たい氣持がしてゐるのである。聊か此研究に就き所感を叙べ、併せて全篇を通じ文字の選定に妥當を缺き野人禮に仿はざるの點でもあつたならば、幾重にも謹みてそれが改訂に努むるつもりなのである。雲上の竹の園生のかたがた並に一般江湖の讀者諸子に對してこゝに微衷を披瀝しておく次第である。

## 附記

支那翰墨趣味から最古の金石文字資料に據り、上代の文化の一斑を窺ふと云ふことは、此の道の研究として最も興味の深いことである。世は中華民國となりて以來、彼の地にも金石學を專攻するの士は洵に寥々たるもので、現在では羅振玉、沈兼士教授等の篤志家もゐないではないが、見渡したところ全く寂漠を感じざるを得ないのである。日本でも高田竹山翁外一二の研究者を見るのみで、これ亦その學徒の尠なきを嘆ぜざるを得ないのである。

思ふに金石方面の翰墨趣味と云つたならば、支那でも日本でも、こは翰墨郷の中心とならなくてはならぬ譯であるが、近來世の推移と共に金石文の土臺から築き上げて行かなくてはならぬと云ふ考を

持つものが少なくなつて來たやうである。印度でも埃及でも又アッシリア、バビロンの文明研究でもよく證明せられてゐる通り、何と云つてもその金石、泥の刻文鑄銘と云ふものを明かにすることがその研究の出發點となつてゐるのである。竹帛上の記録の貴ばるゝ以前、更にもつと古い時代に遡れば皆この金石泥が唯一のレコードとなつてゐるのである。ペーパや皮や帛を用ひらるゝに及んでも、而も尙金石文の永久性に富み、その價値の重んぜられてゐるとは云ふを俟たないのである。たゞ歴史にしても文學にしてもかうした金石から入ることが有力であり、正式の行きかたであることを百も承知してゐても、何分にもその入りにくゝ、之に親しみを持つまでに至るのが容易でないといふ困難があるかと察せらるゝのである。殊に今日の學校教育の行きかたでは、とても金石文に親しましむると云つたやうな餘裕のある趣味教育は望まれさうにもないやうな氣がする。普通のやりかたでも翰墨のことはひとわり通じられるであらう。が、然し金石文の方面となると又おのづから別である。況んや龜甲獸骨まで採入れて本筋の方法をとると云ふことは、最初から餘程しつかりした考へで始めなくては物にならないのである。金石文の趣味もその堂奥まで入ることが出来るならば、獨り帝王のことと云はず、君臣關係のことと云はず、古代の社會生活なり趣味生活なり狩獵のことなり耕農のことなり



文筆のことなり何なりと之によつて普通の記録の達し得ない處まで突込んで行けるのである。翰墨談の眞の幽玄崇高の味はどうしてもこの金石龜甲による支那上代の風懷世相を明かにすると云ふことにあるのであるから、世の金石文字に興味を持たるゝの士はかう云つた實際的上代の研究にて手をつけて頂きたいと思ふのである。最近東都の自宅へ廣東博物院の理事羅原覺大人が來訪せられ、氏の専門とする金石文のことや古代文化の意見趣味などを語り合ふの機を得たのであるが、自分はそのことを感じ、これが翰墨談に古代趣味のことを一層力説しておきたい氣持ちになつたのである。

### 三 書道閑話

#### 十九 碑帖

隋唐の碑と云はず、六朝の碑と云はず更に又遡つては兩漢三國と云はず秦と云はず凡そ支那書道の研究にはどうしても古拓に關する智識を必要とする。古代の拓本は一枚摺りの大きなものもあるが多くは法帖に作つてあつて携帶に便に出來てゐる。碑帖の便利視せらるゝのはその爲めであると思へる。ところが事實古代の碑文はその全面を見渡してその篆文なり本文なりの鈎合よく配置されて出來てゐるのであるから、出來ることならばあまりその拓本が小さく細かく切斷されたりすることなく原型のままにて見らるゝ方が、確かに本當の碑文研究から云つて正しいやり方であると思ふ。唯取扱ひ上の不便と云ふことはあるが出來るだけ原形のまゝで見て研究をすべきものであると思ふ。

書道の研究に碑帖が離るべからざる材料となつてゐることは、これ迄支那翰墨界に於いていかにそ



の重きをなしてゐるかの一事を以てしても判ぜらるゝのである。自分共はその碑碣の價值とその碑面全體の感じを失はないやうにして研究をしようと云ふ立場から之を見て來るとどこ迄も形のまゝの拓本で之を味ひたいのである。漢碑あたりにしても今はまだかなり現存してゐるものがあるのであるから、その拓本を更に原碑そのものに比べて見ると殊に興味深いものがあるのである。

自分がかつて山東省は曲阜の孔子廟に參拜しその同文門内にあつたところの、漢の五鳳二年の石刻を親しく目撃したことがある。西漢宣帝の時の碑であつて魯の孝王石刻として知られたものである。その碑の五鳳二年魯世四年六月四日成とある漢隸の書體は誠にかの中央亞細亞流沙墜簡の木策中にある隸體と相似たるところがあつて趣味津津たるものである。石は高さ一尺五寸、幅二尺三寸誠にささやかなものではあるが、その石刻は鮮かにして古樸正に今より一千九百八十餘年前の貴重なるものである。而かも之を紙に手拓してその黒色を見ると一層その刻文の鮮やかさ加減が判るのである。或は又同じく山東の泰山、經石峪にある有名な金剛般若經の大字の如きもこは上述晋王子楮の書なりとして傳へらるゝものであるが、ともかくその筆意の大まかにして氣宇の大なる誠に希世の珍となすに足りるものである。今石刻の實物を見てゐて之を拓本に見比べて見るとその拓の精確であるか否かが

一層よく判つてその拓本の親しみを増させるのである。その外北京、孔子廟の石鼓にしたところでこれ亦實物の石鼓を見てゐてその拓本を見比べてみるとその刻文の加減が一層立入つて批評せらるゝのであるけれども、これ等は何れも多く法帖となさず拓本のまゝにて取扱はれてゐるものである。

周、石鼓文

秦、秦嶧山刻石（李斯篆）

秦、泰山刻石

秦、瑯邪臺刻石、

漢、魯孝王石刻

漢、孔林墳壇石刻、

漢、萊子侯石刻

漢、永元墓石

漢、嵩嶽太室石闕銘、

嵩嶽少室石闕銘

漢、開母廟石闕銘

漢、敦煌太守裴岑紀功碑

漢、故益州太守北海相景君銘

漢、孔謙碣

漢、熹平殘碑

漢、豫州從事尹宙碑

漢、郟陽令曹全碑

漢、蕩陰令、張遷表



漢、張飛破張郃銘

三國魏、上尊號碑

三國魏、魏修孔子廟碑

三國魏、盧江太守范式碑

三國吳、天發神讖碣

三國魏、受禪表

三國魏、大將軍曹真殘碑

三國魏、東武侯王基斷碑

(以下略之)

と云つたやうにその實物なりその原拓なりに就いて親しく支那で見ると、その法帖に之を仕立て直したものは何となく勿體ない氣持ちがしてならぬのである。六朝隋唐から宋元、明清のものに至つては世を降るにつれてその數も多く、始め自分だちも支那游歴の度毎に之を趣味的に蒐集もしてゐたが到底その數の多いので煩に堪へなくなつた。法帖の重んぜらるゝのはかうした拓本本位に集めた連中の困り抜いた結果から、そこで始めて法帖に仕立てるに至つたものであるとの事を自分で體驗したのである。次ぎには法帖として有名なものそれが亦夥しくあり、之を蒐集することも容易のわざでないのであるが、先づそのうち誰れでも知つてゐるものを舉げて見ると、例へば

一 三希堂法帖

二 淳化閣帖

三 戲魚堂帖

四 停雲館法帖

と云つたやうなのがある。

今その停雲館法帖によつてその内容の一斑を示して見ると、こは卷十より成つてゐる。即ち

晋唐小字卷第一

黃庭經、樂毅論洛神賦など

唐撫晋帖第二

王羲之尺牘王獻之、王羲之尺牘など

唐人眞蹟卷第三

孫過庭書譜

唐人眞蹟卷第四

顏魯公、僧懷素、楊凝式など

宋名人書卷第五

歐陽文忠公尺牘、蘇文忠公、米南宮など

宋名人書卷第六

蘇滄浪、司馬溫公、林和靖など

宋名人書卷第七

陸放翁、范文穆公、朱文公など

元名人書卷第八

趙文敏公、趙彥徵など



## 元名人書卷第九

倪雲林、王叔明、陳敬初など

## 明名人書卷第十

沈學士、李太樸、張東海など

かうした纏まつたものは翰墨趣味のものには便利ではある。しかし特殊の研究者はその漫漶讀むべからざる原拓とか又後人の摸刻手拓本を批評するとか色々のことをするのが面白い。王羲之の蘭亭序の如きものにも定武蘭亭その他異本のかなり多く、随分八釜しいものもあるのであつて碑帖家は之が比較研究に力を入れ一點一畫の磨滅を八釜しく云ひ、その一字でも缺けてゐないものを以つて誇りとなすなど大變な騒ぎをなしてゐるのである。この故に右軍の正教序の如きも宋拓の、明拓のとその拓した時代が議論の岐るゝ所となり、専門家にとつては随分神經を尖らせてゐるのである。しかし智永の千字本であるとか、顏真卿の大唐西京千福寺多寶佛塔感應碑文の如きその歐陽詢であるとか虞世南、褚遂良、太宗であるとか蘇東坡、文徵明、張瑞圖、王鐸、傅山、董其昌、鄭板橋、趙子昂あたりのものであると支那各地をあるいてゐる間に随分目覩し得るのである。

法帖は本來原刻の碑面より直接拓したるものであるべきであるが、それが他の石に摹刻されたるものがあり又木刻に移されたるものもあり、その複製ものは大抵十四五歳ぐらゐの小僧連をして城外廟

宇の一隅にて刻せしめてゐる光景などよく見るのである。杭州西湖孤山西泠印社にしても又山東曲阜孔廟の牆外あたりにてもよく之を見るである。されば法帖ぐらひ神品から紙屑同様のものに至る迄の上下の差の甚だしいものはないのである。

尙法帖の鑑賞に就いては舊來その愛藏者の清賞の印を捺すとが普通となつてゐる爲め随分、天覽、御覽、希古、宣和、汲古閣、石渠閣、などの堂々たるものからしてそれぞれの愛藏家の圖書印の捺されてゐるのを見るのである。之によつてその法帖の傳來を明にすることも出来るので面白いことにはちがひない。けれどもその捺印、藏書印、清玩の圖章には時に随分いかはしいものがあり、中には朱肉の色の鮮かにして而かも米南宮であるとか朱彝尊であるとか云ふところのものもある。その印章上にはよほど眉唾のものが多いのであるからその處を始めからよく承知してかゝらなくてはならぬのである。

## 二十 拓本の思ひ出

自分が先年山東泰山に登つたときのことである。中腹の伏虎門内に清、吳大澂の磨崖碑があり、題



して虎とある。字は籀文の最も奇古掬すべきものであつたのでいきなり之を手拓しようとした。泰山の風は強く、紙を先づ碑面に貼らうとするのであるが風に煽られて容易に拓本をとるわけにいかぬ。又そのあたりどこにも水が得られない。溪流を汲むにしてもかなり遠いのである。同行の友人だから加勢を得て漸くのこと之を手拓することが出来たのであつたが中々の騒ぎであつた。今も尙書齋に之をひろげて時々當時の苦心を思出すたねにしてゐる。手拓と云ふことは面白いものであるがさうらくに行くものではないのである。

曲阜に行つて見ると文廟内に前にも述べておいた漢五鳳二年の碣がある。碑碣に辭のあるものは、垂涎三尺のものである。その他魯の吳郡太守張府君之碑などもあり六朝以前の古碑が随分ある。同行の友原田淑人君は廟内拜觀の時間を巧みに利用して身をかはし踞して五鳳二年の碣を拓し了つたのであつた。同君の機敏さには一行の鹽谷、鳥山、高田、今村の諸君も一驚を吃したのであつた。拓本は今恐らく同君の書齋にあつて君の思ひ出のたねとなつてゐることであらう。手拓はやゝもすると官憲が之を禁ずる場合があるので珍碑であればあるほど得るに困難なのである。どうかすると斜に禁制の札の貼られてゐるものもあり、寫眞さへも容易にとらさぬのである。

しかし同じ山東でも泰山の金剛般若經などは大文字が溪流の底へ一面に互つて二十四行に刻まれてあるのでこゝばかりは山境のことゝて八釜しくないのであるから、泰安府あたりから人を備つて行つて拓せしむるなら譯はないのである。又嶧山の碑や瑯琊臺の方は之を人頼みに頼むことにすれば思ひ出こそ少なければ五月蠅いほど拓本屋が持ち込んで来る。一と汽車おくれるつもりで値段を談判するのも面白いのである。その般若經の拓本は墨拓よりも朱拓の方が美しく又明るい感じがしてよろしいので自分は紅い方のをばかり集めて来たのである。拓は雞蛋の白味を混じて拓したものであると、その朱が落ちなくて取扱ひ上にも手につかなくて都合がよろしいのである。

又江西省廬山に遊んで見ると南麓に歸宗寺と云ふ禪寺がある。そこに王右軍の墨池と傳へらるゝ古池がある。その傍の壁を見ると羲之に因んだ大字の刻されてゐるところがある。寺男たちがその拓本をとつてゐる様子を見ると五枚八枚と同時に水に濡らして重ねて拓してゐる。一枚宛その墨で叩いては拓し、了るとそれを剝がし又直ぐ同じやり方で拓してゐる。見てゐるうちに譯なく五枚八枚を片付けてしまふ。このやり方はひとり廬山ばかりでなく何處でもやつてゐる拓しかたであるがともかく手



速いことをやつてゐるのである。かつて又自分たちは東京帝大の工學部建築學教室で山東武梁祠孝堂山石室の畫像石を手拓したことがある。畫仙紙にやる外別に絹地にもとつて見たのである。中々の苦勞であつたが面白く出來あがり之を表裝して小廬の支那室に掲げてゐる。時には又古名硯を手にし銘を見たりですまされなるときは立派なものや學術上參考になるものは、之を手拓するのである。硯銘の手拓は磨崖碑や大石の碑面を拓する時とちがひ細かい仕事であるだけに周到な注意を要するのである。毛刻りの如き精巧な刻であるからブラシで叩き込むときはよく氣をつけなくてはならぬのである。尙手拓の困難さは殷代の龜甲獸骨の文字を拓することがこれ迄自分の手拓中一番骨が折れたやうに思ふ。と云ふのは何分三千年前の龜甲であるから古銅器鐘鼎彝器のそれよりも遙かにむつかしい。鐘鼎のものも容易ではないが龜版文のそれは一層やりづらいためである。それを思ふと殷虛書契に故王國維、羅振玉翁などの龜甲の手拓を集めてゐる苦心はさこそと思はれるのである。

## 二十一 手拓禪

支那文人行脚の道樂には古代の碑碣瓦當から墓誌銘、古鏡、古銅器に現はれてゐるその文字なり紋

様なりをその風味のまゝ手拓してその佛を偲ぶと云ふことがある。支那人は之をターペン拓本と云ひ之に特殊の趣味を有するものが多い關係上、文人行脚にはいつも此の拓本談が出るばかりでなく、又自ら珍拓を取つたり之を蒐集したりすることも行はれるのである。

拓本の最も簡單にして又最も便利なやり方はその物が餘り大きくない碑石である場合は、先づ之を横倒しに倒しおきて之が手拓に取掛かるのである。同一の拓本を數多取らうとする時には支那何れの地方のやり方にしても先づ之を横に倒してゐる。そして中にはその複製を作つてゐるものもあるがその手拓に必要な材料だけは豫め之を取揃へるのである。その最少限度に要るものをこゝに述べて見ると左の品々であらうと思ふ。

- 一 畫仙紙（或は餘り厚くないもので之に似たるもの）
- 二 黒印泥又は朱印泥、或は墨汁の如きもの
- 三 綿を入れて餅形に作りたる布製のタンボ、大少各種
- 四 幅廣き白の綿布
- 五 長柄の毛刷子（叩く爲めのもの）



六 水 刷 子 (水を引く爲めのもの)

七 雞 蛋

八 水 盤

これらの用意が出来ると先づ大體の手拓方法に取り掛かるのである。そのあらましを述べて見ると第一に碑石の表刻字の面に對して白紙を展べひろげる。そしてその上へハケで以つて水盤の水を萬遍なく軽く引くのである。そのとき餘り多量の水を掛け濡らし過ぎては厄介である。その適度に紙の碑面にびつたりくつ付程度に止めておけばよろしいのである。水を引いたあとは乾燥せるさらし布を紙の上に重ねてひろげその上から刻字の場所を見當に注意して長柄のブラシで持つて根氣よく叩くのである。そは白布の上から十分に叩き込むときは、魯の字でも郡の字でもその筆畫の通りの凹みに濡れた白紙が伸びて相當の窪みを生じ溝の形を作るのである。

ブラシの叩きかたはなるたけ叮嚀に根氣よくトントンと半日でも終日でもよろしい十分に呑ん氣に叩くと云ふと、原刻の書體はそつくり髣髴として現はれて来るわけである。もしその叩きかたが不完全であるとあとで失敗するにきまつてゐる。かなり長時間に亙つて叩いてゐるならばそのうちに白紙

の水分は大抵さらしの方に吸収せられて来る。又天候の都合で存外速く乾燥したりすることもある。その水分の未だ半乾きの程度でゐるうちに手速くやつてしまふのであるが兼ねて用意したる黒肉をタンプによい加減の量だけつける。そしてそれを碑面の白紙に持つて行つてポトポトとその凹き溝の生じてゐる周圍邊りを念入りに叩き、そこへ白字の形を作り上げて行くのである。ところがその程よい黒肉の色と云ふが容易に出ないので、或は淡きに失したり或は濃きに失したりして思ふやうに行かぬものである。どちらかと云ふとその淡きに失した方は根氣で以つて幾十回と繰返して叩いて行くうちに思ふ丈の濃いさに作り上げて行くことも出来るが、若し誤つて濃厚な色を一遍で出してしまふとあとで取り返しがつかなくなるのである。尤もその烏金拓と云つて唯烏の羽の如く黒く出して行く方法もあるにはあるが、普通手拓の場合はそのやうに漆黑にやるよりか胡麻鹽流に半白に拓し上げる方がらくなのである。

尙戶外で手拓するには春か秋か的时候が最もそれによろしく盛夏の頃であると大きい面積のものでは右の方を拓してゐると左の方のしめりが乾き切つてしまつて再び濡らさなくてはならぬやうなことになる恐れがある。それも二人三人と多勢で合同してやるなら兎も角、一人で手拓するとすれば一寸



骨の折れる場合があるのである。しかし戶外と云つても上述の山東泰山の中天門のそばで路傍の磨崖碑をとつたときなどは、山の吹き風しに妨げられて随分困らせられたのであつた。戶外の磨崖を取つたり碑石の大ものを拓すると云ふときは數人の手傳ひを要することは勿論であるが概して戶外のものとなると容易でないのである。支那で之を職業的に拓してゐる人々は専門家だけに一度に幾枚も白紙を重ねておき之に水を浸たして一緒に叩き込むのである。黒拓をするにしても一枚叩き了ればすぐ次の一枚に取りかゝると云ふやうなわけで頗る機敏な腕を見せてゐるのである。もし黒拓でなく之を朱拓にするときは朱肉を用ひると云ふを俟たざれども古い時代には朱拓には朱そのものをどつさり用ひてゐた爲め朱色の拓本は意外の重量を有してゐるものが多いのである。

泰山經石峪の金剛般若經の大文字の如きは傳六朝王子椿の書と稱せられ、その筆蹟は大陸的にとほけたやうな襟度を見せてゐるのである。その爲め特に文人墨客の之を愛賞するもの頗る多く、従つて之が拓本には黒拓朱拓兩方のものが競ひ合ひ並び行はれてゐる。自分は現場に至りて親しくその實地の拓本のとりかたを見て來たが、大盆の如きものに切り墨の如きものをすり木で磨り回し、それを粗雜なタンボに塗りつけ之で以つてよい加減に叩いて作りあけるのである。二尺近くもあるあの大字

を而かも千五百年も經つてゐる以前の刻字そつくり溪流の中で拓するのであるから粗笨なとりかたをすると云ふのも無理のないわけである。之を八釜しく理屈ほく云つて見たつて始まらぬ。花崗岩ではあり、河床に多少浸漉してゐるところも少なくないのであるから、たゞ大體の形さへとれたらそれで満足せんければならぬのである。泰山の黒拓は速く云ふと煤煙を水で溶いたやうな亂暴なやり方をし  
てゐるのであるから、若しその拓本を手で取扱ふとすればひどくよごれるの恐れがあるのである。そこでその色止めに土民どもは雞蛋の白味を混入してそれで叩いてゐることもあるのである。

碑拓以外のもので漢鏡であるとか瓦當であるとか又は古銅器であるとか云ふものになると云ふとは異なりかなり精緻なる手法を要することになり、粗笨な磨崖碑を拓する心持ちとは全然變つた気分にならなくてはならぬのである。尙石佛、鍍金佛あたりの光背の銘であるとか古硯の銘であるとか或は印材の紐にある刻銘、龜甲獸骨に見る殷代文字に古泉の文字と云つた類のものになると總べて皆手拓に骨の折れることが夥しいのである。かうした材料はすべて上に述べたものとは打つて變つて違ひ、頗る微妙な手拓法でなくてはとれないのである。古硯にしても、古鏡にしてもその他墓誌銘あたりのもので巧妙にとられた拓本であると、誠に優雅なるものであつて尙古趣味のものには垂涎三尺の



ものである。或は碑帖にしても鐘鼎文の拓本にしてもその類の少なくしてその拓の鮮明なるものになると自然とあたまのさがるものがあるのである。

又壁畫にしても山東の武梁祠や孝堂山の畫像石の如きものはその拓本のとりかたにより如何やうにも表現されるのである。金石索に掲げられたるものなんかはあまりに人工的に浚へ過ぎたきらひがあつて妙味が伴はないが、手拓本のそのまゝの方のものであると味があつてよろしいのである。自分共は大同の雲崗石佛寺に於て、又太原の天龍山に於て、それぞれ山西朔北の地に手拓趣味に耽つたのであるが、かうした異境に遊び翰墨の嗜みを拓本の上にて恣にすることは盡きない興味が湧き起る。又文字の書體で風の變つてゐる拓本はチュンクワン居庸關の六國文字のそれであらうと思はるのであるが、こは北京から八達嶺途上の刻文として手拓には宛も手頃のものであると考へるのである。ただその面積のいくらか廣きに失するので幾人か手傳ひがなくてはむづかしいことであらうと察せらるるのである。

又寒山寺に遊びたるものは楓橋夜泊の斷碑に龠曲園の新しい碑拓を得らるゝことであらうし、又杭州西湖に遊びたるものは西泠印社の花卉風竹の類の拓本を得ることであらうと思ふ。或は曲阜泰安府

に遊びたるものは泰山各碑拓に嶧山碑拓などを得べく、又四川に遊びたるものは諸葛亮の出師の表をと云つた風にいくらでも支那漫遊にはかうした人口に膾炙したものが入手せらるゝのである。人はこれらの拓本が容易に得らるゝ爲めに却つて手拓方法を忘れ之が手數をすることを好まないものも生じて來るに至つた。その眞によく碑帖、古拓を愛せんとするものは自らどうしても手拓の趣味を有しそれによつて拓しかたの苦心までをも味ふことの出來ると云ふことが必要であらうと思ふのである。

### 二十二 寫經三昧

寫經と云へば唐朝寫經生の筆寫振りの謹嚴さ加減を思ひやらずにはゐられぬ。その齋戒沐浴は固よりのこと、寫經三昧に入り一心不亂になつて寫經そのことに餘念なくやらなくては出來るわけのものではないのである。あの長文の經を一字の間違ひもなくやり通すと云ふは時代の產物であるとは云へよくもやれたものである。日本でも二十年三十年、永き時は四十年からかゝつて寫經に従事したのもある。そこから考へるとすべて經を寫し佛に歸依する心持ちの眞摯なる態度や又その幽玄嵩高な風格と云ふものが之をやらせたものであつて、今日の世相では考へられない仕事であると云へるので



ある。

支那では江南の尼寺などを訪ねて見ると、そのまだ年若き尼姑が佛堂に入り圓座に坐し念佛三昧に入つたとなつたら、全く不動の姿で木像の如き情態になり吾人のどやどや話しながら這入つて來るのも少しも感ぜざるものゝ如く一心不亂の情態にあるのを見るのである。その集中せられた敬虔の念と云ふものは恐ろしいものであることを知つた。こは日本だつて同じ精神情態になつたものはつまり同じわけであるが、しかしその寫經生がかうしてその寫經を書き了るまでの修業と云つたらたいしたものであつたであらうと察せらるゝのである。

普通一般の支那人、讀書階級の人々にしたところでのその書をかく時の姿勢と云つたら略一定したものである。日本人は芝居で三くだり半の手紙を書く時と同じやうな要領で以つて腕を宙にしてゐて巻紙に走り書きをすらすらと書く。その常に筆は宙に持つてゐて懸腕で行くのである。巻紙も宙にしてゐて書くのである。さうしなくては巻紙らしい書はかけない。近來の學生はペン書き本位になつて居るからこの經驗はあるまいが少し古い連中と來たらペン書きは氣持に添はないのである。この三くだり半式のやり方は支那では殆んどやらない。その書に向かつては卓に對して端坐して正しく筆を雙鉤

に持ち、中には腕枕をまでおいて書いてゐるものもある。ともかく几帳面なものである。實に支那人の書に對する態度と云ふものは自ら見るものの襟を正さしむるものがある。又實に膽田に力を入れ極めて眞面目にやつてゐるのである。普通一般人ですらこれであるから、その寫經生の場合など思ひやらるゝのである。

寫經生の用筆は昔、空海が性靈集の中に云つてゐる筆の製法のことなどから考へて見てもかなり八釜しく考へられ、よい筆を使用してゐたらしく思はるゝ。

一 雀頭の 小筆 (短峯)

二 狸毫 小筆

三 羊毫 小筆

などが主なものであつたらしい。わけても小楷には狸の毛が一番よく適當してゐた。そしてその筆の穂の形は雀頭と云つて短峯であつて、丸みを帯びながら「どんぐり」様のものであつたと想像されるのである。こは今日あの寫經の書體を見れば一見してすぐ筆の恰好が考へられるのである。羊毫も悪くはあるまいがしかし當時の紙は多く麻紙が用ひられたからして麻紙の質に對しては羊毛のべた



べたしたものはよくない。がそれよりも狸毫の短峯で雀頭に作つたものゝ方がよろしかつたらしいのである。尤もこはその寫經生の個人の好みもあり習慣癖なども手傳つて來るわけであるから、必ずしも一概にどうと云ふわけにはいかないのである。殊に又紺紙金泥の如き書きにくいものもあるのであるから、その時と場合により色々の筆が併用せられたことは察するに難くないのである。

寫經は大體正楷で書かれるにきまつてゐるやうだが又章草で書かれたものが敦煌石室あたりから出てゐる。又六朝の寫經生には漢の八分隸の脱化してまだまもない隸楷の中間を行つた書體もあるのである。唐の正楷で圓熟したのも結構であるが、しかし六朝體の寫經や漢代の氣持ちのまだ残つてゐる書體も面白く神々しくてよろしい。こは中亞細亞、湖、湖畔、樓蘭、蘭國の故地から出た例の流沙墜簡に見る書風、王莽の神雀年間あたりのものとも比較せらるゝのであつて、これらは見るからに珍らしく奇古愛すべきものがあるのである。

寫經には又碑に斷碑の存するのと同じやうに殘簡、零墨の破片が隨分ある。その破れた小片に却つて六朝時代の貴重な資料の見出さるゝことがある。寫經の珍藏家は支那考古癖のあるものゝ間に見らるゝが、日本では中村不折翁がその方面に半生の努力をして大分珍古掬すべきものを秘藏してゐる。恐ら

く日本では天下第一の蒐藏家と云へるであらう。尙寫經には物が物だけにその時代が大體の狙ひどころとなり、筆者の名は奥書きにあることもあるが普通はないのが多い。従つて誰れの寫經と云ふことは明白でない。爲めにそれに對して模寫だとか偽物だとか云ふ騒ぎは殆んどない。又之が愛玩者は他の法帖や拓本のと違ひよほど範圍が狭く篤志の間にのみ喧傳されてゐると云ふわけであるから、翰墨の士のうちでも寫經のことにまで手を延ばしてゐると云ふものは極めて少いやうである。

### 二十二 墨蹟清賞

支那の翰墨趣味はその範圍がかなり廣汎に互つてゐるが、そのうちでも墨蹟の趣味ほど深く且つ高尚なものはあるまい。名畫は名畫で殊に結構なものであるが、しかし支那の翰墨郷と云ふものは何と云つても書そのものが中心であらねばならぬ。殊に古來天下の名筆と云はるゝ書聖の墨蹟でも親しく見ることが出来るときは、恐らく天下にこの墨蹟くらゐ東亞文墨の幽玄なる境地はあるまいと云ふことを考へさせらるゝに至るであらうと思ふ。

日本では空海、道風、佐理卿あたりの能筆を以つて日本入木道の大立物としてゐるが支那では抑も誰



れを推して書聖として崇めてゐるであらうか。これには議論もあるであらうが、従来は晋、王羲之あたりを以つてそれとしてゐた。これはそのたしかな眞蹟の上から見ても實に天下のものゝ認むる所である。例へば

故岡田正之博士舊藏の王羲之、九月十七日帖

帝室博物館寶藏の王羲之、喪亂帖

このあたりの資料から察せらるゝ王右軍の書品は天下一品と目して誰れ人も異存のない所である。不折翁珍藏の王獻之の遺墨と云ふものも評判にはなつてゐるがどうも自分の見るところでは雙鉤填墨のうたがひが十分にあるから尙研究の餘地があるやうに思ふ。墨蹟の研究は之を清賞するものの目に第一印象としてピツタリ閃いて來るものでなくてはならぬ。とやかうと議論の餘地のあるやうなものはそれだけでも餘地のあることを證してゐるわけであると考へる。

又蘇東坡のものには有名な寒食帖があるがこれは北京の顔世清翁から目下日本菊地惺堂翁の手に歸してゐる。東坡の眞蹟としてこれまで日本と支那に知られてゐるものゝうちでこれ位鮮かなものはあるまい。稀世の珍品と云ふ語は恐らくかうした珍中の珍なるものを指して云ふのである。或は又米芾

などにしても、上野美術協會の書道展に陳列せられた山本悌二郎翁の米芾尺牘の如きこれ亦誰しも異存のない所の物である。又鄭板橋や趙之謙あたりのものとなるるとよいものはいくらでもある。その文人の間に騒がれてゐるものはいくらあるか判らぬのである。謂はゆる眞蹟を隔つる紙一枚のものではなく本當の絶品とも云はるゝものが随分あり、而かもそれらの書品の高いものにはおのづから恍惚たらしむるものがあるのである。これは鄭、趙ばかりでなく支那全體の翰墨資料に就いて見てその趣味の深く且つ高いもの、又支那文化全體の上から見て本當に選練されたところの精髓とも稱せらるべきものがかなりあるのである。従つて支那の社會があれほど文化史を持ち、又あれほどの文人墨客を輩出し、又あれ程の氣韻のある書風を作りあげることが出來たものと云へるのである。

僅か一幅の軸にても又一巻の尺牘にしても、その筆力一點一畫の間にはよく宇宙の大を容れ天地間の哲學、文學、趣味遊戲とすべてあらゆるものを包含し、之を表現してゐることが判るのである。而かもこれ文含蓄の多き墨蹟を味つて見ると、その間雄大絶無の神韻を漲らせてゐることが判るのである。その墨蹟の神韻こそ支那翰墨趣味に幽玄なる基礎を與へてゐるものであると云ふことが判るのである。ところがこれは今の處、まだ西人には悲しいかな理解せしむることが出來ないのである。唯そ



の巻軸の表装に、又詩文の輪廓ぐらひの處は説明が出来てもその本當の餘韻爛々たる所、香氣の馥郁たる所と云ふものは容易に翻譯するわけにはまらぬのである。ましてその玄之又玄なる書道の妙處となつては雲起り龍躍るの氣持ちを起さしむるところを、唯一の筆のうちに表現してゐるのであるからして之を趣のあるやうに語るなどと云ふことは容易に出来ないのである。

自分は支那にゐると日本にゐると、百卷の文字上の修身書を繙くよりもむしろ唯の一幅の名筆でよいから之を打眺めてゐる方がどれ位精神的の刺戟になるか判らぬと考へる。支那では各家庭に名筆の墨蹟を對聯として掲げ、又扁額として之を掲げ、朝夕打眺めて楽しんでゐるのを見る。こは一面に身の修養の具となし、或は又その句を味つては文學清賞の一方方法となしてゐるのでもある。この一事を以つて見ても實に墨蹟そのものに平常氣持ちを打込んでゐることがわかるのである。この故に市井の巷には日本の如くペンキ屋まかせの惡筆を掲ぐることもなく、支那は坊間の看板と云へどもその文字は必ず地方の名筆に頼み、又その句も出来るだけ文學的のものを掲ぐるやうにしてゐる。されば支那町と云ふ支那町の看板は立派な墨蹟揃ひのものを軒並に出してゐるのである。之によつて見てもいかに支那市井の巷が墨蹟のことに重きをおいてゐるか推察せらるゝのである。

由來墨蹟は支那文化の中心となつてゐるものである。が中には又かうした古い趣味のあるが爲めに支那は大局の上から進歩しないのであると云つて、之を厄介視せんとする支那青年さへもあるやうである。がそは一知半解の考へのいたす所であつて、支那の墨蹟と文化の進運と云ふものは離る可からざるものがあるのである。それがたとひ西人に判らなくとも少しも構ふところはない。支那には支那獨特の墨蹟を持ち、そしてどこまでも之が發揚の方面に努力し之を助長せしめて行かなくてはならぬのである。

繪畫美術工藝の方は米人あたりに賞觀され、よく理解されてもゐるためどしどしと米國へ流れ行つてしまふ傾があるが、ひとり墨蹟の方だけは割合に散つて行かない。こは西人には古名硯と共に最もわかりにくいものであるから殆んど取扱はれてゐないのである。しかし西人の研究心は追々かう云つたものにも及んで來る傾向を示してゐる。されば東洋人のみが之を獨占することなく、ひろく歐米人にも判らせるやうに致したいものと思ふのである。

しかし願て見ると支那でも近來は大分氣持ちが變つて來た爲め、青年の間では昔のやうに墨蹟のことを幽玄な妙技として考へて呉れなくなつた傾きがたしかにある。少しづつ西人かぶれがして來たの



である。しかし東亞の文人墨客氣分を有するものとか、又學者を以つて任ずるものとかは、さうその西人風に染まないで矢張りどこ迄も舊來の氣分を續けて行きたい。「戸を閉ぢ書を著はして歲月を忘れ、揮毫紙に落つれば雲煙の如し。」と云つたやうなところを行きたいものである。自分どももよい墨色で以つて、

閉戸著書忘歲月

揮毫落紙如雲煙

と嘯きその情趣をやつて行きたいのである。文人がその落ちつきのある筆で以つてかう云つた氣分を出してゐるのも、平素墨蹟の清賞にあたまを向けてゐるのでその心持が自ら風懷として表現されたものと考へるのである。

## 二十四 眞贋を超越せよ

書に限らず繪畫でも何でもその眞贋の如何も構はず平氣で之を應接間に掲げ、友人や先輩の來訪があつても殆んど之を氣にしてゐないと云ふものがある。支那の都城なり田舎なりを歩かれたかたは度々かゝる場合を見られたことと思ふ。而かもそれが立派な紳士であり名流であつて氣にならぬと云ふ

のであるから誠に呑氣な話である。

かう云つた呑氣な氣分の流れてゐる支那であればこそあれ丈の南畫も出來れば名筆の書も出來るのである。客間に僞物を掛けておくくらひのことは朝めし前のことである。ところがさう云つたことは出來ないと云ふところが日本人の日本人たるところである。又日本人には日本人らしい書しか書けないのである。こゝには支那流をまねるわけでもないが、日本人も少しは支那人の呑氣なところを受け次いで、涼しい顔して應接間に自ら知つてゐる僞物の一つ二つも掛ける位の度胸は持てないものであらうか。又いたづらにでも、之をやつて見ようとはしないものであらうか。

尤も支那の社會ではいついかなる來客のあつてその壁に掲げられた書畫を褒めちぎるかも知れぬ。日本ではまづ手近いところで例へば、仇英や沈南蘋の繪と同じく、

一 揚守敬の横もの扁額

二 吳昌碩の對聯・籀文又は花卉

三 王一亭白龍山人の觀音又は達磨それとも草書體の絕句

四 何紹基の對子

書道閑話



## 五 劉石庵の對子

かう云つたものはいくらでも偽物の出来合ひがあるから之を客間に掲げておいたらどんなものであらう。吳昌碩などの畫幅であるとたゞその落款だけですぐ魅せらるゝものがある。安吉、吳昌碩の五文字の筆畫がどうあらうと、その圖章がどうあらうとお構ひなしである。上海を中心として江南地方には十六人の吳昌碩が出来てゐますよとは吳翁自身が一昨年亡くなるゝ前に物語つてゐられた所である。又一見すればすぐそれと判るのである。かつて三菱の重役で日本歸朝の途次上海丸船中で得意顔に自分に見てくれろと出され、吳昌碩を鑑したことがあつた。がそれは巻を開くまでもなく一二寸ばかり開いて見ただけで贊の文字がよくないとすぐ自分は云つた。

「これは折角だが仕方がないものです。」

「でも御參考に持つてゐらるゝのも將來比較材料になるわけです。よくイミテートされたものですな。」

とやつたことであつた。支那では應接間に掛けておいたものは、前にも述べたやうに來訪者の所望によつて贈物としなくてはならぬ場合があり、さらばと云つて何か掛けておかぬ譯にもまらぬ。口を

極めて褒めちぎる客は大抵それを寄越せと云ふことになつてゐるのであると云はれてゐる。事實そのつもりで褒めたわけでもなかつたが、自分にもその經驗があるのでこれは本當の話であるやうな感じがした。もし本當の眞蹟を掲げておいたのではいくつ藏してゐても足りないのである。その名流紳士であればあるほど贈物として人にやる場合も多いわけであるから、眞つ赤な偽物でもいくまいが相當吳昌碩として世間に通ると云つた程度のもは、人が悪いやうではあるが掲げておいてもよろしいのである。そして贈物にするとき實はこれは自信のないものだとか、研究の餘地のある代物だぐらひのことは云つてやる方が親切である。全然だましてかゝるやうな淺間しい心があつてはならぬ。そこにそれ丈の人格上のゆとりを以つて人に贈るならよろしいのである。

支那の翰墨趣味の上から云ふと多少贋物と云ふほどでなくとも問題視されてゐる位のもは持つてゐることが必要である。どうかすると比較して見たいことが起つて來る。又出來榮えの上から云つてもその方が眞物よりもたしかに作としてよく眺めらるゝことがある。出來榮え本位から云ふとたしかに贋物の方が上位にある物もある。沈石田や八大山人、石濤、仇英あたりの畫には殊にさう云つたものが多い。書畫とは話が違ふが、焼物瓷器の類にしても官窯だ、定窯だ、均窯だなどと云つて見ても



その本當のものでなく寫したものが随分多く、又その本物にしてもそれが日本のやうに一人の鑿師が作るのではなく、轆轤は誰れ、釉薬は誰れ、焼きは誰れと多勢のものゝ合作で作らるゝのであるからして特定の人の名の入れやうがないのである。ところで大明年製とか、康熙年製、雍正年製、乾隆年製と云ふやうに年號だけしか入れられてないものになつてゐるのである。染付ものなどにもツイ此の頃出来たものに大明年製とあり、而かも之を本當の大明のものに比べると決して遜色のないものがどうかするとある。然し尙古思想に囚はれることなく唯出来榮え本位に考へて來るときは贋だつて何だつてよろしいのである。

翰墨界の空氣から云ふと自分の見るところでは、切破詰まらせて二進も三進もいかぬやうに物をけなしてかゝることはよろしくない。顏真卿にしても蘇東坡にしてもあまりにひどいものは仕方がないが、しかし大抵のものは先づ先方の云ふがまゝにしておいて腹の底でさへ括つてゐればよろしいのである。傳顏真卿、傳蘇東坡でやつておいてもよろしからうと思ふ。その間を曖昧模糊にしておくわけでもないが、しかしそこに多少のゆとりを存しておくだけの雅趣を有してゐることが必要であると思ふ。日本人にしてみても支那の翰墨界と國境を越えて交りをつたふと云ふときには、その從來のやうに

餘りに潔癖性を發揮してその點を突きつけなければやめぬと云ふやり方をしてゐては甚だ香ばしくないのである。さらばと云つて本當に判つた所の支那人は眞贋の別に重きをおいてゐないかと云ふと決してさうでない。北京の揚敵谷君の如きかなり深刻にそれを認めてゐるものもあるのは固よりであるがこは時と場合によることである。又氣分の上でもそれに就いてあまりに神經質にならないことであるとの卑見を附記しておきたいのである。この點は總べて事がデリケートであるだけそれだけやりにくい所、さしさわりのある所が出来て來るのであるから一層よく注意せなければならぬのである。

## 二十五 印 譜

古歛、汪啓淑の飛鴻堂印譜に日本郷純造翁の松石山房印譜（中井敬所翁殿撰）を始め支那日本に印譜の行はれてゐるものは夥しい數に達してゐる。時には金石索の如く金石書類のうちに加へられてゐる印影も少なくないのである。

印譜に含まるべきものは康熙御覽之寶とか、歴代の帝王の印璽を始め古いところでは秦始皇璽として知られたもの



秦始皇璽一 受天之命皇帝壽昌 (摸印)

秦始皇璽二 受天子命既壽永昌

その外秦の小璽

疫疾除永康休萬壽寧。

(白玉)

萬 歲

(玉印)

永 昌

(玉印)

永 壽

(玉印)

天 祿 永 昌

(玉印)

皇 帝 壽 昌

(玉印)

帝 命 壽 永

(玉印)

天 子 萬 壽

(玉印)

漢 印

荆王之璽

(漢銅印)

(以下之に準ず)

中山王寶

關内侯印

宣平侯印

大將軍印章

驃騎將軍章

騎督之印

大醫司馬

かうした印面の文字は蜀漢印に、又魏印に、吳印に、晋印又北魏、南梁に、或は降つては隋印に、又唐尙書印に、太守印に、顏魯公私印に、後唐に、宋金に、元明清にといくらでも蒐集せられてゐるのである。その印章は銅印なるあり、玉印なるあり、石印なるあり色々様々であるがその印面の文字は出來得る限り奇古枯蒼の趣を出すに努めてゐるのである。尙書とか御覽とか云ふ類の印面は殊に多いがそれだけにそれにはいくらでも怪いものがあるべく、又飛鴻堂その他に見る如き游印の字句の雅致多きもの、これが亦珍とするに足りるのである。關防印に用ひられたるものにはその名句を見出す



ことあるも、又必ずしも關防と限らずひろく游印として自由に囚はれず用ひられてゐるものがある。中には捺すことを必ずしも考へず單に置物飾り物の意味にて清賞に供せられてゐるものも少なくないやうである。その印面に見る成句の一例を示して見ると次の如きものがある。

- |          |     |
|----------|-----|
| 石作枕醉爲郷   | 徐 儔 |
| 一杯銷盡兩眉愁  | 胡汝貞 |
| 春秋禮樂冬夏詩書 | 余國觀 |
| 不近文字久矣   | 戴士奇 |
| 幽根一簾風月曉  | 同 上 |
| 長宜子孫     | 錢節園 |
| 予意在山水    | 朱榮錫 |
| 雨過落花紅半溪  | 王聲振 |
| 醉香道人     | 黃 品 |
| 抱松柏之堅心   | 吳儻干 |

- |         |     |
|---------|-----|
| 懷古欽英風   | 俞庭槐 |
| 燕坐獨焚香   | 杜參雲 |
| 平生心事白鷗知 | 吳天儀 |

印譜を繕いてその篆文を見ることがくらひ楽しいことではないのである。こはその印面の形に應じてその字畫の崩しかたその筆畫の納めかた、又その句の含蓄の深さに窺はるゝその清香の氣分と云つたらぬのである。近來では西泠印社流のやり方を見ると巧みに清趣を見せてゐるものがあるが又古く漢銅印あたりを狙つてゐるものもある。北京の程清翁や南方の童大年趙叔儒あたりが目下その自刻ものを印譜に作つてゐるやうであるが、既に吳昌碩も令息の吳藏龕も亡くなり徐青周、王冠山など多少聞えたものも續々他界してしまつたので篆刻界も年を逐うて寂しくなつて行く一方である。

古人の印譜はその文人と云はず學者と云はず又蒐藏家と云はずその愛玩する印章の印面を弄ぶことは人知れぬ興味のあることであるが、わけてその印材そのものが珍らしい材であるときは一入の趣味を唆るものである。その田黄凍であれ魚腦凍であれ又翡翠であれ鶏血であれ壽山であれ白蠟であれ壽山であれ何だつてその材の秀れたるものならよろしいのである。自分は七八年前北京で瑪瑙の材を得



て金紹城君が之に篆し、そのうちにと思つてゐるうち金君又亡くなり友人に頼んでゐるがあと五六年も経てば出来ることであらうと氣永く待つてゐる次第である。思ふに印譜の趣味と云ふものは、翰墨の風味のうちでも殊に澁く且つ高雅な餘韻を漾はせてゐるものであるから特にこゝに之を加へておく次第である。

二十六 墨譜

墨譜に就いては從來北京あたりの文人墨客や又各地方の風人の間で自分共の目視し得るものは少ない。その少ない範圍で最も完備してゐるものを求むると云ふと、程大約の撰に係る墨譜であらう。墨譜と云へば程君房に方于魯の古名墨を聯想せらるゝのであるが、後世の名墨と稱せらるゝものは何と云つても明墨の外にはないことになつてゐる。

墨譜に現はれた明墨の形式は千變萬化であつて實に藝術的のものが多し。或は圓形ながらあり正方形ながらあり長方形ながらありその他種々風雅な形に出來てゐるものがある。そしてその名墨と稱せらるるものには方于魯製とか程君房監製とか云ふ銘が註せられてゐる。或は御製の詩を金文字にて入れそ

の側面に持つて行つては小さく臣、方維甸恭製などとあるものもある。そしてその墨面の圖案には、種々のものがあつて例へば、

- 一 雙龍珠を争へるの圖を現はせるもの、
- 二 日月山水に瑞樹を配せるもの、
- 三 左右亢龍に正面向きの龍を配し之に海天浴日の圖案を入れたるもの、
- 四 墨廠の御墨製作の現場を示せるもの、
- 五 巖窟内に高士の名を示せるもの、

などと殆んど古典的の圖象は大抵採つて名墨の裝飾的意匠に應用されてゐるのである。そして御墨の上に現はされたる龍の爪はその五爪なること云ふまでもなく、こはその龍の表現全體の調子とよく釣合つてゐて何となく莊重な氣分に打たるゝやうに出來てゐるのである。かうした名墨の古趣を味つて見ると云ふと、古人が古墨に就いて吟じてゐる名句を思ひ出さずにはゐられぬのである。例へば「雲霞異彩を成し、蘭桂香風を起す」とか、「萬壑松煙秋氣爽かに、十分の翠色冷光浮かぶ」と云つて見たり、又「匣に鐵硯を藏すれば紫汗光を凝らしめ、墨は金壺に灑ぎて青雲采を斂む」などと云ふ句のあ



るのを思ひ出さずにはゐられぬのである。

雲霞成異彩

蘭桂起香風。

萬壑松煙秋氣爽

十分翠色冷光浮。

匣藏鐵硯紫汗凝光

墨灑金壺青雲歛采。

しかし明墨あたりの時代の經つたものは蘭桂の香氣は失はれてゐるが、しかし流石はその墨色が雲霞異采を成すの語にたがはないのである。由來墨に見ゆる名墨の銘は南山之壽とか、松柏之義とか天保九始とか又鳳龍に因みたる句とか略その御定まりの文言が出来てゐるやうである。かうした藝苑の文房具のこととしてその銘句には硯のそれと同じく随分振つたものが見出さるゝのである。

しかし墨譜に見えた名墨の文章詩句はそのいかに巧みを極めてゐたにしても、その實質的要領と云ふものは單にその香氣蘭桂の如く、そしてその墨色は紫玉光に似たりと云ふに在るのみである。古名墨の理想としては宋代の李廷珪の墨である。これがその道の名家として澄心堂の紙や龍尾の硯と共に喧傳せられてゐたことは云ふを俟たぬのである。しかしその李廷珪の墨と云ふが果たして如何なる實質のものであつたかはよくは判らぬのである。實物がないので唯こゝにはその云ひ傳へを紹介してお

く外ないのである。

## 二十七 硯 譜

翰墨のことを語るものは印譜墨譜のあとには必ず硯譜と來るが順序であらう。ところが印譜のことは誰れでも談ずるが、墨や硯となると譜に收められてゐるものが極めて少なく殊に硯譜の類に至つては減多に見られないのである。

自分ども支那名流の名硯は随分拜觀をさせてもらへる機會があるのであるが、そのとき精々吳蘭修の端溪硯史ぐらひのものが參考に取出さるゝのであつて硯譜まで列べて出さるゝものは殆んどない。それと云ふが矢張り支那にも硯譜は少ないからである。日本には藤村義苗翁の如く硯に關するあらゆる文獻を成るたけ澤山集めようと努めてゐらるゝかたもあるが、支那にはさう云ふ篤志家は今のところ未だ見當らないのである。今支那日本を通じて自分が硯譜として目視することの出來たものを擧げて見ると先づ左に列記するくらひのものである。

硯史（硯面百方を收む）

高鳳翰撰



乾隆寶庫硯譜	乾隆御物
西清硯譜	乾隆御物
硯譜	紀曉嵐撰
寶硯齋硯譜	谷上隆介撰
廣倉硯錄	廣倉大學撰
硯譜	湯川博士撰
硯銘	石井研堂撰

その何れも硯譜に載録せらるゝ位のもはその容姿に於いて品格のありすべて整つたものであるから見るからにその古名硯たることを知るのである。殊に高鳳翰の硯史には左手を以つて墨鄉開國の題字を始め南村自筆の寒天孤鶴の圖を掲げ硯史摹本第一、長樂未央の瓦當古研を始め以下、陶澄君硯、晶生輝閣圓硯、松月硯、眞硯、紫雲硯、半硯冷雲、虹硯等見るべきもの甚だ多く自分の所持するものは四冊本であるが二冊本のものもあり、ばらのものもあり又帖に仕立てたものもある。そのうち烏金拓のものは墨色鮮かにして繡くによろしいのである。南村の左手硯銘は楠木の硯屏左手南村の置物と共

に自分の殊に鍾愛してゐるものである。自分がかねて旅行中馬車轉覆して右手の腕關節を骨折し和製高南村の名を木堂より附して串談など云はれてゐた位右手で字を書くことに苦しい思ひをしたのであつた。南村の硯録も多くは左手に成つてゐるので自分は同病相哀れむの情に牽かされてゐる。南村硯譜に見ゆる古名硯は頗る數多きも南村の故里、山東膠州方面は青島にも濟南にもあまり見當たらぬのである。たまに摹刻ものでは見るがこは恐らく硯譜から寫したものであらうと察せられるのである。乾隆寶庫の名硯はすべて彩色をした圖樣鮮かなものばかりである。南村の硯史の如く色々筆の加へられたものはないがその硯名が一々隸體で以つて入れられ極めて謹嚴に出來てゐる。そのうちの主なものを左に列記して見る。

- 一 唐代石渠硯
- 二 宋代玉帶生硯
- 三 宋代澄泥硯
- 四 宋代蕉葉硯
- 五 宋代暈月硯
- 六 宋米襄陽硯
- 七 宋澄泥鐘硯
- 八 東坡龍珠硯

以下之を略筆するが詳細は名硯夜話の部に就いて見られたい。



御物の古硯と云へばすべてその形と彫刻本位のものであつて斑紋などの點は問はないし、又その時代の古名硯と云はるゝものにはあまりさう云つた細部にわたる石質のことなどは論じられてなかつたものである。硯譜にはたとひそれらの斑があつたにしてもよく現はせないものであるが、しかし乾隆硯譜には原石の色がよく示されてあるやうに思はれる。

尙、紀曉嵐や廣倉研録に見えてゐる硯はすべて拓本を本としてゐるだけにその古硯の味がよく現はれ、殊に在銘のものゝ刻はよく鮮明に撮れてゐる。近來その方法から更に文明の利器を用ひて湯川翁の硯譜の如きは三色版にて、又谷上氏のはコロタイプ版にて何れもよく實物を髣髴せしめてゐるのである。自分ども平素蒐集せる古硯の寫眞は百を以つて算せらるゝに至りそのうち機を見てまとめ、日支兩國に互る古名硯の硯譜として見たい考へを有してゐる次第である。

## 二十八 墨場餘談

支那文人の墨場書室に出入し所謂墨客どもの日常生活の一斑を窺つて見るとは興味のあることである。先づその書室に入らんとすれば「門に俗客なく古人の書を讀む」とか、又「香を焚き易を讀み、

帽を脱し書を見る」とか又「雨過ぎて琴書潤ひ、風來たつて翰墨香ばし」などと云ふ氣持ちのよい句が壁の一方に掲げられてゐるのを見るのである。即ち

門 無 俗 客 讀 古 人 書。

焚 香 讀 易 脫 帽 看 書。

雨 過 琴 書 潤 風 來 翰 墨 香。

かう云つた詩書風月を楽しむ式の古趣を唆る名句があちらこちらに散見するので、その墨場書室に入るなり既によい氣分に打たれるのである。

かくてその文人どもの書をかく場合の實況を見てゐて日本のそれを比べ考へて見ると著しい違ひがそこにある。と云ふのは日本では室の構造からして仕方なくさながら四つ匍ひの恰好になつて伏して筆を揮はなくてはならぬのであるが、支那では立つてゐるたまゝ手頃の高さに出來てゐる卓上で筆を揮ふのであるから大變らくである。姿勢を十分に正しく胸を開いて書くことが出来るのであるから自然的である。これは疊の部屋ではいくら云つても始まらぬことがあるが、何とか支那流に改造したいものであると思ふ。



書卓は八仙卓を二つ並べられてもよろしいのであるが文人の宅では、書卓として出来てゐるものゝ用ひられてあるものが多いやうである。そしてそこでは巻を開いて見るなり帖を繙いて見るなり自由である。若しそれ筆を揮ふと云ふやうな場合は十分たつぷりと大硯に墨は磨られてゐるし夥計カチエ（ボーイ）はそばにゐるし揮毫は誠に氣樂に振へるのである。この點は書道そのものが支那から發達して來た者であるだけに本物であるから萬事無理がないやうに思はれる。その文人どもの相集まり醉餘それぞれ墨戲を試みようとして云ふやうな時には殊に賑ふのである。即ち霞光紙上に生じ、春色毫端に露はる、とても云はんか忽ち揮毫の場面が始まる。そして見てゐると畫を試むるもの賛を入れるもの、花卉を描き添へるものなどと兎も角集まり來たれるものはその會作に淡白に何なりと書き足しをするのである。又何れも感心にそれぞれ自分の圖章印材を携帶してゐてすぐ款を入れてゐるなどその用意の周到さ加減には少々驚かされるのである。名刺と圖章とは大抵文人の集まりの時には忘れないやうに持つて行くべきものである。中には大作をやるつもりで立派な絶句を揮つてゐるものもあるし、見ると出席者の名前を一々すべて吟じ込み一座のものをして敬服せしむると云つたやうな詩才に富んだものもゐる。これは支那文人としてはあたり前のことであるが知らぬものには珍らしい墨戲のやうに感ぜ

らるゝのである。

一體に文人の墨場では書は楷書をやるものが多くて草を行くものは少なく、況して篆隸を行くものとなると殆んどゐないと云つてもよろしいのである。そこで自分共は末座を穢してゐるので何とか篆文龜版文あたりの處で簡單に片付け御茶を濁して失禮をするのである。何でもよろしいから臆しないやうにして、その場面の空氣をして一層賑やかにして行くやうに客として努めなくてはならぬのである。若し突然のことゝてその場面で自分の圖章を忘れ携帶してゐないやうなときはあとから判だけ貰ひに來たり、又は鐵筆の巧なものがあると即座に壽山石か何かあり合せの石に篆して之を自分に贈ると云ふやうなこともあるのである。實にさう云つた氣轉はよくきくので抜き差しがなくなるのであるが、しかし實に文人氣分としては面白い雅席なのである。あまりひどく遠慮したりはにかんだりして座を白けさせることは一番よくないのである。その紙面に對しては固より又その場面に對して氣が引けたり又引込み思案になつたりする位なら出席を始めから見合はせる方がよろしいのである。出席したる以上は必ず何なりと御茶を濁すだけの自信を以つて臨まんければならぬのである。

支那文人の室ではさすがに硯も立派に端溪や歙州の名硯が用ひられ墨もよく磨つてあり筆もよろし



い。しかし羊毛の筆が多くて狼毫や狸毫のものは少ない。之で篆書を試むるには穂が鋭利に過ぎ且つ腰が弱くて、く、く、く、くにやして書きづらひ感じがするのである。多少その氣のあるものは出來れば自家用の筆と判は共に持つて行くなら申し分はないのである。

文字なり書道なりで支那の有識者なり文人なりと交はることは大變氣分を柔らめ、ラオボンユウ老朋友の場合には殊にその親交を深めるのである。支那に遊びに出掛くる人士はなるべくはかうした文字の士と交遊を試みらるゝことを進言して止まないものである。これならば政治問題も經濟問題も超越してやれるのであるから一番よい方法であると信ずるのである。

## 二十九 支那の書道

書道の背景には氣韻の漾うて居ることが必要である。氣韻はその人に存し、その社會に存し、又その時代にも存してゐる。その人、その社會、その時代の高雅な香芳は書道の上に自ら發露する。曲藝的の技工を弄したり、賣らんかな式の無理の小細工をやつたりするものからは超越して極めて自然にその人の熟した筆によつて品よく現はれ來るものである。

書道が藝術の範圍に入るや入らぬの論が先年來八釜しかつたが自分は上述の意味で勿論書道は藝術のうちに入らるべきものだと思ふ。たゞこれが一般の純美術の如く西人などにすぐその書の價値を理解させると云ふことになると頗る困難であらうと思ふ。

書道のこと東洋人が獨占するときめなくてもよろしいが、事實は元來がその東洋で萌芽したものだけに東洋人でなくては其の氣韻の云ひ難い所は理解されなからう。若し西洋人がそこ迄來るとしても中々の修養經驗を要するわけである。元來書道の藝術的價値はその人の直覺から來るものであるから西洋流に分解したり色々と小理屈を列べることを許さぬ。曰く言ひ難いところに氣韻の高いよい所が露はれて來るのである。

北京の顔世清君の舊藏で今日日本菊池惺堂翁が震災のとき持ち出したと云はれてゐる有名な蘇東坡の寒食帖の書卷の如き、又帝室博物館の王羲之の喪亂帖、それに岡田正之翁舊藏の九月十七日帖など天下の國寶と稱せられてゐるもの丈に氣韻の躍動してゐるものがある。その神韻の清香氣分は此等の書卷の全體に互つてよほど明白に漲つてゐる。實に入木道の極意は東洋藝術の粹の粹なるものと評してもよろしい。書道法帖に淫する中村不折畫伯などには定めて書畫一致論に就いて傾聴すべき名論もあ



ることであらうと思ふが、古人も書は畫心也と説き、楊子方言神篇に見ゆる如く書道の精神は畫のそれと一致することを述べてゐるのである。

書がその人に存し社會に存し又その時代に存するとは自分の最も力説せんと欲する所の論點であるが、その人に非ずその社會その時代でないものには王右軍のやうな書聖の筆蹟に墨を摩する丈のものは出来ない。その邊を狙つて手習ひをするにしても、氣ばかりあせつて物にならぬ。六朝や隋唐の寫經生の書いた麻紙の經卷にしてもが中々今日あれ丈の氣韻を現はすことは先づ先づむづかしい。決してインボシブルではない。しかし第一あの當時の雀頭の短鋒狸毫の筆が獲られまい。それにその時代の氣分意氣込信仰の力と云ふものが再現されにくい。信仰の力も信念もないものが形だけ臨して見たところで物にならぬ。氣韻が添はない。添はない筈である、周圍の空氣も生活の情態も何もかも變つてゐる。純な當時の寫經生の氣分になると云ふことは望まれにくい。結局古の敦煌ものゝやうな立派なものはないと云ふことになる。

人はよく、書は眞似さへよく器用にできればあとは熟練で行けると無雜作に考へる。或はさうかも知れぬ。しかし眞の藝術の眞價のあるものはかゝる手合の手によつて後世に傳へるに足るものを得る

とは思はれない。俗惡にこそなれ、氣韻生動の作は出来ないであらう。篆隸の時代は暫く置き、楷行草のものに至つてもそれぞれ時代の反映がある。宛かも畫に唐畫、宋畫、元畫の色彩特色がよく見えてゐるやうに書の方だつて同じことである。時代の反映が書道の上に看破されるとはデリケートな云ひかたであるが實際さうである。智永には智永の隋代の特色を見せ、歐陽詢には歐陽詢の唐の色彩を現はしてゐる。又董其昌や王鐸乃至は傅山あたりのものとなると、どうしても時代の明以下の新し味が増はつて来る。争はれぬのはその時代時代の氣持ちである。そこに書の藝術的の値打が存してゐるものと考へる。李陽氷が唐代の篆文をよくした。又清嘉慶の頃に安徽の鄧完白山人が篆をよくした。今日また羅振玉や故吳昌碩翁なども篆文古籀をよくしてゐる。然し李、鄧、羅、吳の靈筆を以つてしても到底周代とか秦代とかの靈に比すべくもない。それぞれ其の時代に就いて争はれぬ氣分がある。後世の者はどこ迄も後世のものである。古代に特色がある如く近代のものには近代の特色がある。これは眞似の出来ぬ特色であるからどちらがよいと云ふ差等はつけられぬものかも知れぬ。しかしその間自ら藝術的氣韻の範圍に這入つてゐるものと這入らざるものとが畫然區別されるのである。

然し書道の上にて鍾繇を習ふとか、右軍を手本とするとか、唐の太宗を學び、顏魯公を臨する、降つ



ては宋元以下のものが氣に入ると云つて稽古するものがある。少しも妨げにならない。又日本の佐理、行成、道風降つては春水、山陽、東湖何れを習ふのもよろしからう。古人の神韻を慕つて之にあやかふことは何れにしても結構なことである。けれども徒らにその形の上の癖をまねたり、よく見せかけようと勉める様な考へのみであせる氣分が手傳つてゐるならばそれは藝術上の書道の心得として戒しむ可きものである。時代の上の特色は上にも述べた如くまねの出来ないものがあるのである。と云ふのはその時代の空氣、其時代の社會が違ふ故自ら獨りであせつて見ても始まらぬのである。全く古人の書には其のバックに偉大な社會の力が活いてゐる。羲之なら羲之の書をとりにて考へて見てもそのバックに六朝の晋の時代に横溢してゐたあの藝術的の底力の大きな空氣が濠うてゐる。其時代の精神が羲之の手をとほしてほとばしつて出てゐる者と見る可きである。唐太宗の名筆だつて同じ事である。又近くは清初の康熙、雍正、乾隆歴代の天子の御筆を見ても判る通りあの時代の氣分が天子の筆を通して現はれてゐる。

すべて書は其の時代のバックの偉大な底力のある精神が活いてその人の手をかりて出現してゐるまでのものである。こゝの處の呼吸を呑み込まずしていくら心があせつて見ても始まらぬのである。それ故つまり時代の藝術的精神と云ふものは恐ろしいものである。一夜漬けのやうな簡單なわけにはまらぬ。自分で羲之の書が書きたければ晋の時代に生れてゐなくてはならぬ。そして蘭亭のほとり曲水で觴でも流して遊んで居たやうな氣分で居ることが何となくバックの力となるのである。其の邊の空氣の了解もなくただ書道だけを六朝から抜き取つて自分のものにしてやうなんて餘りに虫のよいと云ふよりは無理解な話である。吾人はどこ迄も各時代の藝術的精神の底力に就いて崇敬の念を拂ふのである。書道の藝術的觀察はかくの如く時代に價値を置いて考へることが前提として必要なことである。神經質のビジネスマン見たやうな生活を毎日送つてゐて而かも心之に超越するを得ず、脱俗氣分の妙趣を了解せず、單にあたまの轉換、精神修養と云つた目的の爲めに古人の法帖を習ふ者がある。絶えず俗務に驅り立てられるやうな氣分であるたり、又世間の空氣の全體が物質的になりせちからなくなつてゐることに心を碎いてゐるやうな連中の目にも王羲之の書の形だけは映するであらう。しかし形の奥にもつと深みのある氣韻の躍動してゐるところは看破されにくい。況んや之を自己の筆に移し取るやうなことはとてもむづかしいことであらう。

手取り速く云へば書道は深遠幽玄なる東洋藝術の一つであるからして之が奥義を味はんとする人々



は支那の空氣を先づ以つてよく體得せなければならぬ。其の空氣とは詳細に云へば色々に説ける。

その一 支那大陸の舞臺の大きくして山水平原の無限なること、つまり大自然のいかにものんびりしてゐること。

その二 自分を中心とした社會の空氣事情生活が極めて悠々迫らず、如何にものんびりしてゐること、つまり境遇に非常な餘裕のあること。

その三 文人的の空氣に充ち満ちて書ばかりでなく畫のことも會得し南畫も描けるし、詩を賦し平仄を即吟することも出来ること。つまり文人かたぎに元來出來てゐること。

その四 絶えず周圍によい文人の友の居るばかりでなく古人の名筆、名畫、題跋のよいものに親しんでゐること。天下の名品の揃つてゐる所へ出入往來してゐること。

その五 自己が書道のことと他に求むるところなく全く道樂として自分のたしなみの爲めに楽しんで之に耽り之を慰んでゐること。

その六 國家の盛衰を度外視してもよい、文事のことと打嵌まつてゐると云ふ國民一般の空氣の漲

つてゐること。つまり國亡びて文事ありと云ふ支那に生れてゐること。

數へ來たればまだいくらでも深い事情がある。あの大陸で國土の廣いこと、人口の多いこと、かう云ふ丈でも日本よりは確かに多く能書家を出させるわけであるが、兎にも角にも右に列擧したやうな事柄は日本人の書道研究者には是非とも猛省を促したい點である。これらの諸條件は何れも日本の社會國家には求めにくい。又求められさうな見込みもないやうである。又個々の日本人には従つて其の可能性が少ない。支那に歸化でもしない限りは求められないと云つた方がよい。古人の名筆を見ると垂涎三尺のものが多し。蘇東坡の寒食帖の如き殊に然りである。其の之を拜觀したものは誰れ人も自ら敬歎措く能はざるものがある。従つて之に溢れてゐる神韻は吾人を引つけ吾人を動かし吾人を無我の境に導く一種不可思議なものがある。其の書韻の前には實際帝王も、國土も國境も富貴もない。だから國亡びて文事ありと云つたのであるがさう云ふ心理情態に置かれて了ふのである。書に淫するものはこゝまで來る。こゝに藝術としての書の權威がある。書道の前には小さな排日も排外もない。四海の内皆兄弟である。書友である。かう云ふ氣分が書道から悟られて來るのである。

支那の書道は支那でなくては求められぬ。柄にない事を求めて見たところで滑稽の外ない。筆なり



墨なり硯なり紙なり卓なりを支那流に改めて見たところで人間から改めてかゝらなくては支那の書は日本には求められぬ。第一筆の持ち方が單鉤でも双鉤でも指のひきかけやうが違ふ。手くびの曲げかた角度も著しくちがふ。卓に向ふときの態度姿勢もちがふ。氣分もちがひ、あたまの中もちがふ。又血のめぐりかたも違ふと云はれ、又詩文のたしなみも違ふと云つたやうに環境が全きり違つてゐる。つまり日本人は支那の文人には叶はぬと云ふことになる。事實日本の書道の會の時など支那文人の參觀客が時たま見に来ての批評に口先きの御世辭はよいが却つてこちらで身に汗するやうな苦しい目にあつたことがある。筆紙墨硯すべて支那が本場であるからして本場に名筆能書の多いのはあたりまへである。支那では看板に立派な文字を見るが日本のそれには悪筆ペンキ屋の仕事とは何たる事かと皮肉られたこともある。

しかし負け惜しみではないが日本の正宗の刀は支那の青龍刀の味と著しく違ふ。刀では古の千將莫耶はいざ知らず後世では日本の刀の方が異彩を放つてゐる。日本には日本の特色がある。藝術としての日本の書道は、公任、行成、道風、貫之にありと云ひ得る。又假名の走り書き殊に横紙の半切に立ちながら三くだり半など見るまにすらすらと書き流すところのわざは冴えたものである。又その筆蹟

はたいしたものである。舊派の芝居で三下り半の舞臺面を見た支那學生は其の書き振りの姿を見て驚くであらう。立つて書くなどは支那の古禮にないと云ひ出し書道の藝術を打こわすも甚だしいと難ずるであらう。日本には日本の書法がある。そして其の間に自ら和臭と云ふ語さへ生み出されるに至つた。支那風の書法に目の慣れたものは和臭の書をきらふ。邪道の如くに云ふ。春水の書にしても鳴鶴の書にしても今日では後藤伯の書にしても和臭の方から云ふとその顯著なるものである。しかしそれを氣にするにも及ぶまい。土地の産物同様に其の特色の見えてゐるのは當然である。和臭のあるこそ却つて日本式でよろしい理屈である。しかし要點は氣韻の存するか否かにある。藝術的に物になつてゐるか否かにあるのである。たゞ今日のやうな日本の國內の情態では書道も畫道もあつたものでない。文墨のことはどこにしても同じことで現代を超越し俗界から離れたものであつて始めてそこに藝術的妙趣の現はれるものが多い。しかし日本の國土はかやうな贅澤な呑氣なことを許さない。いつもせかしくした餘裕のない様な情態に在る。短兵急に物をやり遂げようとする忙はしい國である。千ヤードのマラソンにゆつくりかゝるよりも百ヤード競走に向ふ鉢向きで飛び出したがる連中の多い國である。支那の藝術を標榜して支那の書道に向かふを張ることに努むるよりも、日本は日本で日本式の入



木道を開拓する方が却つて賢明な策でないかと思ふのである。しかし青山翁(鹽谷)や木堂翁のやうな時には例外もあるのではないからあながち和臭黨の爲めに將來日本式の藝術を自決的に立てよと云ふのも早計かと思ふ。要するに日本書道の將來は或る意味に於て未知數である様な氣がせぬでもないとかゝる謎の如き言葉で之を結んで置くことにしよう。

## 四 市井の翰墨餘光

### 三十 古玩店

支那の古玩店は古代文化の結晶物たる考古資料を陳列してゐるの觀があり、たとひそこに一つのかね目なものはなくとも自分はさうした古玩店頭に立寄りて主人どもと閑談することに特殊の趣味を感じてゐる。その考古資料はたとひ白玉のバンチー搬指一つを取つて見ても古代人の弓を射るにいかなる物を用ひてゐたかの風俗を察する有力な手掛りとなるのである。その形は玉製の指輪式のものではあるがそれを右手の母指に嵌めて見て古代の遺風を忍ぶことが出来るとは懐かしい話である。この搬指は後世弓術の意味を離れ文人どもが單に母指に嵌めて町の散策のときなどにステッキ代りに用ひらるゝものとなつたが、それにしても之を弄びてその手持ちぶさを慰めてゐるのは面白い。

すべてかう云つた古物を古玩と云ひその店舗を古玩店と云つてゐるのである。こは一に又骨董店と



も云ふが古玩店の方が一層ひろく行はれてゐるやうである。北京では有名なリウリチャン琉璃廠の古玩店、延古齋である。自分は先年加藤拓川翁と古玩漁りをやつてゐたときである。珍しい金石ものが目に留まつた。一對の軸物に仕立て、あつて物は埃及のオベリスクの文字を拓したもの。正しくこはトゥンファン端方大人の舊藏のものであることが判つたのである。その賛に曰く、

埃及五千年古石人臂前題字拓奉

大哥大人鈞鑑

丁未荷花生日

弟端方敬題 陶齋

とあるので疑もなくその筆蹟は陶齋端方大人即ち端方自身のものである。端方が埃及の古玩金石を蒐集してゐたことは有名な話であるが、こはその遺品の一つであるから自分は入手して今も之を書齋に掲げ朝夕眺めて楽しんでゐるのである。

又昨年春正月であつた。同じ琉璃廠を散歩してゐたら式古齋のチャンクイ掌櫃が自分を呼び止める。請ぜらるゝがまゝに奥の室に入つて見ると數年前から自分に見せてゐる古名硯の寫本、西清硯譜（十三冊本）と云ふのをいまだに持つてゐてそれを殊勝けに見せるのである。價を聞くと一千幾百弗とか云ふ。相變らず高くとまつてゐるのである。古玩舗の番頭と云ふものはよく人を覺えてゐるもの

である。人の顔さへ見れば名硯の話をしかけて来る。十年この方はめつきり古名硯と云ふものも出なくなつた。がしかし延古齋、尊古齋、式古齋、典古齋に掃葉山房あたりの掌櫃は少しは石が判つてゐると見えて、時には相當な名硯を清賞してくれと云つて奥の室に通し茶など請ぜんとするのである。時には金冬心の銘に顧二孃、朱彝尊、高南村あたりの銘のある優品も出して見せることもあるが大抵は怪しいもので石質もあまり感心しない。價のみ高くて高雅な氣持がしない。むしろ去つて西直門に近きホウメン後門の古玩店に車を飛ばしあの邊で掘り出し物でもやる方が楽しみも深いぐらひである。かつて正金銀行の武内金平翁や土屋君と同導し後門のとある小古玩舗で乾隆刻長方大硯の水巖青花紋の鮮かなものを獲たことがある。今も座右におき時に水をかけてはその青花の幽趣を賞してゐる。後門の途上景山のうしろあたりにピンクチイ品古齋と云ふのがある。北京に行く度に立寄つてゐる古玩店であるが自分はそこの樓上にあがり張瑞圖の眞蹟書卷に顔魯公の古拓、並に康熙御覽之寶と云へる墨印を見せられ古拓と康熙の墨印とを入手した。清朝没落後かうした宮室のものがちよよいちよい市井の巷に賣り物になつて出るとは時勢が時勢であるから仕方がない。こは誰れ人の手に歸するか判らぬのである。



又南方はこの頃蘭亭曲水の方へ遊歴に出かけて行つて見ると、途上、錢塘は杭州城内で古玩漁りを恣にして見る。何紹基の四幅對が不圖見當つた。何しろ田舎店のことではあり阿片の散つた痕などで汚くなつてゐたのであつたが、四分の一の相場に値をつけたハオハオ好好と云つたので止むを得ず入手した。不要だと思つて面白半分に假りに値をつけて見るまではよろしいがハオハオとやられてしまふと此處は荷物になると云ふ氣がし始めるので厄介極まるのである。旅先では殊に此の點を考へておかなくてはならぬ。

或は長江を廻り三峽を越えて萬縣重慶に至り更に二百餘哩を遡つて岷江に臨んだ叙州の町あたりに行つて見る。珍らしい奥地の山郷ではあるが西藏雲南と成都方面の三方の衝に當たつてゐるところだけにかなり取引も活潑なところである。市中見物のつもりで岷江沿ひの方の目抜き町の町をあるいてゐたら明かるい感じのする古玩店があつた。店の名は覚えてもゐないが何でも自分にさつぱり譯の判らぬものがあつたので参考の爲めに大小二個それを求めて見た。土民にその名前を聞いて見たらホンバオ紅寶と云ふものだと言つてゐた。二三寸大の正方の眞鍮板にちよつとした仕掛けのできてゐるもので、何でもない品物であるがこは博奕用のものでそのやり方はこれこれだと説明された。重慶に下つ

て來て實物を前に支那人どもにその話をして見たが重慶にはかう云つた勝負事はやらないものだから知らぬと答へてゐた。ホンバオ紅寶とはよく藝者などにも見る名であるが、自分が四川土産に之を持つて歸つたのは思ひ出が深いのである。

上海の古玩店では時々河南彰徳の出土産殷墟の龜甲獸骨を見るのであるが殆んど十中八九は偽せ刻のものばかりで少しも感心しない。北京方面でもよく見せらるゝが多くはいけない。チャアデと云ふと古玩の店主はむきになつて不機嫌な顔色を見せるがたしかにいけないものはいけないのである。しかし求めるつもりはないからよい加減にお茶を濁しておくのである。それよりも六朝から隋唐あたりの石佛の全身又はその首だけで勿體ないやうな氣持ちのする見事なのを見せらるゝとがある。これはおのづからあたまもさがるのである。かくして古玩から古玩を漁り眺めてゐると殆んど時間のたつのも覺えないのである。始めは古玩中でも金石翰墨をと考へてゐても、いつしかその目に映ずるものが澤山あるものだから目うつりがしてどうもならぬものである。しかし不要なものでも時には求めてやる考へでなくてはつなぎにならぬ。互に相倚り相助くるの氣前であることが大事であるから、いくら古玩商人だからと云つても見縊つてかゝることはよくないのである。時には機嫌をとると云ふ程でなく



ともよい氣持ちにさせておけばやがて又こちらの云ふことも聞いてくれる。然るを單にこちらの考へのみを通うさうとするだけでは双方の間に情味が通じないことになる。中には古玩店の番頭でもかなりよく翰墨のことに精通したのもあるのであるから或る程度まではよく相手の氣持ちにもなつて老朋友と云つた形になつてやる方がよいのである。するとあとでいくらでもよい材料珍器など手に入ればすぐ外よりも先づ自分の宿まで持つて来て見せると云ふやうなわけにもなるのである。古玩を前に文墨を語ると云ふことは相手の心のゆとりを見越して趣味談に耽るわけであるから、その邊はこちらでゆつくり落付いた態度を絶えず持つことが必要だらうと思ふのである。尙その古玩あさりの序で支那漫遊のときは多少變つた掘り出しの場所、曉市と云つたものにも足を向けて見るのが面白い。すると下層民の生活振りの半面もそこで判るのである。

支那翰墨の餘情は必ずしも名流名門の家や一流の古玩店に行つて見なくては味はれないと云ふやうに窮屈に考へなくともよろしい。名流にはおのづから名流向きのものがあり、又古玩店には古玩向きのものが出てゐる。廣東であらうと福建であらうと又滿洲あたりから山東江蘇、安徽、江西、湖南湖北と支那は廣いから色々各地をあるき田舎の情趣やら古玩の興味やらを味はつても見てゐる。が大抵古

玩店と云ふものも型がきまつてゐて別段奇想天外のものもなく先づおきまりものゝみである。

ところが北京とか奉天とか云ふところに行くと名物の泥棒市と云ふのがある。何でもかでも泥棒して來たものを薄利多賣式に列べてゐるところであると云はれてゐる。北京では南部の天壇に近いところに出かけて見ればすぐ判るのであるが、ハアタメン哈達門外から眞一文字に南に行つて突き當つたところから右に折れ例の天橋路に向かふあたりその邊はシャオシイ曉市として知られてゐるところである。朝早く夜の明けぬうちから賣買取引のある市の意味であるが、かう云つたところはまだ北京にはいくらでもあるのである。例へば

一 朝陽門内の曉市

二 天橋路の曉市

三 頭髮胡同内の小市

などと云ふがそれである。こはその列べられた品が必ずしも盜難品のみと云ふわけではあるまいがともかくひどいがらくたが多い。けれども時には相當立派なものゝ一部分でちよつと部屋飾りの置物になるものとか、又考古資料風俗資料と云つたやうなものも發見せらるゝのである。それ故ひまをこし



らへてでも一應かうした場末の市にも踏み込んで見ることは意外に興味深いことと思ふのである。

## 三十一 柳巷の影

市井の巷をあるく游客は又柳巷にも足が向かふことであらうと察せらるゝ。こは必ずしも狭斜の巷と云ふ狭い意味ではなく、又その情緒に溺れると云ふ意味でも勿論なく、全く翰墨趣味の方から見るとそこには一種云ふ可からざる美しい文字が使用せられ、それが古めかしい風韻を漾はせて思はず、商女は知らず亡國の恨と唱はしめた唐朝の氣分を聯想させるところもあるのである。

文人幽居の消息のみを物語りて之が翰墨生活の全部でもあるが如く狭く解されてはいけない。翰墨界の空氣には明かるい柔らかな氣分も交じつてゐるのである。宮女花の如く春殿に満ちてゐたあの六朝から隋唐の盛時を追想して見ても、それを背景にした文學なり娛樂なり趣味なりと云つた優し味のある空氣がいかにも世間に漲つてゐたかゝ察せらるゝのである。支那では古玩漁りの途次どうかすると脱線のつもりでなく真にその文字美の情緒を味ふべく時々友を同導して柳暗花明の巷を參觀することがある。別段樓に上つて見なくとも名句は巷の入口にも掲げられてあつていかにもその情趣を漲らせ

てゐるのである。「市上の數百家は此れこれ李翰林の樂處、甕邊尺寸の地は畢吏部の醉郷たるべし」とあつたり又「一樓の風月まさに酣飲すべし、萬里の溪山醉眸に豁く」等とあつたり又「座外黃公の市、雲間李白の樓」など云ふのも見當つたりする。

座外黃公市 雲間李白樓。

一樓風月當酣飲 萬里溪山豁醉眸。

市上數百家此是李翰林樂處 甕邊尺寸地可爲畢吏部醉郷。

と云つたやうなのはお定まりの方である。その柳巷街の柳の影には又照像鋪や古玩鋪などもあつて相當そこには文字美の景趣も見せてゐるのである。「秦鏡懸かるが如く機關參透し、廬山此に在り面目眞を留む」などあるのはその照像の店鋪たることが判るのである。また酒館酒樓に行つて見ても随分美しい文句が讀まるゝのである。「君に勸めて更に盡くす一杯の酒、爾と同じく消すと萬古の愁」であるとか、「江上の竹光醉客を留め、花前の玉蘂春濃を待つ」であるとか「水は碧玉の如く山は黛の如く酒は金樽に満ち月樓に満つ」とか、よく見る句であるがかうしたお定りの聯句を讀むのである。

勸君更盡一杯酒 與爾同消萬古愁。

市井の翰墨餘光



江上竹光留醉客

花前玉蕊待春濃。

水如碧玉山如黛

酒滿金樽月滿樓。

また歌館あたりに這入つて見るとかなり變つた句が見當る。「野雲几席に停まり、天籟笙竿を動かす」であるとか、「三杯の淡酒明月を邀へ、一曲の清簫紫煙を凌ぐ」であるとか又「疏影の花香絶調を傳へ、珠簾の繡幙春風に對す」と云つた類のものも誦せらるゝのである。

野雲停几席

天籟動笙竿。

三杯淡酒邀明月

一曲清簫凌紫煙。

疏影花香傳絶調

珠簾繡幙對春風。

また路を轉じて斜街の茶館に行つて見ると清趣自らその聯句に見ゆるものがある。「塵慮一時に淨まり清風兩腋に生ず」とか「九曲の夷山雀舌に採り、一溪の活水龍團を煮る」など云ふのがそれである。

塵慮一時淨

清風兩腋生

九曲夷山採雀舌

一溪活水煮龍團

文墨古玩あさりの趣味がかうした茶館酒樓の方面に見出さるゝと云ふことは八釜しく云ふものは之

を好まないかも知れぬが、事實人情の機微を穿ちその風韻を品よく歌つてゐるもの此の方向に若くはないと云つてもよろしいのである。わけても時々前にも云つたその酒樓の聯句に「美味偏に招く雲外の客、清香能く引く洞中の仙」なんて云ふのが見つかるのである。

美味偏招雲外客

清香能引洞中仙

かう云ふ風な瀟洒たる氣分を味ふことは云ひ譯をするわけではないが、事實古玩あさりの心の轉換法にもなり全く文字美を涉獵することにもなるのであつて、どこ迄も吾人の幽情を暢舒するものがあるのである。

三十二書 林

北京の瑠璃廠あたりを歩いてゐるとよく見る句に、

夏鼎商彝陳列滿座

隋珠和璧價值連城。

と云つたやうなのが門に見えたり、又その隣りには

六藝文章華國寶

五經才調治安書。

市井の翰墨餘光



孕天地心藏古今富

由聖賢路取功名階。

と云ふが見える。前者は古玩骨董店であり、後者はその書林の文字であることがその門内を覗かずして明かなのである。これらの文字は云ふまでもなくいつもの例でも判る如く、その場合その業務によつて異なつてゐるのであるから大體その文句の意味さへ判ればそれが何店であるかを推知することはむづかしくないのである。

これは又ロンフース隆福寺あたりの胡同に入つて見ても又宣武門内の小市に行つて見ても同じやうなわけである。ところでかう云つた聯句を見て、奎文堂であるとか翰琳閣であるとか、又述文堂であるとか日本人の比較的親しみのある店にでも行つて見るとその愛憎は中々よろしいのである。そして金石、歴史隨筆、文學、戯曲、經學、碑帖、書畫、扁面と云つた様なもの何でも藏してゐて之を客に請じ、どうかすると後房に導いてこゝでお茶など出して呉るゝのである。如何なる稀書珍書でも之を搜索するやう依頼しておけば屹度どこからか搜し求めて來る。若し法帖類で、顏真卿、虞世南、蘇東坡、鄭板橋、董其昌あたりのものでも依頼しようものならいくらでも集めて來る。岳飛の出師表の如きはいくらでも持つて來る。宿がわかると毎日のやうに朝から持ち込まれるのである。

勿論支那では書物に限らず、何でも宿まで持込ませると云ふとはその門番の権利としてゐるもので、メンチエン門錢と云ふものを一割とか二割とかとられるわけである。従つてそれ丈高いものを買はされることになるのである。それ丈のものを看門に支拂ふ約束でなくば中に持込むことは罷りならぬと來るのであるからこれだけは税金とも見られるのである。あの朝寢坊の支那人がその約束を七時とか八時とかきめたときは必ず早朝時間をたがへず持つて來る。そこは感心なものであり又よく當てになるのである。

支那の書林と云ふのは上海あたりの商務印書館であるとか中華書局、世界書局あたりは別であるが多くの店舗が狭く而かもその空地がいくらもなく店頭は行きなり書棚で壁を埋めてゐる。天井まで書物の小口が揃へられ一パイ高く積み上げられてゐる。仰ぎ見るにしてもとても首が痛くなつてしまふ。一々散漫に積み上げられたものゝ中から搜し出すのは容易でない。近來木版本は少なく大抵假り綴の活字本で極めて安値なものゝみになつて來たのであるが、それにしても店と云ふ店の恰好は同じやうに窮屈なものである。よほどの閑人でなくては支那に行つて書物漁りは出來るものでない。それ故大抵書林に注文して宿へ届けさせるのが一般のきまりとなつてゐる。たゞ然し掘り出しとかまぐ



れ當たりとか僥倖を喜ぶものは時間をかけても遊び半分にやらなくてはなるまい。

總體書林の主人番頭や古玩舗の主人には随分變りものがあつて相當譯の判つたものがあつる。典古齋の老爺などの如きは有名なものである。別段書物を買求めなくともよろしい。唯遊びに行き後房、紫檀の八仙卓上茶を請ぜられ山月の情趣をきめ込んで話して見るのが面白いのである。老爺は必ずしも商賣にならなくともよいと云つた態度で大きく遠いところを考へてゐるのであるから、こちらも友人でも紹介する位の考へで呑ん氣にかまへてゐてよろしいのである。しかしたまには義理にも大きなものを註文してやりたくなつて来る。老朋友になつて来れば可愛くなるのが人情である。又商人と云ふ點を離れて一種大陸の氣分で見ると面白くなるものである。第一さはりがよくて中々よく努めてくれるところが判つて来るのである。

古いなじみになり互によく知り合つて来れば番頭が書物の取換でもすぐハオハオ好好で氣持ち善くやつてくれるやうになる。又倉庫から態々さがし出して求めに應じて呉れる、無賃で届けてくれるぐらひのことは固より譯のない話である。唯近來は湖南に行つても山西に入つても四川に入つても珍書と云ふものが本當になくなつて来た。又その價が暴騰して来た。高くてよいものは紐育なりポスト

ンなり、アメリカへ向かつてどんどん行つてしまふ傾向をとるに至つた。米人は自分でよめなくとも金力で買ひ込み英語のわかる民國人に讀んでもらふから差支ないと嘯いてゐるのである。

近來支那には排日氣分の爲め迷惑をしたり世體間を憚つてゐたりするものがあるが、對支文化事業の委員になつてゐるやうな名士連中にはさうでなく自家の藏書を珍書の故をもつて書林の手から出たこととして目錄まで作り出してゐる者がある。目下の支那としては是非なきことである。當人が之を推選してその筋へ買上げてもらふやうなことをするのも當然のわけである。又實際のものもよいものであると考へらるゝのである。かうした方法はその一例に過ぎぬが何とかして此の際外人の手に渡さうと云ふのが支那今日の藏書家の苦心であるやうにも見える。葉德輝先生の如きも十年前からそれを考へてゐられたが、たうどうその思ひを果たし得ずして結局長沙で土豪劣紳の大罪に問はれ共産連中から銃殺されてしまつた。早く書林にでも出せばよかつたのであるが惜しい氣の毒なことをしたものである。

支那の書林に行つてゐて自分共が一番感心せらるゝのは、あの漢籍の澤山あるものゝうち、ちゃんとした立派な軼入りの書物であるところ、こゝに几帳面なよく揃つた小口書きのされてゐることである。こゝ



れはくだらぬことを感心するものだと言評するかたがあるかも知れぬが、これ計りは支那の書店でなくては出来ぬのである。皇清經解であれ太平御覽であれ史記列傳であれ、金石索であれ西清古鑑であれ説文解字であれ、かう云つた冊数の多い物になると殊にちやんと入れられてゐるのである。又之を書き入れてゐる筆耕の念入りにやつてゐるところ、その小楷は一絲亂れず、同じ寸法で揃つた型に入れたて行くこととは全く機械のやうである。活字で捺してもあれ文品格よく行くものではない。實に歎美の外ないのである。かう云つたやうな優しなつかしい支那書林のやり方は世がいかに三民主義に移つてもどこ迄も之を存続させるやうにしたいと思ふのである。

三十三 古 玉

ハンユエ漢玉と云ふ言葉は支那考古資料をあさる上に重要な部門をなす語である。色の少しく薄黒くくすんだものから半透明のもの、土中してゐた爲め曇つたもの、色々様々ではあるがしかもその物には頗る面白いものがある。

- 一 帶 鈎 二 玉 蟬 三 香 爐

- 四 搬 指 五 玉 環 六 玉 管。

又更に遡つては周代と云はんか、三代のものと言はんか、これには一層又珍奇なものがある。

- 一 玉 印 二 璧 玉 三 玉杯玉壺
- 四 玉 盤 五 玉 圭 六 璜 玦

と云つたやうなものが無限にある。漢玉以下のものになると玉の置物、玉の觀音像、玉奩、玉の肉池玉硯と云つたやうなものがざらにある。しかし古玉でなくては新玉の及ばない丈の澁みと趣とが出て來ない。近來、メキシコや南米あたりから來る新玉で作つたものなどはとても御話にならぬのである。

支那では古語に「天上の明は河銀を水となし、海中の仙は樹玉を林となす」と云つてゐる位玉を尙んでゐるのである。

天上明河銀作水、海中仙樹玉爲林。

尙廉頗林相如の故事で有名になつた和氏の璧とか夜光珠など云ふのも今日ではその語を知らぬものはない。或は葡萄の美酒夜光の杯と云はるゝ夜光杯はいかなるものであるか、之なども誰しも見たが

市井の翰墨餘光



る珍奇なものである。自分は北京古玩店で之を先年獲たが今又愛兒毅の爲めに同様のもの一對を入手した。恐らく漢代のものと思はるゝ位古いものであるがたしかに夜中燐光以上の明るい光輝を發してゐるのである。之を見るには二明の夜光の珠を磨擦するにあるのである。これなどは先年三上參次先生の旅先で少なからず興ぜられた品物であつたのである。日本には古玉の趣味は少なく、又實物も少ない爲め古玉そのものを手にせる者は多くないやうである。ところが支那では君子は玉を愛し又温乎として玉の如き氣分を愛せらるゝところもありしてともかく古玉そのものは随分珍重せらるゝのである。こゝが支那の支那たるところでキセルの吸口とか帽子のつまみとか書鎮とか鼻煙壺とか云つた小物にしても随分之用ひてゐる。呵片室の用具に至つては最も之を盛に愛用してゐるのである。

古代支那の温雅な氣分で而かも翰墨趣味に一致してゐるものは古玉であらうと思はるゝが甘肅省の藍田の玉と稱せらるゝものは古來最も珍とされてゐる。唯いきなり玉を取り出され此れはどこの玉かと云はるゝ時は容易に判らぬ。そこで多くは漢玉であらうと時代の上で大體の品定めをしてゐるやうなわけである。玉に次いででは瑪瑙であらう。瑪瑙も相當珍とせられ之には生まのものと煮いたものがある。よく彫刻された香爐とか觀音像、獅子の置物とかは多くは煮いて細工したものだと思はるゝ支那人は

云つてゐる。煮いたものゝ方が柔かみが増して感じもよろしい。自分はその竹節後凋の圖案になつた墨床を多年愛用してゐるが何とも云へぬ好い感じがする。瑪瑙は古玉と併せ古代支那の趣味を味ふ上には最も面白いものゝ一つであると斷言してもよろしいのである。その他寶石類になると色々澤山ある。又漢代の硝子即ち玻璃と云ふものも西域から輸入せられたもので古玩用器として又裝飾用の南京玉としてかなり澤山發見せられてゐるのをよく見るのである。

古玉、瑪瑙に次いで更に又翰墨談によく出るものは次の品々であらう。

- 一 翡翠
- 二 珊瑚
- 三 紅玉
- 四 ビーシー
- 五 孔雀石(綠・藍)
- 六 水晶
- 七 松樹石
- 八 象牙
- 九 琥珀
- 十 珊瑚

かう云つたものが或は彫刻に又象嵌に種々の圖案化せられた藝術として古代の珍什の上に見えてゐるのである。若しそれ印材の方面となると自ら又別で之には澤山のものがあるから後にまとめて述べることとする。支那でも寶石のうちの玉と稱せらるゝものは金剛石であるが、これは他國より輸入せらるゝものゝみであるが支那産のものとしては山東省新泰地方の鋼石と稱するものがそれであると云はれてゐる。小藤理學博士から承つてゐるが、道理で日本に來る瀬戸物直しかすがひ止めの行商支那



人は悉く殆んど山東人のみで、その郷里はどこかと聞いて見ると済南の田舎からだと言つてゐる。山東の鋼石は瀬戸物に小孔を開けたりするには持つて來いの硬度を有しその値も高くないらしいのである。山東の鋼石がいつの時代から採掘せらるゝに至つたかは之を審かにしないが、今日それが黒色ダイヤモンドの一種であることは専門家の間で云はれてゐるところであつて或る方面では極秘に付して踏査してゐるものもある。濟南から泰山曲阜方面に行かれるものはこの種の寶石の所在を見るのも一興である。尙滿洲方面に遊ぶものは例の岫巖石と云ふ半玉半石のものゝあることを知つてゐらるゝであらう。

總體古玉にしても寶石類にしてもこは貴重視せられてゐるだけに、古來佛像であるとか佛塔であるとか或は極度の愛玩物であるとか云ふものに散り嵌め、之が勿體さを増させるやうなところに應用されてゐるのである。その三代古銅器の蓋子に用ひられたり、古名硯の蓋に用ひられたり、甚だしきは皇帝即位用の御衣に散り嵌めて織り成せるものまでをも見るのである。實にその點は至れり盡せりと云ふ可きである。

## 三十四 靈壁

翰墨を好む風人の書齋、客廳を訪ねて見ると正面の卓上には大抵珍らしい石の置物が飾られてゐる。その置物と云ふは先づリンビイ靈壁と稱せらるゝ奇石の狂態を示せるものが紫檀の臺などに載せられ而かも何となく落着きのある風格を漾はせてゐるのである。

文人の幽齋と靈壁と云ふと殆んどおきまりのつきものとして認められてもよろしい位に普通になつてゐるのであるが、その奇形狂態の種類は千差萬別であつて或は夏雲の奇峯を聯想させるもあれば峨眉、五老峰と云つた奇峭を髣髴せしめてゐるものもある。或は天女の舞へる貌にも似たるがあるかと思ふと、獅子の蹲踞せる如きものもあると云つた風に色々のものがあるのである。しかし靈壁の共通點と云はるゝ形は常にその頂きの奇峰や胴體のいかに大きくてもその奇峰を支持する巖の根もとの小さく纏まれることこの點である。小根によつて大巖を支持しその間に平衡を失はないやうに鈞合よく樹立せられてゐることこれである。又靈壁には普通その胴部に大なる空洞、孔穴を有するとか、さもなくば大きな切れ込みを有してゐたり、大半不規則に抉ぐられてゐる自然の造化の妙を誇れるやう



なものもあつたりするのである。その石質、石色、石品は愛するに足りるものが多く、又石肌はやゝ光澤を見せる位に磨かれてゐるものが多い。その色は漆黒なるがあり又灰蒼色なるがありして沈重の趣を見せてゐるものが多いのである。

翰墨を嗜なむものゝ卓上に若し靈璧を見ないときはその代りにいかなる置物が飾られてゐるかと思ふと玉石類では

- 一 青緑の孔雀石の置物
- 二 松樹石（タオコワーツ）の自然形のもの
- 三 礪石（純鐵そのまゝのもの）
- 四 龍骨（マンモスの如き前世紀の巨獣の大白齒）
- 五 夜光珠
- 六 紅白の大的珊瑚樹鉢植
- 七 珊瑚樹の幹に翡翠の葉、寶石の柘榴などより出来たる鉢植もの
- 八 瑪瑙、水晶、青玉などの彫刻物

と云つたものがそれぞれ紫檀の重の上に面白く飾られてゐるのである。翰墨趣味の方から云へば文人どもは何をつかまへても詩文の佳句を入れ文字で以つて埋めるぐらひまでやるのであるが、しかしこゝに述べた置物の類は殆んど題銘を入れることすらもむつかしいのである。大抵その材のまゝ又は之に刀を施したくらのものを飾つてゐるのである。これは文人趣味から云ふとやゝけばけばしい嫌ひがないでもないが、しかしその大部分は贈答品として自然集まつて来たものではないかとも思はれるのである。

その幽齋の一隅には春蘭、素心蘭などの馥郁たる盆景のあることがあり、又支那水仙の水盤がおかれてあつたり、或は香芳の高い柑橘類の大きな鉢植が持込まれてゐることもある。蘭、梅、竹、菊の四君子の配合よろしきを得るところへさして上に述べた如き靈璧その他の置物の飾られてゐる書齋と云ふものは、何となく風人高士の幽趣を一層奥ゆかしく物語れる感じがして、自分共はかくの如き書齋へ出入するだけでもよい氣持ちにされるのである。そしてその書齋の壁に掲げられた文字に視線を注いで見ると「奇石含み盡くす千古の秀、異花長へに占む四時の春」とあつたり又「一簾の風月王維の畫、四壁の雲山杜甫の詩」などとあつたりするかと思ふと又隣室の柱楹に「琴を抱いては鶴の



去るを看、石に枕しては雲の歸るを待つ」なんてあつたり又「書卷は春色をして老いしむるなく、柴門は俗人の爲めに開かず」などと云ふ句のあるのを見るのである。

奇石盡含千古秀

異花長占四時春。

一簾風月王維畫

四壁雲山杜甫詩。

抱琴看鶴去

枕石待雲歸。

書卷莫教春色老

柴門不爲俗人開。

かう云つたトイヅ對子の佳句はその主人の風格、室内の調度と最も調和して眺めらるゝものであるからその文字の爲めにどれ位翰墨趣味の唆らるゝか判らぬのである。日本では單に置物が飾られたり扁額が掲げられたりしてゐても幽齋にふさはしい聯句の佳なるものが乏しく、又その主人の風格に於ても足りないところがあつて一段の修養が望ましいと云つた感じを禁じ得ないのである。

靈璧その他の怪石、玉器が置物として飾らるゝことは單なる花瓶とか平瓷とかの飾られたるのとは段ちがひで一層奥深い感じが與へらるゝのである。尙古硯然り、古銅器然りで、すべてかう云つた沈重に富んだものを陳列してその高雅古色の味を楽しむと云ふことは翰墨生活の一半を物語れるものと

云へるのである。

自分は生來石を愛する癖を有してゐる。靈璧と云はず怪石と云はず古硯と云はず、凡そ石なるものはその泰然自若たるところに佳い處があり、その何等求むる所がなくして自ら千古の秀を含みつくし悠久不磨の情趣を漾はせてゐるのである。古人云へるあり、幽鳥は自ら來たる約有るに非ず、玄心は獨り抱くとも情なしと。自分の石を好む所以の心も亦これに外ならないのである。かうした愛石趣味から園は靜かに花客を留むるの處、文人の幽居風懷を祭して見ると、そゝろに古人が巧みに「芳草斜陽の外、落花流水の間」かと云つた句があるかと思ふと又、「鳥啼いて春院靜かに、魚戯れて野池幽かなり竹を搖がせば一身の雨、花を摘まめば滿手の香」とか云ふ詩韻を思ひ出さずにはゐられないのである。

芳艸斜陽外

落花流水間。

鳥啼春院靜

魚戯野池幽。

搖竹一身雨

摘花滿手香。

これらの佳句に詩趣を味ひ石品を懷ふときは、誰れか翰墨談の幽玄味に憧憬をしないで居られるものがあるであらうか。



## 三十五 香 爐

シヤナル香爐と云へば支那翰墨趣味の最も幽玄なる方面の氣韻を聯想せしむるものである。香を焚いて古人の書を読むとか、香を焚いて茗茶を煮るとか云ふことは、林間に紅葉を焚いて酒を温むる以上、幽玄味のあることゝとして文人仲間では考へられてゐるのである。紅葉を焚く話も風流でよろしいが、たしかに香を幽齋で焚いて書を談ずるなど決してわるくはないのである。

香爐はあとにも先きにも漢代の博山爐を以つて最も優秀なるものとなしてゐる。恐らく漢代に西域、ロフ湖畔の噴火山の噴火してゐる景色を形の上に採入れて現はしたものだらうと云ふことであるが、さう見ておいてもよろしからうと思ふ。古銅器の優品中にもその秀逸なる博山爐のあることは住吉の住友男爵のそれを見ても判るのである。後世博山爐の寫しはいくらでも出来てゐるので多くは模造品で間に合はされてゐるのであるが、原型の博山爐と云ふはその味が又格別なものである。漢代の出土品では焼物で出来てゐる香爐が亦面白い。細川侯爵家に現在寶藏してゐるものは焼物の博山爐として出色のものである。日本にはかうした逸品の流れ込んでゐるのは不思議であるが日本の方が支那

におくよりも安全地帯であると云ふ關係もあり、又共有にしておいて彼我の學者考古趣味のものゝ集まり合ふと云ふのも一案であらう。

香爐としてはその他古玉、水晶、白玉、翡翠色々の彫刻品として存してゐるものゝかなり澤山ある。支那にはむしろかう云つた彫刻品の方にそれが仰山見つかるのである。その様式、細部の刻に游環の鮮やかさなど六七寸大のものに随分立派なものがあるやうである。降つては宣徳年製あたりの新しい銀器銀象嵌ものもかなり多く支那では見出される。よいものいかさまものは何れも鑄銘を見ると宣徳年製とか又宣徳監製とかある。よく見別けをして見なくてはならぬのである。そしてそれが銀象嵌の絶品であるならば石叟の二字銘が這入つてゐる。これは大抵間違ひはないやうである。尤もそれも極めて生ま生ましいものであれば見るのも厭やなのである。總體唐宋以後の香爐になると多くはその蓋子を有せずしてその形もやゝ古風な處が抜けて来る。明清あたりのものであると古玩舗にもざらに出てゐると云つてもよい。がさて姿の整つたもので古色のあるものとなると矢張り少ないのである。その眞鍮製の俗悪のものならいくらでもある。もし苟しくも翰墨を談ずると云ふものは少しは見飽きのしない古色蒼然滋味たつぷりと云つた香爐の一つ位がそばにあつて欲しい。これは室の空氣を作る



ことが第一必要である。又實際その香芳は氣韻を高からしむる上に肝腎なものである。香木としてのピヤクダン白檀、沈香などの文人墨客の客間に、又禪寺あたりに用ひられてゐるのは周知のことであると思ふ。

香に就いては古人の名句が澤山ある。「南豊の妙韻を采つて、西域の奇芬を蘊む」とか、「名は芳ばしく蘭蕙を播き、價は高く璠璣を越ゆ」なんて云ふのがあるかと思ふと、「市に棲むも敢へて蘭蕙の室に誇り、香を尋ねて頗る愛す鷓鴣の斑」と云つたのがあり又「一瓣の氤氳壺中に蕪り、九天の馥郁雲外に飄る」などと大きく出てゐるものもあるのである。

采南豊之妙韻

蘊西域之奇芬。

名芳播蘭蕙

價高越璠璣。

棲市敢誇蘭蕙室

尋香頗愛鷓鴣斑。

一瓣氤氳壺中蕪

九天馥郁雲外飄。

尙かうした名句をあたまに入れ沈香白檀の類を嗅煙草として鼻煙壺に納めて携帯し、出先き出先きでどこでも自分が指頭で以て鼻孔中に入れて楽しむ者もある。これはたしかに舊來の文人墨客の間

にはあたり前の風習として見られてゐた。自分どももどうかすると之を試みにやつてゐたのである。上海で吳昌碩翁の邸に遊びに行くと偶々來訪の陸純伯翁（陸心源息）などと共に香を語る。語りつゝ翁は自分で何れも鼻孔に指頭で以つて之を入れるのである。その手の恰好と云つたら見ものであつて確かに一幅の畫になると思はれたのである。自分共もかうした文人肌の連中と一緒になつたときは試みて見た。なるほど夏の夕など殊によろしくて香爐入らずと云つてもよろしい感じがしたのであつた。尤も吳昌碩などは自宅に行つて見ると生前周の大鼎などを書齋の一隅におき之を肩籠としてゐたのを見た。いつ行つて見てもさうであつた。古籙文の大家であつたがかう云つた奇古愛すべきものに對して存外平氣でゐたやうな感じがしたのである。時には日本人で支那籍の旅行者が旅先きから支那の香爐と稱するものを求めて日本へ將來する。本當の支那の古銅器を見てゐない人であると日本から行つた品物を態々高價を支拂ひ關稅までかけて日本へ逆に持つて歸へるのである。香爐の土産物には頼だ珍談がまだ色々あるのであるが省筆しておかう。

### 三十六 扇 面



扇面の優物は十數年前小柳滿堂主人鹿南湖君が王建章の扇面數十點を日本に將來し朝野の士に清鑑を請はれたことがあつた。それ以來日本ではひどく支那扇面の聲譽を認めるやうになつた。從來はあまりよいものが來ないものであるから之を知る機會も少なかつたのである。然るを今度又古名畫の展觀に唐宋元明の傑作が日本支那雙方から持ち寄せられ上野で未曾有の陳列があつた。その中にも明詹景鳳の扇面を始め、かなり澤山の名畫が出品されてゐたので相當の妙趣が理解されて來たことと思ふ。古書畫の鑑賞に扇面の形式を用ひたことは頗る面白い。

支那では扇面と云ふとその名畫なら名畫のみを貴ぶやうに出來てゐる。さう云つたものはその名畫を骨から取外して別に之を仕立て帖にするなり軸にするなり又額椽に納めるなりする。ところが又その骨の方を尊ぶやうに出來てゐるのは必ずその骨を愛しその畫の方は取り去り又他の繪を之に貼る。貼ると云ふよりも今では畫に骨を挿入すると云つた方が適當であるかも知れぬ。骨には白檀その他の香木名木を用ひたるあり、又見事な彫刻の施されたるあり、無地の竹を用ひたるあり、斑竹を用ひたるもあり色々である。そしてその骨も畫も共に名作と云ふものは更にその紙質を見ると紙が又乾隆の梅花紙を用ひてゐるとか相當立派なものが用ひられてゐるのである。文人の酒席などに出て見るとか

うした三拍子揃つた見事な扇面が列席の賓客に一々廻はされてその批評を求めようとするのである。そのとき主人から批評させらるゝことは名譽のやうなわけであるが、實は衆人環視の裏でメンタル・テストをやらされてゐるわけであるから大事なところなのである。迂つかり褒めすぎてもよくないし悪く云ふわけにもいかず中々よく實際の學問と、たくさんものを見てゐるあたまとがなくては困り入るのである。時々疑問のものも出されるのであるから、これは結構なものだと云ふやうなことで口を滑べらしでもすると落第である。扇面の出る酒席はよほど考へてゐなくてはならぬ。始めから出ると判つてゐるわけでもないから仕方がないのである。されば運まかせで行くの外あるまいと思ふ。しかし文人の邸宅で月の夕、窓簾近く佇みて扇面を使つてゐる景趣を見るなど悪くはないものである。よく文人どもが「珠玉素月に搖らぎ、竹影清風に動く」とか「簾を捲けて俗客なく、清風故人來たる」などと云ふ句を見ることがあるが、かうした宴席酣なるときの扇面を映じた句ではないかと窺はるゝのである。

珠玉搖素月

竹影動清風。

捲簾無俗客

清風來故人。

市井の翰墨餘光



扇面を持して庭に出て池亭に佇むの景趣は一幅の畫を聯想せしむるものであるが、尙その扇面そのものを取りてその骨を抜き去り、扇面そのものを採りて以つて額縁に納むるもの、これ亦文人幽齋には何よりふさはしいものであると思ふ。自分も時折り北京あたりで入手した乾隆の樹下鍾馗の圖であるとか、又紺紙金泥樓閣山水の密畫などを取り來たり之が骨を抜き去つて紫檀の額縁に納むる如きことは趣味として面白く眺めらるゝのである。之を帖に仕立て、時に繙くのもよろしいが額に掲げて觀賞するの亦一層面白いのである。

しかし人に贈物として贈るにはその骨抜き扇面の紙のみを贈ることがあり、又九華堂あたりや舒蓮記あたりの仕立てた完備したものを函入にして贈る場合などと色々あるのである。骨のない紙だけを贈るはその紙だけのこともあるが、多くは自分の詩を入れて饒別にするとか古人の詩のあるものを贈るとかするのである。けれども自分共は北京あたりでも支那人側から自作の詩を入れた「爲め書き」の扇面を贈らるゝことがある。これは何よりも文人らしくて受ける氣持ちもよろしいのである。翰墨仲間の贈答品はかうしたものに致したいものであると思ふ。

## 三十七 花 瓶

支那を行脚してどことなく歩いてみると、古玩店が中々目につくがその古玩品の陳列では大抵花瓶が何よりも目立つ。それと云ふが花瓶はその數量の多きばかりでなくその大きいこと又その色の變化に富めること又店頭の突当たりや左右の壁の棚に陳べられてゐるからである。それ故文人墨客に限らず誰れでも古玩店に足を踏込めばすぐ花瓶の目星しいものにぶつつかるわけである。

ところが支那古玩店と云ふものは花瓶の感心したものは甚だ少ない。均窯とか乃至は染付けの大明あたりの優品も見えないではないが、どうも釉藥のあがりの思はしくないのが多い。辰沙などで随分見事なものもたまにはあるが、その紅の色の加減の丁度よい處を氣持ちよく出してゐるものとなると眞に寥々たるものである。しかしたまに宮中の寶物がどうかしたはづみに民間坊間に賣り物に出ることがある。かうした出處のよい物には屑は少ないのである。ところが實際古玩店でも立派な花瓶の多いやうなうちは大抵進物用贈答用の花瓶を陳べてゐるのであると評するものもある。と云ふのは今はまさかそのやうなこともあるまいし、殊に都が南京に遷つてからのペイピン（北平）と云ふものは昔



の北京のやうな譯にもいなくなつたが、昔し北京では要路の大官連中は自分で毎日のやうに人から贈らるゝ花瓶とかその他の品物を纏めて、それを資本に人をして古玩店を坊間に出させてゐたものであつた。今でも北京玻璃廠方面にはその式の店があるとの事である。

大官の後援してゐる店とか、大官自身が人にやらせてゐる店とか云ふものにはその品物が贈答用のものであるからちやんと支那式の立派な箱に入れてゐる。例の箱の中は黄色とか藍とか紅とかの絹地もてボックリ臺のまゝ嵌まるやうに出来て、そのおとし蓋には見事な正楷で以つてその花瓶名の文字まで刻して入れてあるのがある。そして斯の如き品物はおのづからその店のうしろにゐる大官のところに賄賂として進物に使ふのである。大凡何と云ふ局長の處へ贈り物をするには何と云ふ古玩店で買求めたものでなくてはいけなないと暗々裏に噂され又聯絡がとれてゐる。そしてその代物はその店からその大官の處に納めらるゝためである。そして幾日か経つと又その同じ代物がその店の棚にその箱と共にそつくり返つて来る。そしてそれが又大官の手許に行く。行つたり來たりでその代物こそ忙しいわけであるがしかしその間にその店に落つる代價はたいしたものである。つまり代物は形式的であつてその店にかねの落つることが眼目なのである。いつも贈答品の多いうちはかうでもしてその骨董品

を始末しなくては溜まる一方では仕方がないと云はれてゐる。

支那での進物には花瓶や銅器のおきもの計りでなく實際立入つた話を見ると、全くの美人そのものを贈らるゝこともある。これは贈り物のうちの最も上の乗なるものであらうがその代りあとで中々厄介で又かねも大分かゝるのである。けれども相手次第ではかうした贈物が百の花瓶を贈るよりもたしかに有効な利き目を示すのであるから随分奮發するものがあるのである。これも支那式に云ふと美しい人性の發露であるからしてとやかうと評するわけにまらぬのである。花瓶の話が頓んだところへ脱線したわけだが事實花瓶は贈物としてたしかに多く用ひられる。又文人でも富豪でも邸宅のちやんとしたうちには一對二對の大花瓶の飾つてゐないところはないのである。しかし相當そのお値段も安くはないのであるから何れにしても骨が折れる。ところで最も新しい處では洪憲年製のものがある。濃やかな筆を使つて花卉山水美人種々の描畫が見えてゐるが、白地にかうした輕快な圖案を入れてゐるのである。洪憲とは袁世凱が皇帝たらんとして既に天子になれるつもりで早手廻しに年號まで作つたが遂に皇帝となることが出来ず、氣の毒にもすべて折角の即位の大禮もおぢやんになつてしまつたのである。ところがこの洪憲の年號によつて窯だけは立てられ、その時限りではあつたが焼物が焼か



れた。そのうちの花瓶などでその洪憲の年號を入れたものは少なくないのである。今日これが各所に見出さるゝことは一寸面白く考へらるゝのである。世には洪憲の銘に奇異な感じを抱いてゐるものもあるが、あとにも先きにもこの袁世凱のそれ以外にはないのである。

尙、花瓶に聯想せらるゝものに水注に珍らしいものがある。こはその普通に見る蓋付きのものではなくて、蓋も身も一緒に出来てゐて唯その底の方に管状の入口があり、内部に直立してゐるが外部からは決して見えなく出来てゐる。水はこの管を通して入れらるゝのであるから蓋の必要は少しもないのである。この水注は大抵桃形をなし翡翠窯のものもあり又描畫のものもありその大さは大中小様々である。その構造の奇異なるものゝあるが爲め時折り文人たちの間に珍とせらるゝに至る譯であるからこゝに附記しておく次第である。

### 三十八 硯 屏

硯屏は硯の向ふへ立つる屏風の義なることは云ふ迄もないが、こは文房具行脚のとき屢々目にとまるものである。文房具に凝るとは日本人よりも甚だしく、支那文人の間に在りてはこの硯屏に各種各

様のものを見るのである。

- 一 濼溪石硯屏
- 二 白玉硯屏
- 三 楠木硯屏(左手高南村硯屏)
- 四 大明年製染付燒物硯屏
- 五 乾漆硯屏

などのものがあるがそのうちにも濼溪石のそれは湖南省濼溪石にて作りたること勿論であるが、その石層の色の異なるを利用して樓閣山水、花鳥などを圖案化して現はしてゐるものがある。その層は淡緑なると暗紫色なるとがあり、巧みにその色の使ひ分けをして質感を寫生的に表現してゐる所に特色を見せてゐる。

日本では硯石と云へば硯函を聯想せしむる位にいつも函を伴つてゐるが、支那では函を用ひることは殆んどなく普通は硯のそばには硯屏を用ひて卓上の裝飾となしてゐる。中には隨分堂々たるものがあり、又之に有名な文人墨客古聖賢の墨蹟などもあつて座右録を記せるものもあるのである。こは硯



に硯録のあると同じく硯屏にはその文人の好む語を刻せるものや、又その嗜好による古畫を入れてゐるものもあるのである。硯屏の變つたものには之に水滴の附屬せるものがある。古雅にして面白く且つ調法なものである。

かやうにして硯屏だけでも色々あつて古玩店あさりをしてゐると古玩の好みにまかせ如何なるものでも蒐集することが出来る。若しそれ書畫の卷軸から鐵畫、懸額、對子の如き類のものになると、かなり色々なものがおのづから目に立つのである。こゝに述べた多様の好みは唯その一例に過ぎないのである。どうかすると將棋の如きものから、酒杯佩飾の如きもの、眼鏡入れ鳥籠の如きものから、大きいものとなると墓陵の前の石人石馬石羊の如きものから、六朝隋唐あたりの石佛の像や首と云つたもの、又冕冠衣裳に儀仗用の諸道具と云つたやゝ古道具式のものゝあるところもある。ともかく目うつりがして何物にでも興味が湧き起るのである。されば文人墨客氣分の人士は若しかう云つた市井の巷に古玩のひやかしに出かけると云ふ時は、一日がかりで時間を超越し途中飯館酒樓にて中食をする位の考へで出かけなくては十分之を味ふことは出来ないのである。

## 五 文房珍玩

### 三十九 筆

支那によく云ふ言葉に「紫玉の池中雨露を含み、白銀の箋上龍蛇を走らす」と云ふ句があるがこは筆硯を弄ぶ卓上の光景を吟じたものである。或は「落つる處風雨を驚かし、揮ひ來たれば鬼神を泣かしむ」だとか又別の言葉で「揮毫錦繡を列べ、落紙雲煙の如し」などと云ふ古句もある。何れもその用筆の趣を美化して面白く評したものであらうと思はれる。

紫玉池中含雨露

白銀箋上走龍蛇。

落處驚風雨

揮來泣鬼神。

揮毫列錦繡

落紙如雲煙。

と云ふのであるが又筆そのものを褒めては「囊中穎を脱し、夢裏花を生かす」なんて云ふ大變な讚



辭で筆に頌徳表を奉るものがある。それだけに支那人自身の筆を大切にし又之を利用することも非常なものである。支那の田舎をあるいてゐて自分が旅先で萬年筆など出して使つてゐると不思議がるのである。こはその取扱ひを知つてゐるものゝゐないと云ふ事實を證せるものであつて、これ迄どれ位自分は之を體驗してゐるか判らぬのである。そのどこ迄も古來の毛筆のみが重用視されそれ以外のものはペンも鉛筆も知られてないのである。そこへ行くと支那の田舎のひろいことがわかる。又支那の實に大きいことがしみ判るわけである。日本にゐる丈では到底かうした實感は得られもせず又想像もつかぬのである。

支那の社會の毛筆をよく重んじ之を愛用することは以上の通りである。然るを昔から能書筆を擇ばずとか、書は姓名を記すに足るとか色々のことを云ふことは人の知る處であるが、本當の文人界ではさうは云はない。弘法大師は筆のことゝ云ふと實に八釜しかつた。筆などはどうでもよいとは決して云つてゐない。又書は書けなくともよい。姓名だけ書ければ澤山などと云ふのは頂羽の如き田舎そだちの野人の言と見られる。旗亭の老爺とか茶館の男とか云ふ程度のものゝ云ふ所であつて、本當の文人仲間では筆のことや書のこととはかなり八釜しく云ふのが當然である。それで自分は支那内地を歩

く度毎に筆の工場を見たり、筆匠の苦心に就いて親しくその作りかたを教へてもらふのを楽しみとする。何と云つても支那で文房具の天下一と云ふのは湖筆徽墨である。湖州の筆と徽州の墨と云ふのが支那四百餘州第一のものであると昔からされてゐる。そこでこの二個所とも自分は文具行脚に身を窵し之を踏査に出掛けて行つたのである。つまり

筆は浙江省湖州産のものを天下第一となし、

墨は安徽省徽州産のものを天下第一となす、

と云ふのである。北京あたりの文房具店を訪ねて見ても紙屋がすべて南紙店と書かれてゐたり筆墨が湖筆徽墨と書かれてゐると云ふやうにすべて南方のものが稱せられてゐるが、何と云つても南方は昔から文人の淵藪であり従つて文房具も又南方を古くから本場としてゐるから仕方がないのである。

筆は上海あたりでは李鼎和だとか老文元だとか云ふのが廣く知られ、又杭州へ行つて見ると舒蓮記邵芝巖あたりの筆が城内の筆匠として場所もよい處にあるだけに喧傳されてゐる。チンホファン清河坊に行けば誰れでも實地のところが見られるのである。しかし本當の本場は湖州の田舎にまで這入つて行つてその所謂湖筆なるものを獲て來なくてはと云ふ考へから自分はひとりて以つて湖州まで運河



江上を舟行して之を極めて見たのである。湖州の地名はその土地ではウーゼと云つてゐるが筆匠の大なるものはワンイーピン王一品の店である。次は胡文瑞費連青と云ふ店である。その他尙二三軒もあるがその店の構へは何れもさうたいして大きくもない。しかし王一品の筆工場は更に田舎に設けられて大仕掛けにやつてゐる。一帯に浙江方面にかうしたよい筆の出ると云ふのはその材料たる筆毫の適當なものがこの地方、殊に武康方面から出ると云ふことや、竹管のよい手頃のものが嘉興地方からたくさん産出すること、これらの事實が又大變な關係を持つてゐるのである。何にせよ昔から浙江は筆の本場として自他共に許してゐる有名な所なのである。

湖州の本場で調べて見ると筆の最良なるものはその毛が純羊毫にしても、純紫毫(兎)なるにしてもその眞品と稱せらるゝものは冬淨したものでなくてはならぬとされてゐる。そしてそれは必ずその筆管を持つて行つてその次第を明記し刻してゐるのである。即ちその好例を示して見ると、

- 一 貢品眞冬宿淨純羊毫
- 二 貢品長韻眞冬淨純宿羊毫
- 三 眞品正冬淨純紫毫大卷筆

四 極品眞冬淨純紫毫策筆

五 極品三料淨純冬紫毫

などと云ふのがあるのはその一例である。こは胡文瑞の監製の名筆に就いて述べたのであるが、その筆管の刻文そのものも亦頗る面白く清楚に出来てゐるのである。それらの冬毫雅管に刻された文字を見るだけでも自分はいよいよ氣持になるのである。が更にかうした筆の名稱に又かなり風韻のあるものを刻してゐるのである。左にその主なるものを示して見よう。

湖筆の雅稱

- 一 淨純羊毫
- 二 非秋垂露
- 三 珠圓玉潤
- 四 龍跳天門入紫微
- 五 御賜天香深處
- 六 淨純狼毫

文房珍玩



- 七 烏龍水筆
- 八 加料七紫三羊毫
- 九 五紫五羊毫
- 十 金鑾左右振奇才
- 十一 揮毫落紙如雲煙
- 十二 春光醉目前
- 十三 詞林妙品
- 十四 白鳳吐文章
- 十五 指揮如意
- 十六 精神妙用
- 十七 飛花入硯池
- 十八 玉映冰壺
- 十九 雲中白鶴

## 二十 青雲得路

自分は平生三代の篆書を書いてゐる上から狼毫の筆を最も愛用するのであるが、しかし湖筆は羊毫となく紫毫となく各種のものを蒐めて見た。後に又湖州より態々數種取寄せたこともあつた。その中には鸚毫と稱し鷄毛のみから出来てゐるものもある。こは、く、に、や、く、に、や、し、て、べ、ち、や、つ、く、ば、か、り、で、至、つ、て、使、ひ、に、く、い、筆、で、あ、る、が、特、殊、の、場、合、に、は、こ、の、難、で、な、く、て、は、困、る、と、云、つ、て、ゐ、る。總體に支那の文人共は羊毫の極めて柔らかいむしろ腰に力のないもの、方を却つてよく使ひこなしてゐるのである。日本人はどちらかと云ふと腰の弱い筆は使ひこなすに骨が折れ又甚だたよりなく感ずるのであるが、支那の人々はその弱いものを却つて好むやうに見えるのである。これは國民性の然らしむるところでもあらうと思はるゝが何とも致しかたのない處である。尙日本には昔から水蘆のあと、云つて海岸に生ずる草の根を筆に用ひてゐることがあつたが支那にはこれはまだ見ないやうである。日本にては北九州筑紫の海岸に今尙生じ平助筆のうちにこれがあるのを見たことがある。

## 四十 紙



古人の云つてゐる語のうちに「秋聲の露は千章の錦を繞り、春曉の雲は五色の箋に流る」と云ふのがある。こは紙のことを敬して形容的に誇張した語であることは云ふまでもないのである。即ち

秋聲露繞千章錦

春曉雲流五色箋。

その詩箋となく書箋となく支那の紙はすべて翰墨本位に出来てゐてビジネス的のものではない。牽きの強い包紙式のものとは外國から輸入されてゐるのである。又ハトロン式の厚くて強いものも見ないのである。すべて支那紙と云へば多く風雅文墨向きのものとなつてゐるの感じがするのである。近來上海方面には支那製の包み紙を見るに至つたが、多くは廣告用のものに過ぎずして、何れも破れ易く唯體裁の爲めにまじめ包むと云つた心持ちが見えてゐるのである。

次に支那の田舎各方面を歩いて見るとどうかと云ふに、地方では支那紙の用途と云ふものは家庭用のものが多くして商用包紙と云ふやうなのは少ないやうである。今一般にひろく支那の全體を通じて支那紙の用途を見ると云ふと

- 一 文墨、寫字用の場合
- 二 書籍、印刷用の場合

### 三 廟觀、宗教用の場合

### 四 家庭、雑用の場合

と云ふが大體の分けかたになると思ふ。がこのうちで元來支那紙の發達は文墨用と云ふことが最も主なものであり又之に適當してゐるやうに出来てゐるのである。その、筆を落とせば雲龍を起す式の變化を現はすと云ふのも支那紙なればこそと思はるのである。忽ちに之が千章の錦ともなるのである。ところで支那の田舎の各地方を歩いて見ると點心(菓子)や果物類を買ひ求めたとしても大抵は蓮葉に包んでくれるのである。蓮葉を用ひるのはまだよい方である。肉類などは唯豚の切りみ、肉片を露はし天秤棒の尖に引かけて持ち歸ると云ふが普通である。菓子その他のものを紙袋に容れるとか紙片にて包むなど云ふことは思ひもよらぬことである。古新聞の紙片なども田舎には殆んど見ないのである。一體村落で新聞を読む家庭なんかで有りはしないと云つてもよい位である。たまにあつても一週間も二週間も前の古新聞を戸毎に廻讀してゐる位が精々の處である。と云つたわけであるから古新聞紙といへども中々支那の田舎に這入つてゐては求められないのである。元來新聞など見るほどの氣持ちにもならない位呑ん氣になるのである。



想ふに總體に支那では紙片紙屑といへども大切に作る氣持ちがある。乞食や細民がよく市井のごみ溜めを覗き棒の尖でかきまぜては紙片反古の類をさがし出してゐる光景はその間の消息を證明せるわけである。こはつまり紙片そのものでも勿體ない氣持ちがしてゐるのである。されば田舎の道路を歩いて見ても反古一つ落としてゐないのである。反古紙片のざらに散つてゐる日本の路傍を見てゐて自分共は支那の路上を見るとよほどその點で異なつた感じを受けるのである。

尙支那では田舎でも市井でもこの筆紙墨に對する感じと云ふものは、思想が舊いと云はるゝかも知れぬが、支那人は總體丁寧な氣持ちである。之を粗末にしないのは勿論、つましい考へを持ち苟くもしないと云ふ態度であるやうに見える。これは元來が文字に對する尊重心から出てゐることでもあらうと考へられる。ともかく自分共が多く文字あるの士を見ると大抵のものが「筆端三昧の力、雲外一生の心」と云つた氣持ちであることが判かり、又「心を觀る水月と同じく、手を揮へば雲煙を成す」と云つた心持ちであることがおのづから紙面に出てゐるやうな感じがするのである。

筆端三昧力

雲外一生心。

觀心同水月

揮手成雲煙。

から來るのである。固より文字なきの徒は紙も筆も眼中にないことは云ふを待たぬが、それにしても紙を大事にする所の考へだけは誰れ人にもあるやうに思はれる。又寫經をやつて觀音經を毎朝淨書するとか、その他多少信仰がかつた事に紙を用ひるとか云ふ場合の如きは最も大切に之を取扱ふのである。書籍印刷の方面の事は云ふも更なり、又文字を書く場合でなく宗教用にして全く之に金銀の色を塗つたり、又之に薄い箔を貼つて神前で焚くと云ふやうな儀式上のことに使はるゝ事がある。この神前用の紙と云ふは支那全體を通じてその量が不變なものになる。又ユワンバオ元寶と稱する馬蹄銀型に作つた紙であるとか又方形に切つて束ねた所の焚紙、これらはすべて信仰上に本づいてゐるもの丈にその量は夥しいものである。尙又その文字を書かないで家庭用として消費さるゝ場合を考へて見ると、茅廁用として男女の使ふものがたいしたものである。これは田舎では使用しないやり方をしているものもあるわけであるが、兎も角もその落し紙として使用せられてゐるものが夥しいものである。あちらでは之を草紙と稱し馬糞紙を薄く瀘いたやうな粗惡な紙で三四寸大に切られてゐるものである。その田舎各地に貨物として這入つて來る量と云つたら驚く可きものである。浙江であれ安徽であれ江西湖南四川いづれの地方に行つて見ても田舎路を天秤棒の掛け聲も勇ましく擔ぎ歩き、エーホ



一・エーホーと重もたい荷物を運んでゐるものは大抵その紙であると見ても差支ないのである。と云ふのは三寸なら三寸、四寸なら四寸と一定の大きで四五寸づつにも重ねて截つたものを一單位の束にして之を二百個、三百個とまとめて一荷にしてゐるのである。その運搬の盛況振りと言つたらないものである。殊に船着場などでは引切りなしにその運搬の光景が続いてゐるのを見るのである。

新聞は支那のことであるから發行紙數と云ふものが誠に少なく、その國土のひろきに拘らず實は甚だ貧弱なものである。幾萬と出るものは數へるほどしかなく大抵は三千五千どまりと云ふ程度のもので、十萬部を突破した新聞と云ふのは漢字新聞では殆んど聞かないのである。宣傳ではえらい事のやうに云つてもゐるが用紙はそれほどに這入つてゐないのである。日本とは丸きり國情の異なる丈それ丈すべて紙の用途などもひどく違つてゐるのである。要するに支那の紙はその翰墨界の筆や墨の發達と同じく文人向きであり、どうしてもあの支那書箋なり詩箋なりと云ふものが最も用途に適當してゐるやうに眺めらるゝのである。自分共支那紙を平素調法して使用してゐるのも全くその爲めであると云へるのである。

支那文墨界の話で、日本にあまり見ない紙のことで特にこゝに述べておきたいのは、その白紙や黄

紙を用ひるばかりでなくその各種各色の色紙が盛に使用されてゐることである。これは毎戸正月新禧を祝ふ爲めの門聯の紅紙にしてもが大抵のうちは多く紅紙を使用してゐる。それが山西省太原地方に行つて見ると態々各色の絞り染めに染められた面白い紙を使つてゐるのである。その他すべて支那では紅事と稱して吉事のあつたときには紅紙や金紙銀紙の使用されるのがたいしたものである。又掛軸用のものとしては上述、紅金銀の外に淡綠、金粉、斑黃、青碧、淡紅と色々様々のものが用ひられてゐる。又書翰箋用のものとしては日本では洋風のものとは別として、白の卷紙一點張りであるが之とは異なり支那では花模様や山水、人物取り取りで極めて淡く彩色された詩箋が用ひられてゐるのである。又その封筒にしてもその中央に紅色の線を大きく染め出して受信者の心持ちを明るくし快感を得させるやうに出来てゐる物があり、又薄いほかした色で目出たい圖案を現はしてゐるものもあると云ふやうに色をその場合々に適するやうに應用し染め出してゐるのである。その爲めに支那紙は一層色彩の爲めに榮えてゐるわけで明かるい氣持ちが見えてゐる。日本ではそこ迄紙の上に色を生かして使ふことをしてゐないのである。



## 四十一 古 墨

後唐の李公主が當時紙は澄心堂の紙、硯は龍尾、墨は李廷珪の墨と云ふことを云つてゐる。これはその頃の文房具の最優なるものを選抜して云つたものに相違なからうと思ふ。ところで上にも述べたやうに支那四百餘州のうちで文房具と云へば湖筆徽墨と稱せられて徽州の墨は天下一品と云ふことになつてゐるのである。ホイチョウ徽州はその點から云ふと湖州の筆と一緒に天下の名墨の元祖であると云へるのである。

固より墨も時代によりその本場の製作に變遷があり、又その元祖の家も變はつてゐると云ふわけであるから、墨そのものゝ實質も亦變遷して來てゐることは事實である。後唐の李廷珪の墨と云ひ又明代の程君房乃至は方于魯あたりのものと云ひ、又古歙シウニン休寧の曹素功の墨と云ひ、又徽州の胡開文のそれと云ひそれぞれその墨に特徴があり嗜好もちがつてゐるやうに察せらるゝ。之を今日杭州のチンホファン清河坊に榮ゆる邵芝巖あたりの墨に比するときは又自ら差等のあるのを覺ゆるのである。

古墨の味はその墨色、紫玉光の雅趣を見せてゐるものに在ることは云ふを俟たないことであるが、その墨色と云ふは必ず硯面そのものゝ濃墨の程度如何と大いに關係を持つてゐるのである。硯の話に就いては後章に詳細に互つて述ぶるからこゝには省いておくが、要するに硯のよいものを用ひると云ふと名墨の本色が遺憾なく濃せらるゝわけである。古の名墨はその質がよろしく、たとひいくらか膠質の失はれかけてゐても名墨にはその特色をはつきりと窺ふことが出来るのである。古名墨の有名なものは古來程太約の墨譜を始め各種の墨譜に出てゐるが世間に多少知られてゐるものもかなりあらうと思ふ。しかしその費用におかまひなく監製してゐた御物用の名墨であるならば、比較的その名墨としての色を最もよく露はしてゐることであらうと思はるゝのである。

自分が往年長江は安徽タートン大通から硯山行脚を試みた際のことである。ユウテイイン漁亭の村里から舟行、萬安街から曹素功の本場休城（休寧城）に出で、水郷を下り屯溪に泊し胡開文の工場のある徽州府と云ふに分け入つたことがある。こゝは古の歙縣であつて城内の光景見るからに文房具街の觀のしたところであると思はれたのであつた。

古歙の故地徽州の城内に行つて見ると自分の知つてゐるせいでもあつたか胡姓を名乗つてゐる墨莊



がえらい多く見當たるのである。街上に胡とある看板を見る老舗は大體墨莊であると見ておいても差支ない位に澤山あるのである。曰く胡開文、曰く胡正文、曰く胡同文と云つたのを始めとして胡と云ふ墨舗が仰山あるのである。そこで自分はその墨莊と云ふ墨莊は大抵よく注意して見て中に胡開文その他數軒を選び立寄つて見た。そしてその工場にも這入つて見た。今日支那の墨の工場はいかにやつてゐるかを視察し親しく墨塊を手でこねてゐる所も見たり、墨の型に嵌めてゐるところから又その銘の文字に金泥を塗込んでゐる所など一々こまかく見たのであつた。その一斤に付て二挺掛けのもの、四挺掛けのもの、八挺掛け十六挺掛け三十二挺掛けと色々大いさを違へて監製してゐるところを見たのである。職工は多く子供を使つてゐるが、三尺ばかりの長さの板にそれぞれ墨の大いさの凹みがあるまた穿たれてゐてそれが型になつてゐるのである。型に入れられた墨塊はいくらかその乾燥して來ると之を型から出して大きな籠に打ちあけられるのである。そのやり方は如何にも無雜作で多量製産式にやつてゐる様子を手にとる如く視察したのである。

その金殿餘光であるとか紫玉光であるとかさうした名墨の銘を入れるにしても、工人の子供たちが唯々その工場に卓をかこみ列び居て小皿に溶かれた金泥をすらすらと筆もてよい加減に一面に塗つて

ゐる様子を見る。やがて金の字殿の字と云ふ凹みのある部分に這入り込みたる金泥を残し他は墨面を磨擦して之をきれいに拭ひ取つてしまふのである。そのやり方は機敏にして又鮮やかなものである。そしてその文字の明瞭に這入つてしまつたところを見ると、之を一々市場に向かつて出さるゝやうな錦の小函に入れ更に之が荷造りの方に廻はさるゝと云つた風であつて、相當その多量製産の事務振りを見せてゐる様子が目撃せらるゝのである。

古款の名墨にはその墨の小口に持つて行つて小字の銘が入れられてゐる。曰く貢煙、曰く頂煙、曰く超頂煙などある。がこれは何れも優良の名煙を用ひたることを示せるものであつてこの銘のある墨ならば墨色の秀れてゐること申すまでもないとの事を示してゐるのである。つまりその意味は、

一 貢煙——宮廷用の目的で作られた貢墨の義

二 頂煙——松煙はその煙室のなるべく頂の壁から採りて監製したるもの、即ち上の部のものの義

三 超頂煙——頂煙よりも壁の一層上の部分より採りたるのにて作りたる絶品の義である。若し名墨を手にしたるときはこの方面の文字にも注意をして見るの必要があるのである。



日本の鳩居堂、古梅園はともかくも、朝鮮李王家美術製作所（京城大平通り）あたりの工場を親しく視察して見ても支那のそれの如く大きくなく、又その煙室の様子などもちがつてゐる。安徽省では硯山が全山松樹林で蔽はれそれを主要の材料となし墨を造る迄には阿膠、香料などの加料を用ひるは云ふを俟たぬが、總べてその山の松樹が墨となりその山の石骨が硯材として掘り出さるゝと云ふわけであるから、古歙の天地は樹木も山の巖石もすべて棄つる所なくして文房具として役に立つてゐることが判るのである。従つてその墨の膠の度合とか粘り方などもすべてその石質の硬度に適合したやうに出来てゐることが察せらるゝのである。

日本では北九州の炭田に石墨と稱する一種の天然墨が偶然発見せられ河原田平助翁、之を將來して自分も試みに之を磨つて見たことがある。また偶々來朝中の故金紹城君や周肇祥翁などの清鑑に供したこともあつた。金周二翁もひどく之を珍とせられ、上野美術館内にて即興之を試みたことは一挿話となすに足りることである。二翁も支那に之を聞くのみで未見のものであると云つてゐられたが、之に膠を加へてその墨色を出し之を味つて見ると何等古歙の名墨と變りのないものであることを知り得たのである。かうした天然産の石墨は別段礦物學上からは珍とするに足りないものかも知れぬが、そ

れですぐ書畫のかける丈の墨色を出してゐると云ふことは珍中の珍とするに足りる話であると思ふ。

#### 四十二名 硯

硯は古來文房具中の王と稱せられてゐるほどのものであるから、他の筆紙墨から見ると支那翰墨界に在りて最も材料が多く、又その種類藝術美の點から云つても又その愛玩振りから云つても一番述べべきものが多いのである。又文學的の方面から云つても東坡の名文のあることは云ふも更なり、尙俗間にも誰れ云ふとなく「良田我れを喜ぶ耕すも税なし、美質君の如きは磨して憐らず」などと云へる徹底したる言葉も云ひ古るされてゐるのである。日本にも大分この古硯がきはい響へにも用ひられてゐる。こゝにはその文言を遠慮しておくが、その世間の嗜好は更に一步を進めて近來婚禮用の進物として調寶がられ曰く、いくら磨してもへらぬものは硯なりけりとか洒落るものがある。こは鷗外博士が生前に婚禮の祝物としてどちらへか贈らるゝときその古硯の目出度き意味を寓したものだなどと直話してゐられたことのあつたことが思ひ出さるゝのである。

良田喜我耕無税

美質如君磨不憐。



吳都山下名標第一

永嘉谿裏價重千金。

などと云ふ句のあるのも蓋し硯の聲價を賞してのことであらうと思はるゝ。こは墨の方例へば「玉露磨し來たれば濃霧起り、銀箋染むるの處淡雲生ず」と吟じられてゐる句に併せ考へてその趣の自ら相通するものゝあることを感ずるのである。自分はどこ迄も硯の事に就いては特に他の文房具よりも博く且つ深く述べ、そして實地にその硯山行脚を試みた話から又支那各地で鑑賞した幾萬の古硯などに就いての感想なども取りまとめ後章に改めて詳述することゝし、こゝには省いておきたいと思ふのである。讀者幸に之を諒とせられんことを。

四十三文 鎮

支那文人間で書鎮と云はれてゐる文鎮の話は、日本ではよほど専門がかつた話になり一般には廣く興味を牽かないものゝやうな氣持ちもある。しかし文人墨客の卓上に在つてひとり愛嬌を他の文房具に對して示してゐるのはこの文鎮であると考へらるゝのである。先づその古來から見る形に就いて見るに随分奇古なるものがあり、又狂態を演ぜるものがあり、滑稽なるものがあり、千變萬化であると

云へるのである。自分が手許に平素愛玩してゐるものにも多少それに近いものがある。それと云ふが多くの鑄金ものであるから如何なる形に拵らへようと殆んど隨便で、いかなる形でも作り得たものであらうと考へらるゝのである。例へば

- 一 總角の牧童が小牛に跨がれるもの
- 二 千里の馬の狂奔せるもの
- 三 一角の麒麟
- 四 獅子の蹲踞せるもの
- 五 魚符
- 六 帶鉤の出土品
- 七 銅印類
- 八 白帝城下の黑猿
- 九 水禽彫刻
- 十 古鏡

文房珍玩



十一 漢 尺

十二 玉 硯

これらのうちには一二玉石の混入せるものもあるが兎も角書鎮には制限はない。手頃のものならば何でもよろしいのである。窮屈に一定の形したものときめなくてよろしいのである。今日支那に出来るぎりきつた棒状をなせるものでは趣味も何もないのである。本來が翰墨用のものであるからしてなるたけ古風で雅味のあり風韻に富んだものであればよろしいのである。翡翠や孔雀石の自然の塊のままの物でもよろしいのである。しかしあまり高價なものでない方がどちらかと云ふとよろしいのである。半分は愛玩物を兼ねたものであるから強ひてあまりむつかしく考へない方がよろしいのである。

かやうに文鎮は何でもよいのであるからこれ位形の範圍の廣いものはない。唯翰墨用のものとしては第一主人公自身の趣味に合したるもの、又その傳來歴史の面白いもの、又風物を聯想するに適當なもの、又自分の各地游歴の記念となれるもの、學術資料となれるものなどであつて要するに脱俗したものであればよいのにきまつてゐる。けれども時には古代の貨幣形のものなどで書鎮に用ひられたものなども少なくないのである。唯河南洛陽の出土品土偶、馬犬の類とか又唐三彩の小皿類などには無

論面白いものも多いのであるが毀れ易いから適當しないのである。又六朝の鍍金佛や小さい石佛の首などには手頃のものもあるのであるが、これは氣持ちの上で勿體ない氣がして使ふ氣になれないのである。しかし自分の愛玩品としては何と云つても玉器類が一番ふさはしく思はれる。玉製の帶鉤とか、後凋の竹節を表はせるものとか、その他何の形したものでよいのであるが古雅なものであればよろしい。その次は鑄金もので脱俗氣分を示したもの。牧童の如く可愛くて罪のないものは殊に氣に入るのである。すべて文房具はその程度の差こそあれ何れも文人の愛玩品たることは同じわけであるが、わけても書鎮は玩弄品中の玩弄品であるわけであるからその實用の點などどうでもよろしいのである。母指に嵌めたる搬指の如きものでも漢玉あたりの氣持ちのよいものは固より結構であると云ひ得る。しかしその書鎮にして品のない厭やな氣持ちを起させるやうなものでも、若し蒐集してゐる主人公があるとするとその心が讀めて見透かされるのである。この邊は極めてデリケートなことであるからその心してゐなくてはならぬのである。

## 四十四 水 滴



小さい文具で古硯のそばにおかるゝものは趣味本位の高尙なものでなくては翰墨氣分に合はない。わけても水滴水注の類は何でもないやうなものであるが、これも文鎮と同じわけで殊にその容姿が大事な要素となつて来る。かく水滴は形次第のものであからなるべく俗でなく、文人風のものであり、支那氣分のたつぷり見えてゐるものであつて欲しいのである。

普通江南地方で翰墨界に用ひられてゐるものは新しいニイシン宜興燒の小水注であるが、その他に向古い時代の景德鎮の燒物があつたり又官窯、均窯あたりの見事なものもあつたり又描き畫のもので小物のものもある。朱泥白泥黄泥のおきまりのものゝあるは云ふも更なり、尙康熙雍正乾隆あたりのもので而かも立派によく保存されて温雅掬すべきものなどもある。或は又辰沙の見事なもので淺く水盤式に出来てゐるものもあるかと思ふと、又土燒きの壺型様のよい曲線美を見せてゐるものなどもある。或は又石叟の錫の水滴で明かにその銘が底に讀まれるものなどもある。之などは墨床など揃ひになつてゐるから成るべく一緒に供へておく方が統一がとれてよろしいやうに思はれるのである。

文人趣味の家庭ではその主人が書畫を毎日のやうに嗜なみ、揮毫に餘念のないと云ふやうなうちで大きい水滴が用ひられ、又筆洗や硯などもすべてが大きいのが用ひられる。そして無雜作に文房具類

は卓上筆筒の蔭におかれてあると云ふ工合で却つて之が爲め心易く感ぜられてよろしいのである。之に反して、日本人の書齋はどちらかと云ふときちんと片付けられてゐる傾きがある。あまりわざとらしく形付けられてない方が自然の趣があつてよろしいやうに自分は思ふのである。

#### 四十五 筆架

支那文人の句に「筆架山高うして虹氣現はれ、硯池水は満ちて墨花香ばし」と云ふがある。筆架は山の形にも時々作られ、臺灣では臺北の郊外に筆架山と云ふが聳えてゐるのを林本源の板橋の庭から打眺めたことがある。硯石の背景に筆架を立てるときは、さながら筆架山高うして虹氣現はるの句も吟じたくなるのである。支那文人の胸中察するに餘ありと云ふべしである。

筆架にはその性質上連山の形したものが多く、そしてその峯と峯との間の豁谷の取り方には深刻なるものがあり淺いものがありして色々であるが、中には自分が江南李文珍古玩舗で獲たものゝ如き、山村の景趣を細かく刻し樹林の下田家の野趣をさながら濛はしめ頗る密畫式の出来榮えを見せてゐるものもある。その刀痕の鮮かに連山の皴法なども一々指示されてゐると云ふ努力が見えるのである。



その他湖南の潯溪石を以つて紫峰の連山を背景に手前の麓には菊花の絢爛たるところを彫刻で現はしてゐるものもある。その手法を細かく見ると例の潯溪石の色の違つた紫層を用ひて紫峰の肌を現はし次に緑層を用ひて菊花そのものゝ清楚なるところを圖案化して現はすと云つたやうに出来てゐる。その細膩たる刀法によりて遺憾なく景趣が表現はされてゐるのである。筆架の藝術もこゝに至れば至れり盡せりと云ふ可きものであらうと評せらるゝのである。

以上に述べたものは自分が平素卓上で愛玩してゐる石刻の筆架を紹介したに過ぎぬが、尙一般に多く見當たるものには焼物の染付があり、描畫のものがあり、又香木に刻されたものがあり、又自然木の雅なるものを之に應用したるものがあり、鑄金ものもありと云ふわけです。つまり千態萬狀である。日本では硯には硯函を用ひる習ひのある關係上あまり筆架を用ひるものがなく、あつても割に少ない。たまに竹の小片などを硯函のうちに枕の如く嵌めてゐるものなどもある。

又筆架の代りに支那でその筆の穂尖に持つて行つて筆帽なるものを作り、之をその用の済んだ後は冠せしめて筆を大事に仕舞つてゐるやうなものもある。中には又始めから筆架に作り付けて筆帽のついてゐるて幾管をも列べて筆の挿入せらるゝやうに出来てゐるものもある。かくして筆架の種類はその

形態だけでも随分あるのであるが、何れにしても翰墨生活には卓上の同伴としてこれが是非なくては寂しい氣持ちがするばかりでなく、之がなくては筆の墨汁が桌面を汚してその都度々々困ることになるのである。

#### 四十六 印材

支那の印材は田黄凍と云ふほどのものでないまでも、壽山にしる翡翠にしる雞血にしるその佳良なるものは之を手にとり眺めてゐると、文人どもがそのよく「溫柔郷裏に明媚を増し、從容手上に工夫を費やす」など云ふ句を思ひ出さずにはゐられないのである。

溫柔郷裏增明媚 從容手上費工夫。

粧出梅花還帶雪 鑿成鳳翼欲凌雲。

實にその通りで「粧出せる梅花はまた雪を帶び、鑿成せる鳳翼は雲を凌がんと欲す」とその言の如くに今更の如く感ずるのである。すべて、印材の味は溫柔そのものであると云ふのが感じがよろしいのであるが、その田黄にしても魚腦にしてもそれが半透明のやうな曇りを見せてゐるものになると即ち



凍の字のつくものゝ部類に這入る。即ちテイエンホワントン田黄凍とかユイナウトン魚腦凍とか云ふものがこれである。つまりこれらの凍は溫柔の氣持をよく見せてゐるのである。印材の優秀なものとして傳へらるゝものには實に多種多様のものがあり、又文人によつてその好みも色々であるであらうが先づ、誰しも許してゐるものに次の如きものがある。

一 田黄並に壽山……福建省午縣

二 翡翠……緬甸境の雲南山境

三 雞血……浙江省常山縣

田黄は友人の福建出身、劉驥業君や陳寶琛翁あたりの郷土通の直話によると、壽山も田黄も同一の山の材であつてたゞその探掘する礦脈坑口の相違があるのみであるとの事である。田黄はそのうちの最善なるものを特に指して云ふと説いてゐる。その實物から見てもさうらしく自分も先づ暫くさうしておくのが妥當であらうと思ふ。尤も印材中壽山石くらひその範圍の廣いものはなく、印材の大多數は壽山で田黄とか山黄とか云ふのは甚だ少ないのである。日本で云ふと蠟石に當たる位のもので一般化された言葉と見られる。次に翡翠はその色の綠色なることは云ふまでもないが、然しやゝ紅味を帶

びたものは翡翠であつて綠のものは翠と云ふ等、分解的の説明を昔から付けてゐるものもあるが、必ずしもさうとのみ限らなくともよろしからうと思ふ。すべて翡翠も翠も之を翡翠と概しておいてよろしからうと考へる。こは南洋から廣東經由で上海北京あたりに隨分來る。もとその材のまゝで來るときは一つの大きな石塊で西瓜の如きものに見える。之を求めても割裁して見なくては、中味の果して翠であるか白味ばかりであるかは判らぬのである。之によつて見ると翡翠商は一つの大きな投機をやつてゐるやうなものである。支那漫遊の途次自分どもよく翡翠細工の工場に入り親しくその實際を見てみるとこれは又印材篆刻師のそれとは全く異なり大分大規模に又分業的にやつてゐるのを見て少なからず驚くのである。

雞血は見かけよりはその材が餘程硬く、従つて之が篆刻に際してもその針のある壺に當たるときはとても刻れないのである。そこでたがねで行かないものだから玉屋の手にかかなくては物にならぬと云ふことさへあるのである。かつて雞血の大塊で雞血硯を作つたらと云ふとき、江南の硯工が之を持ってあまし遂に磨玉師の手を煩はしてやつとのこと硯に仕立てゝもらつたことさへあつた。雞血の自然材はこれ迄自分の支那で見たものでは杭州西湖畔に永くゐた清野長太郎君のそれであつて、約一尺大



の大塊であつた。その色は雞の血色そつくりのもので實に見事なものであつた。その印材として呼物になつてゐるのでは東都郷誠之助男の寶藏せらるゝ大顆雞血印材のそれであらう。その數の夥しいものゝあるは之を見るだけでも眼福になるものである。

支那の篆刻はその刀の刃の付けかたが日本のそれとは全く違ひ刀身に對して直角にブツンと切つたやうな形に作られてゐる。日本の刀は斜に刃がついてゐるので鋭く刻するに便なやうに作られてゐる。日本のに慣れてゐるものは支那の鐵筆は取扱ひにくいであらうと察せらるゝ。尙材に篆字を入れる入れかたに就いては、從來の印を見ても首肯せらるゝ如く、その筆畫の様子には調子の高いものも多くて見飽きがしない。その文人の篆法を目のあたり見てゐると、材に篆書を先づ書きつけておくことなく行きなり鐵刀で以つて吳とか昌とか碩とかをすぐ刻りつけて行くのである。その間印面の中央に一線でも畫するの必要があるときは假りに見當をつける爲めに線を入れる位のことはあるが、大抵は直接篆字を刻してしまふのである。左文字で篆書を入れたりする代りに、あたまの中に字配りから筆畫の密度からすつかり残らず入れて掛かるものと察せらるゝのである。

印面の文字は原則としてその奇古掬すべきものを喜ぶが普通であるから現代のものや近世のものか

らは採らず古い時代ものから採る。又それに頗る雅なるものを見出すのである。すると文人のうちにはその偶然古人の玉印とか銅印とかを得て遂にその文句までをも自分に採入れるものがある。その篆隸が體もよく、そして材が氣に入つた材であり、形も大いさもすべて氣持ちのよい物である場合には自分の從來用ひ古るしてゐた稱號を急にやめてそれと取り代へ自分の名を變へてしまふものさへあるのである。印材の勢力もそこになると偉い底力のあるものである。かつて自分の友人で杭州城内上馬市街の寓居にゐた老人が或る古玩店から立派な一印材を入手した。ところがその印面に小篆で以つて

## 白眉翁

と横書きにあるのを見たのである。自分にも相談があつたが、爾後之を以つて翁は別號の雅印となさんと云つてゐた。翁は九十六歳まで生きると自信を持つてゐられたが昨年物故されたので自分は一層その思ひ出が深いのである。又四川の重慶に客中自分は省長の鄧錫侯大人に會つて文墨を談じたことがある。大人は自分の爲めに對聯まで揮毫してくれた。叟自千里來而將利我國。商聞四海之内是皆弟兄曰く。晉康鄧錫侯□□と落款を入れ自分の爲めに、爲め書きにしてくれたのであつたがその書齋にあつて卓上の印材を見たところが疑もなき漢銅印である。その印面には



驍威將軍

とあるのである。自分はそこで金石案などにある通りの漢銅印にまがひもなきものであることを話したところが、鄧大人の云ふに、自分は嘗て四成都に此の漢銅印を獲て鍾愛措く能はず依つて今自分の別號となしてゐるのであるとて、自分に贈られた聯に持つて行つてその漢銅印を捺して呉れたのである。今日自分が支那室に掲げてゐる驍威將軍落款のある書は正にかくして重慶衙門の或る日の思ひ出をなつかしむものである。

支那で自分がこれ迄見た印材のうちその材の方面から最も優秀なものとして考へられた物では北京の劉驥業君が秘藏の田黄凍山水、薄肉刻のもの一對の（各四寸大のものと記憶する）ものと日本では郷男の雞血絶品大印材數對これである。近來支那を歩いててもかうした見事な絶品には殆んど接することがなく、又噂にさへもこれほどの立派なものはないのである。時折り掠奪を恐れてどさくさに乗じ賣り物に出されるものなどもあるがそのうちにはかなりの名材も散見せられる。しかしその絶品として推賞措く能はざる者と云ふものになると殆んど聞かないのである。北京武英殿のものも云つても御寶としては稱するに足りるも稀世の絶品と云ふほどのものでないのが多いのである。無論その

城内坊間古玩店などにはそれほど絶品と云ふやうなものはないやうである。

尙印材に關聯したものでこゝに序でながら述べておきたいのは印肉のことである。支那の文人の間では印肉のことは「印泥」と稱してゐる。泥とはすべて柔らかくこねたやうなものを總稱した語であつてキントンを呼ぶにも豆泥と云ふ位である。印泥と云ふと支那では先づ江南地方で評判の西泠印社製の灑泉印泥が用ひられ、日本にも大分近來は來てゐるが自分たちも之を最も愛用してゐる。材料は支那で聞いて見ると艾から作ると云つてゐるが餘り突込んだことを追及するといやがるやうである。極上の印泥になるとその色は何とも云へぬ黄味のある朱色を呈してゐる。その材料としては一琥珀、二珊瑚樹、三金粉などを用ひるさうである。之を稱して文人間では八寶珠と云ひ、もと宮廷用のものとして賞美されてゐた物である。

乾隆時代の印泥で此の八寶珠と傳へらるゝものを自分も少量持つてゐるがその油が切れてゐる爲めそのうち陳麻油を注ぎ練り直して見たいと思つてゐる。かねて犬養木堂翁が自分の北京行のとき北京の多寶齋から陳麻油を少量求めて來てくれと頼まれたことがあつた。其の後木堂翁は自分自ら印泥を練り直しいつも潤ひのあるものを用ひてゐらるゝ。支那文人はこの印泥を取扱ふ時はかなり荒つほく